
魔法先生の世界

神道総破

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生の世界

【Nコード】

N4972N

【作者名】

神道総破

【あらすじ】

何故かネギま！の世界に来てしまった主人公、くましひゆうと神代悠翔、後は本編でどうぞ。転生モノではなくトリップモノです

親に……捨てられました(前書き)

処女作ですが、よろしくお願いします

どうか生暖かい目で見守ってやって下さい

親に……捨てられました

糞親父「悠翔、すまん家を出てってくれ」

悠翔「はあ!？」

あつ、どうも主人公の神代悠翔です

只今俺は人生最大の窮地に立たされてる

母「悠翔……ごめんね」

今謝ったのは俺の母さん

あまり重要なキャラじゃないから説明は省かせてもらっぞ

糞親父「すまん、口減らししなければ家はやっていけないんだ」

こいつは俺の親父、ムカつく糞親父だ

糞爺「すまんのぉ、フォッフォッフォッ」

こっちは一緒に住んでる俺の爺さんだ

俺に剣術を教えてくれた、いわば師匠だ

ちなみに剣術は、神代流、（くましりゅう）剣術という流派だ

それより！

口減らしするから俺に出て行ってか

ざけんな！！

つか、あそこで笑いながら茶啜ってる糞爺を追い出せよ！

という訳で今家の近くにある公園で倒れている

家を追い出されてからもう3日が過ぎた

現在所持金は12円

どこの借金執事並みにひもじい思いをしています

でも俺には、誘拐未遂起こす程の度胸も無ければ、勘違いで助けてくれるお嬢様もいないんだよ

グウウウウウ

悠翔「はあ、腹減った……もう無理、死ぬ……」

ああ、光が見えるぜ

あつたけえ、あつたけえなあ

そのまま俺は気絶した

来ました！ネギま！の世界

あれ？俺って公園で気絶したんだよな？

それにしても背中に妙に柔らかい感触が……

？「あ、お目覚めになりましたか？」

目を開けるとそこには、メイド服を着た美少女が立っていた

ん？でもどっかで見ただことあるような……

……

……

……あつー！！

悠翔「ち、茶々丸ううううう！？」

茶々丸「はい、なんですか？」

え？何？まさかネギま！の世界に来ちゃったとか、そんな感じ？

いやいやあり得ないって

公園で死にかけてたら、ネギま！の世界に来てるとかww

そうか！きつとこれは夢だ、夢なんだ………だつたら何しても大丈夫だよな………ぐへへへ

悠翔「茶々丸、ちょっと来てくれ」

茶々丸「何でしょうか？」

何の警戒もせず近付いてくる茶々丸

くっ…！そんな純粋な目で見られたら手を出しにくいじゃないか

だが…！それで止まる俺じゃねえ！

悠翔「茶・々・丸……」

ピョーン

俺はルパン顔負けの跳躍で茶々丸に飛び付き、押し倒す

悠翔「ぐぼあっ!!」

はずだった

くそっ、もう少しだったのに

それより誰だ、いきなり脇腹にサギタ・マギカなんか撃ってきた奴

まあ、一人しかないけどね

?「貴様……今茶々丸に何をしようとした?」

エヴァたん降・臨!!

こ、怖え

さすが真祖。迫力あるぜ

待てよ?

今痛かったよな……

てことは……

悠翔「夢じゃねえええええ!!」

エヴァ「ビクッ……うお!ど、どうした?」

悠翔「あ、ああ、すまん。取り乱した」

いや、だって…ねえ

夢かと思って茶々丸襲おうとしたら、夢じゃ無かったなんてさ

うがああああ!!

絶対茶々丸に変態だと思われた

悠翔「鬱だ……死のう……」

もう死ぬしかないっしょ

そうだな……首でもかきむしって死ぬか

もしかしたら、角のはえた幼女が来てくれるかもしれないし

ガリガリッ、バリバリッ

グウウウウウ

悠翔「飯食わしてくれ……腹減つて死にそうなんだ」

茶々丸「あ、マスター、悠翔さん食事の用意が出来ましたのでこちらにいらして下さい」

あるえ？茶々丸いつの間になくなったんだ……うん、謎だ

エヴァ「む、そうか。では続きは食事をしながら話そう」

悠翔「あいあい」

やっと飯にありつけるぜ

悠翔「バクバクツ、モグモグツ……うつまゝい！」

茶々丸「そうですか、それはなによりです」

うん、流石茶々丸。イイコだ

エヴァ「そんなにがつついて食わんでも飯は逃げないぞ」

悠翔「だって旨いんだもん!!」

うはwwwもん!!とかwww自分でやって吐き気がしてきたぜ

あ、食事中の方、ごめんなさい

悠翔「ところで、エヴァは何で俺の名前知ってるんだ？召喚魔法で失敗したなら名前だってわからない筈だろ？」

エヴァ「ま、まあその……なんだ。これを見ればすべてわかる」

そう言っつてエヴァさんはパクティオーカードを見せてくる

そこに描かれていたのは……俺？

「え?……なにそれ?」

なんでエヴァたんが俺のパクティオーカードを持つてんの？

エヴァ「実を言うとお前を喚びだしたのはいいが、お前の体に魔力を貯蔵しておく部分がないせいで過剰な拒絶反応を起こしてな……そのままにしておくで死んでしまいそうだから、仮契約を結んで私の魔力をお前に送って貯蔵する場所を創ったんだ」

息継ぎなしで長々と説明ありがとうエヴァたん

悠翔「てことは、俺って魔法使えるのか？」

エヴァ「そこまで知らん、私はお前に魔力を送っただけだ。それをどうするかはお前次第だ。お前は気も使えるようだしな」

え？俺気なんか使えたの？てことはかめ め波とか界 拳とか使えるのか……………いいねwww

エヴァ「ところで、お前は何故私達の名前を知っているんだ？」

いやそんな事聞かれてもな……

なんて説明すればいいんだ？

悠翔「えつとな……俺は別の世界から来たんだ」

エヴァ「ほう、別世界か……面白い、気に入ったぞ」

わくい、エヴァさんに気に入られたぜ

有り難や〜、有り難や〜

悠翔「なあ、でも仮契約したってことは俺エヴァとキスしたのか？」

エヴァ「うつ……ま、まあ平たく言えばそうだ／＼」

悠翔「へえ、そうなんだ……」

くく、赤くなってる

エヴァたん可愛いな

エヴァ「なっ！き、貴様なにをニヤニヤしている!!」

悠翔「別に〜。あ、そつだ、パートナーなんだから魔法教えてくれよ……キティ」

エヴァ「そ、その名で呼ぶな!!」

悠翔「え、俺は可愛いと思うけどな。この名前」

エヴァ「む、むう／＼／まあ、お前がそこまで言うなら、そう呼ばれてやってもいいぞ／＼」

悠翔「しよーがないな、そう呼んでやるよ」

エヴァ「貴様ああ！馬鹿にしているのか!!」

悠翔「え……今更気付いたの？」

エヴァ「百回殺す!!」

悠翔「ああ、怖い。でもクラスの連中に言うぞ、名前の事……ニタニタ」

エヴァ「ぐっ……」の……もういい！私は少し寝る……」

悠翔「そうか、お休み〜キティ」

エヴァ「…………ふん！」

うわ〜、エヴァたん弄るのメチャクチャ楽しいWWWな

俺が変態？当たり前だろ

俺がこの世界に来て2日が過ぎた

んでもって今は食事中

悠翔「ごちそうさまでした」

しっかりと両手を合わせて言い、茶を啜る

茶々丸「はい、お粗末様です」

そう言って俺に微笑みかける茶々丸

あゝ幸せだ

茶々丸「そういえばマスターが外で呼んでましたよ」

悠翔「そうか、じゃあ行かないとな」

そうそう、この2日でエヴァたんや茶々丸とはだいぶ仲良くなったぜ

どれくらいかかって言うと、エヴァさんが魔法を教えてください、茶々丸が朝起こしに来てくれるくらいだな

あ、魔法はとりあえずサギタ・マギカを五十本ほど撃てるようになりました

後、瞬動も覚えたぞ

悠翔「来たぞ、エヴァ」

エヴァ「遅い！罰として私の足を舐めろ」

え、いいの？

悠翔「喜んでやらせて頂きます」

エヴァ「はあ!？」

シュタツ、ドサツ

俺はエヴァさんに瞬動で近付き、押し倒す

悠翔「失礼します！ペロッ」

エヴァ「わあ！馬鹿！！本当にやるなアホオ／／」

顔を真っ赤にして言うエヴァたん

止めるつもりはないけどね

変態だもん、俺

悠翔「ペロペロ……レロレロ……クチュクチュ」

俺はエヴァたんの足を舐めたり、口にくわえたりする

エヴァ「あう、本当に……止め……っ~~~~~~~~／／」

俺は更に強く吸ったり、激しく舐めまわす

最初は激しく抵抗してたけど、だんだん抵抗する力が弱くなってきた

エヴァ「……………！！！！！！~~~~~~~~ツ！！！！？／
／／ビクッビクッ」

自分の手で口を塞いで叫びにならない叫びを上げ、体を痙攣させる
エヴァたん

こりゃ軽くいったな

ふふ、可愛い

もつと虐めたくなる

もう末期かもな……俺

エヴァ「ハア…ハア…、やりすぎだ……馬鹿／＼／」

悠翔「ごめんエヴァが可愛くて……つい」

実際はただ舐めてみたかったただけだけどな

あ、可愛いのは本当だぞ

そしてエヴァたんの足はスベスベだった

ホント変態だな……俺

エヴァ「ま、まあいい。今回だけは大目に見てやる、有り難く思え」

悠翔「へへー、ありがとうございます」

舐めろつつつたのエヴァただけだな

エヴァ「何か馬鹿にされている気がするんだが……」

悠翔「気のせい、気のせい。それよりいい加減アーティファクト使わせてくれよ」

エヴァ「ん？ああ、そうだな。魔法の基礎も出来てきたみたいだし、気の使い方については言うことないからな」

俺がどんだけドラゴンール見てたと思ってんだよ

そりゃ使い方だって上手くなるわ

もう、かめは波ぐらいなら撃てるからな

イメージが大事だからな、イメージが

大事なので二回言いました

ちなみにドラゴ ボールGTのGTは「ごめんなさい、鳥 先生」
の略らしいぞ

エヴァ「ほら、これがお前用のパクティオーカードだ」

悠翔「サンキュー。よし、アデアット」

パアアアア

アーティファクトを喚び出す呪文を唱えるとパクティオーカードが
光りだす

そこに現れたのは……

悠翔「銃？」

いやこれはただの銃じゃないな

だって形が仮面ライダーディエ ドのディ ンドライバーだもん、

まんまだもん

腰にカードホルダーみたいなのあるしな

エヴァ「そのアーティファクトはどんな能力があるんだ？アーティファクトの名前もチェンジドライバーとかいう変な名前なんだが」

うはwwwwモロじゃんwwww

悠翔「ああ、大体は分かる」

てかアーティファクトの授与基準ってどうなってんだろっな？

エヴァ「ほづ、では少し殺り合ってみるか？」

あれ？エヴァたん？

殺るの字がちがうよ？

やっぱりさっきの事怒ってるんですね

エヴァ「別に怒ってなどいないぞ…ニ」オ」

俺はそれをギリギリで避ける

あんなのくらったら、マジで死んじゃうよ？エヴァたん

悠翔「じゃあねえ、やるか」

なにが起こるかわかんないけどな

俺はカードホルダーを開いてカードを取り出す

それにはチェンジカードとサモンカードと書かれていた

チェンジカードには黒龍、サモンカードにはハーピイと呼ばれる魔獣が描かれていた

悠翔「なにコレ？」

エヴァ「リック・ラク・ラ・ラック・ライラック来たれ氷精……」

げ！エヴァたん詠唱始めてるよ

もうやるっきゃねえ！

俺はチェンジドライバーにチェンジカードを突っ込むとチェンジドライバーから

『スタンバイ』

という声が聞こえてくる

そのままチェンジドライバーを上に向ける

「ここはやっぱりあの台詞でしょ

」変身！「

そう叫び引き金を引く

『チェンジ ドラゴン・フォーム』

再びチェンジドライバーから声が聞こえたかとおもつと、俺の体を黒い炎が包み込む

燃えてる！燃えてるよおおお！！

熱……くはないけどな

しばらくすると俺を包んでいた黒炎が形を変え、まるで別の生物に作り替えるかのように俺の体を覆っていく

エヴァ「な、なんだその姿は!？」

俺の姿を見て驚くエヴァたん

当たり前か(笑)

だって今の俺、ドラゴノイドみたいになってるもん。尻尾はえてるし、爪は鋭いし、なんてったって顔がドラゴンだしな……黒い

悠翔「おお、すげえコレ！超すげえ!!」

これならエヴァたんとも互角に戦えるかもな

そうだ！サモンカードの方も使ってみるか

俺はハーピィが描かれた、サモンカードをチェンジドライバーに突っ込む

『スタンバイ』

悠翔「来い、ハーピー！」

引き金を引く

『サモン ハーピー』

パアアアア

俺の目の前にハーピーが現れる

そして何故か俺の方を向いている

え？何？俺何かした？

何故にこっち向いとるとですか

ハーピー「我が主、何なりと命令を……」

そう言い跪くハーピー

うん、なんか………いいネ！

ま、命令はしないけど

それについてはしっかり言っておかないとな

エヴァたん倒した後でね

悠翔「よし、ハーピー！エヴァと一緒に倒すぞ」

ハーピー「はい」

エヴァ「闇の吹雪！！」

と、話してる間に詠唱終わらせちゃったみたいだ

だが、甘い！

リン「イ提督のお茶より甘い！！」

わかる人いるかな？

ハーピー「雷の暴風」

ハーピーが俺の前に出て闇の吹雪を相殺する

エヴァ「な！バカな！雷の暴風を無詠唱だと！？」

おー、驚いてる驚いてる

まさか無詠唱とは……

俺もビックリです

悠翔「ふはははは……とっっ！」

キュンッ、ザッ

笑いながら瞬動でエヴァたんの背後に移動して後ろから羽交い締めにする

エヴァ「くっ……卑怯だぞ、悠翔」

悠翔「卑怯？勝負に卑怯もクソもあるか！！」

不老不死の真祖の方が、よっぽど卑怯だっつの

悠翔「やれ、ハーピー！」

ハーピー「はい。風花武装解除」

ブアアアアアッ

エヴァ「キヤア！」

エヴァ「たんの服が花びらになる」エヴァたん全裸

イヨツシヤアアアアアア！！！！

計・画・通り キラッ

エヴァ「たんは一生懸命に手や腕で大事な部分を隠そうとしてる

恥ずかしいのか、顔が湯気が出るんじゃないかってぐらい真っ赤だぜ

俺は恥ずかしがるエヴァたんを穴が空くんじゃないかってぐらい見
つめる

いや、眼福、眼福

てかキヤアってWWW

萌えました W W W W

ちなみに俺は風花武装解除が当たる前に、瞬動でハーピィの後ろに逃げました

エヴァ「ぐっ……この変態があああ!!」

悠翔「褒め言葉として受け取っておくよ……キィティちゃん」

エヴァ「貴様ああ！絶対殺す!!」

そう言つてエヴァさんは両手を上に向けて詠唱をしようとする

でもそんな事をすれば

悠翔「いや〜！眼福だぜ!!」

はい、全部見せていただきました

本当にありがとうございます

エヴァ「く……見るなあ!!」

エヴァたんはそう捨て台詞を吐き家の中に入っていった

ホント可愛いぜ、エヴァたん

ハーピィ「あの……私はどうすればいいんでしょうか？」

悠翔「え？ああ、お前には話があるから、とりあえずそこに座りなさい」

ハーピィ「はい」

ハーピィは素直に、俺が指差した所に正座で座る

ええ娘や、この娘本当にええ娘や悠翔「えゝまず、名前を決めようか」

ハーピィ「名前……ですか？」

悠翔「ああ、ハーピィってのは種族の総称だろ？なら個人の名前を考えないといけないだろ？」

ハーパイ「いえ名前など私には不要です。私はただ主の命令に従う事が……」

悠翔「その命令だなんだったのも止める。嫌いなんだよ、そうゆうの。いいな？」

ハーパイ「いえ……ですが」

悠翔「いいな、わかったか？」

ハーパイ「しかし……」

悠翔「しかしも案山子もねえ！わかったか？」

ハーパイ「……はい」

悠翔「よし、素直な娘は好きだぞ。頭撫でたる……ナデナデ」

ハーパイ「ふぁ……／＼／」

この娘も可愛いな

よく見ると凄い美少女だし

つるペタだけどな

ま、俺は若干ロリコン気味だから問題ない

どこが若干だっというツッコミはなしの方向で……

悠翔「それより名前だ名前。そうだな……………セリアなんてどうだ？」

ハーピー「セリアですか……………いい名前です、気に入りました」

悠翔「そうか、それは良かった」

セリア「はい、ありがとうございます、悠翔様」

あ、俺は様付けなんだ

まあ別にいいけどさ

悠翔「それで？名前決めたのは良いけどこれからどうすればいいんだ？」

だって俺まだドラゴノイドのままだしな

セリア「そうですね……とりあえず私をカードに戻して下さい」

いや、だからそのやり方を聞いてんだよwww

あれ？もしかしてこの娘、天然？

初めて見たぜ

ちなみにまだ頭は撫で続けてます

セリア「あ、すいません。戻し方ですが、簡単ですよ。私が描かれていたカードを私の額にあてて、戻れと念じて下さい。自分の場合も同じです」

心読むなよ

エヴァたんといいセリアといい、何？流行ってんの？

ま、いいや

悠翔「ありがとう、セリア」

そうやって俺が頭を撫でるのを止めると、名残惜しそうな目で俺をみるセリア

俺はセリアとなるべく目を合わせないようにして、セリアをカードに戻した

同じようにして自分も元の姿に戻る

とりあえず家に入るか……

エヴァたん怒ってんだろぅな

と、先にアーティファクト戻さなきゃな

悠翔「アベアット」

パアアアアア

うし、逝くか

逝くの字が違うのは決して変換ミスではないぞ

ただそんな気分なだけだ

悠翔「茶々丸、お茶……」

ドカツ

悠翔「ぐおー！」

入っていきなり殴られました。それも顔面を

エヴァ「貴様さっきはよくもやってくれたな。今度こそ八つ裂きにしてくれるわ！」

悠翔「エ、エヴァ？暴力はいけないぞ、暴力は……な？」

エヴァ「ほう、どの口だ？そんな調子のいい事をぬかすのは？」

悠翔「え〜と、この口？」

バキッ

悠翔「ぐはっ！」

ダメだ、これ以上ふざけたらマジで殺される

ここは素直に謝るか

悠翔「ごめん、俺が悪かった」

エヴァ「許さん！許す訳がないだろう？馬鹿なのか、貴様は？」

ドカッバキッグシャッポキッ

悠翔「ギヤアアアア」

その後は二度と体験したくない拷問フルコースだった

途中で気絶したから何されたかほとんど覚えてないけどな

俺が先生！？ありがちな（前書き）

今回から後書きで作者と悠翔が駄弁ります

質問等があればそこで答えていきます

俺が先生！？ありがちな

悠翔「うう……」

もう朝か

なんか背中に柔らかい感触が……

茶々丸「あ、お目覚めになりましたか？」

うん、このくだり二回目だな

エヴァ「目が覚めたようだな」

悠翔「ああ、おかげさまでぐっすり寝れたよ」

体中痛いけどな！

エヴァ「う……わ、悪いな、流石にやりすぎた。許せ／＼」

か、可愛い！

悠翔「可愛いから許す！」

許さざるをえないでしょ、ここまで言われちゃ

エヴァ「む……なにか引つかかるんだが……」

本音だけどね

茶々丸「マスター、本題に入らなくていいのですか？」

エヴァ「そういえば忘れていた」

本題？

エヴァ「悠翔、お前の事をじじいに話したら、是非学園で働かないかと言っていたんだ。行ってこい」

もはや行くことは決定事項なんだな

悠翔「ちなみに拒否権は…」

エヴァ「あるわけないだろう」

ですよー

悠翔「わかったよ、行けばいいんだろ、行けば」

はあ、しょうがねえなあ、めんどくせえけど行くか

「学園長室」

コンコン

悠翔「失礼します」

みんな、ノックは礼儀だぞ

学園長「うむ、入りなさい」

おお、本当に妖怪みたいな頭だな

もう妖怪でいつか

妖怪「まずは自己紹介からじゃな。僕は……」

悠翔「あーその辺は大丈夫だ。近衛近右衛門さん？」

妖怪「そうか、なら大丈夫じゃな」

俺の名前聞かれないな。エヴァたんが説明したのかな？

妖怪「それで本題じゃが、悠翔君は異世界から来たらしいの」

悠翔「ああ」

妖怪「魔法も使えるんじゃない？」

悠翔「ああ、ある程度はな」

妖怪「……そうじゃな、君には3 - Aの副担任として働いてほしい」

どうせそんなこったろうと思ってたぜ

妖怪「もうすぐ3 - Aの担任の先生が来るから、一緒に行きなさい」

悠翔「わかった」

とつとつネギのお出ましたな

コンコン

? 「失礼します。何でしょうか? 学園長」

妖怪「うむ、実はネギ君のクラスの副担任を紹介しようと思ったんじゃない。神代悠翔君、この子が今日から3 - Aの副担任として働く事になった、仲良くするように
なにかと一人では大変じゃろう、特にあのクラスは」

ネギ「はい、ありがとうございます学園長
僕の名前はネギ・スプリングフィールドです、よろしくお願いします。
悠翔さん」

悠翔「ああ、よろしくなネギ」

テッテレ

神代悠翔はネギと友達になった

神代悠翔は3 - A副担任の称号を得た

神代悠翔は学園長公認魔法使いの称号を得た

…………アホらし

なんだかんだあって今3 - Aの教室の前にいる

原作通りうるさいクラスだな

あ、ネギには説明したよ？

俺が異世界から来たことも魔法を使える事も

流石にエヴァたんとの関係は伏せたけど。なんたってこれから戦うんだからな

ネギ「では僕が先に入りますので呼んだら入って来て下さい」

悠翔「ああ、わかった」

そう言い残し、ネギが教室に入っていく

ネギ「皆さん、おはようございます」

「「「おはよー！ネギ先生ー！！」」」

元気だな、あいつら

ネギ「えっと、今日は皆さんにお知らせがあります」

？「何々？ネギ君」

今のはまき絵か？

？「お、噂の副担任だね、ネギ先生」

朝倉……俺はお前の情報網を知りたい

今度エヴァさんの恥ずかしい秘密でも聞いてみるか

ネギ「その通りです、朝倉さん。悠翔さん、入って下さい」

うし、呼ばれたし行くか！

この扉を開けた瞬間、俺の甘々スウィートな青春が始まるぜ

嘘です、すいません

あくまで教師と生徒です

え？エヴァたんは別だよ？

少なくとも俺の六倍は生きてるしな

悠翔「神代悠翔だ、よろしくな」

あれ？全員黙っちゃったよ……何か間違ったか？俺

「「「「か……「「「「

か？

「「「「カッコイイ〜!!「「「「

そう呼び、3・Aのほとんどの生徒が雪崩のように詰め寄ってくる

千雨「…マジなんですか？」

ネギ「ええ、マジなんですよ」

あのやりとりってネギの時にもやってたよな

てか、エヴァたんがメチャクチャ睨んでるんですが

若干茶々丸も睨んでるような気が……

すごく……怖いです

ま、その後はお決まりの質問攻めだ

どこから来たの？とか、何歳なの？とか、彼女はいるの？とか

どこから来たのって質問で地球って答えたら笑われました

当たり前か……ハア

くああああ！

いくら女の子とはいえこれだけ詰め寄られると、正直キツイ

ネギ「あうう……皆さん席に着いて下さい。皆さん席に……」

完・全に無視

ネギ……「ご苦労さん

ま、このクラスにはアイツがいるから大丈夫かな

ほら、そろそろ来るぞ

バンバン！

あやか「いい加減にしなさい!!」

ネギ「いいんちよさん……」

あやか「皆さん、悠翔先生とネギ先生がお困りでしょう、席に戻って」

流石いいんちよさん

迫力満点だな

あ、みんな知ってたかい？

実はあやかは、初期設定ではネギに意地悪をする、悪役キャラだったらしいぞ

ネギ「じゃ、じゃあ授業を始めます。えっと……一時間目は体育なので着替えて外に出て下さい」

明日菜「ネギく体育の先生って辞めたんじゃないっけ？」

ネギ「そういえばそうですね。どうなるんでしょう？」

おいおい、教師もちゃんと用意してないって………適当過ぎるだろ」
の学園

ピンポンパンポーン

妖怪「えく神代悠翔先生にお知らせじゃ。今日から君が体育の授業を担当してくれ、以上じゃ」

は？俺？

いきなり体育の授業担当とか無理だろ！

てか、そんな事伝える為に放送使うんじゃないっけえ！！

ネギ「ハハツ……頑張つて下さい、悠翔さん」

てめえも笑つてんじゃねえええええ！！

なんかもうやだ……

「校庭」

悠翔「おし、みんな集まつたな」

エヴァ「で、今日は何するんだ……先生？」

エヴァたん居るうううう！

サポタージュしないのな……珍しい

ま、一応授業は真面目にやらないとな

悠翔「よし、今日は……何すればいいんだ？」

スッテーン

うわ、マジでひっくり返っちゃったよ

おもしろい奴らだな

まき絵「ハイハイ、今日は先生と仲良くなるために、ドッジボールしませんかー!？」

裕奈「お、いいねーまき絵。その案頂きー」

まき絵「じゃあ、今日はドッジボールで決定だねー」

こ、この二人……勝手に話を進めやがって

別にいいけどさ

てな訳でドッジボールしてんだけどさ

明日菜が凄く強いです

弾丸のように球が飛んでくるを必死に避ける

中学生相手にマジになるなって？

だって当たったら痛そうだもん

明日菜「ほらほら、悠翔先生腰が引けてる……よー！」

ギョーンッ

悠翔「うおう！」

あつぶね！

もう球が見えないよ……

あくまで、一般人には、ただどな

見える、見えるぜ俺には

てか明日菜ってあんなキャラだったっけ？

悠翔「は！」

イイイイツヨツシアアアア！

ボールは今、俺の手の中に！！

ふっ、所詮中学生なんてこんなもんだ

正直……手が痛いです

絶対に当ててやる

悠翔「覚悟しろ、明日菜！！」

明日菜「望むところです」

そう言って身構える明日菜

ちなみにさっき全員から自己紹介されました

もう知ってるっつーの

さて、ここでキメ台詞を言わなきゃな

……アレでいこう、わかる人にはわかるだろ

悠翔「俺のこの手が光って唸る！！お前を倒せと轟き叫ぶ！！！！」

一度言ってみたかったんだよな、コレ

明日菜「……へ？」

あー、やっぱり知らねーか

てか明日菜の顔が超間抜けなんですけどwwww

ギョーンッ

呆然としている明日菜にボールをなげつける

まあ、そこは流石明日菜って感じだな

上手く避けたよ、うん

ちよつとシヨックだった……

で、明日菜とほぼ同じ強さで投げたボールを外野が捕れる筈もなく、案の定外野を通り越してつたよ

んで捕りに行くのはだいたい茶々丸なんだよな、何故か……
まあ、そんな風楽しく遊んで？たら来た訳よ、アイツ等が

？「あら、またお会いしましたね、中等部の皆さん」

出たよ、麻帆良ドッジ部

でもさ、麻帆良ドッジ部のメンバーの名前って原作じゃでてなかったからわかんないんだよな

この際AとかBでいつか

部員A「今日はこの間の屈辱を晴らすために来たわ」

明日菜「あんた達は……誰だっけ？覚えてる？いいんちよ」

あやか「明日菜さん、あの方達はこの間勝負して私達に惨敗した、高等部の年増のオバサンこと麻帆良ドッジ部、黒百合、の皆さんですわ」

ちよつ W W W W W いんちよ

あんた案外毒舌だな

そして明日菜、たかだか数ヶ月前に戦った相手を忘れるなよ

普通忘れてるか……

部員B「この……今日こそは勝つてやるわ。私達はその時負けて以来地獄の特訓をしてきたのよ。そしてここであなた達に、再試合を申し込むわ」

明日菜「何よ、私達に一回負けたくせに」

だから再試合って言ってんだろ

てか調子良いな明日菜

さっきまでアイツ等のことなんか二ミリグラムも覚えてなかったくせに

明日菜「しょうがないわね、その勝負受けて立つわ」

あゝあ、受けて立つのかよ。めんどくせえ

部員A「では私達は、黒百合のメンバー十一人で勝負するわ。あなた達もメンバーを選びなさい」

何でアイツ等挑戦する側なのに、あんな上から目線なんだよ

悠翔「よし、メンバーはこれでいいな」

今回のメンバーは以下の通りだ

俺、明日菜、あやか、くー老師、アキラ、裕奈、まき絵、楓、刹那、
真名、茶々丸の十一人で勝負することになった

楓と刹那と真名は、みんなが必死に頼むもんだから仕方なくって感じ
だけどな

まあ、その後はお察しの通り、終始こちらの優勢で終わった

詳しい説明はめんどいから省くぞ

強いて言うならトライアングルアタックって、別に強くも何ともない
いな

だって誰か一人の前に張り付いてればいいんだもん

明日菜「ふう、今回も私達が勝ったわね」

「「「「イエイ！」」」」

はあ、こいつらテンション高すぎるだろ

部員A「まだロスタイムよ！喰らいなさい！」

バシユッ

あいつ性懲りもなく、またやってるよ

って、のどかの方に飛んでってんじゃねーか！

悠翔「ちっ！」

キユンッ、ザッ、バシィッ

のどか「ふえ！？」

俺は瞬動でのどかの横に行き、のどかを抱き寄せてボールをキヤツチする

危ない、危ない。瞬動覚えておいて良かったぜ

それより部員A！

よくものどかを狙いやがったな！！

悠翔「制裁じゃ、ボケエエエ！！」

そう叫び部員Aに向かってボールを投げる

勿論、風花武装解除はかけてあります……ぐえっへっへっ

部員全員「キヤアアアア！！」

予想通り服が全部吹き飛んで、下着だけになりました

「ごちそうさまです

部員A「何よコレー！！」

部員B「やーん！！」

悲鳴を上げながら逃げていく黒百合

良いものを見せて頂きました

本当にありがとうございます

まき絵「悠翔先生、すごい！」

裕奈「ネギ君といい悠翔先生といい、内のクラスの先生は凄いね」

お前らもその内出来るようになるけどな

のどか「あの……悠翔せんせー……／＼／」

悠翔「ん？ああ、悪い悪い。大丈夫か？」

のどか抱き寄せたままだっただぜ

のどか「だ、ただ大丈夫です！しし失礼します！！／＼／」

顔真っ赤にして逃げてっちゃったよ……嫌われたかな……かな？

俺が先生！？ありがちな（後書き）

悠翔「つー訳で前書きで言った通り、作者の思いつきで始めた訳だが……………」

作者「ちよっ……………！いきなりのメタ発言！？止めようよ、そういうの」

悠翔「さて何か幻聴が聞こえるが、ほっとして感想のお礼にいきますか。カリビア様、誠様、態々モバから来ていただき有難うございます」

作者「幻聴扱い！？」

悠翔「これからも頑張りますのでよろしくお願いします」

作者「とうとう無視か…！」

茶々丸が素敵過ぎる

悠翔「くああ……」

どうも皆さん、おはようございました

そついや今日から新学期だったな

茶々丸「おはようございます、悠翔さん」

悠翔「ああ、おはよう茶々丸」

うん、朝から茶々丸の極上の微笑みが見れるなんて幸せだ

そうそう、俺の住む場所だけど、寮が用意できるまでしばらくエヴ
アさんの家に住むことになった

茶々丸「朝ご飯が出来てますので、着替えてリビングに来て下さい」

悠翔「あいよー」

いい娘だよな、茶々丸

朝の五時半だぜ…今

何でこんなに朝早く起きたがっていうと、エヴァさんの別荘で修行するためだ

最近、エヴァさんが夜いなくなるんだよ

そろそろネギと戦う事になるかな

悠翔「バクバクツモグモグツ……殺せる……俺はこの茶々丸特製朝ご飯を食べるためなら、容赦なく人が殺せる……バクバクツモグモグツ」

茶々丸「ふふっ、そんなに慌てて食べなくても大丈夫ですよ、悠翔さん」

悠翔「バリバリムシャムシャ……むぐっ！んゝゝゝ」

茶々丸「はい、悠翔さんお水です」

悠翔「ングツングツ……プハーツ、死ぬかと思った」

茶々丸「落ち着いて食べて下さいね？」

悠翔「ああ、わかった。だけど茶々丸の飯って美味しいからさ」

茶々丸「そんな……ありがとうございます、悠翔さん／＼」

ふふふ、茶々丸赤くなってるよ

ああ、幸せだ。

これがリア充か……いいな

悠翔「ごちそうさま、美味しかったよ茶々丸」

茶々丸「はい、お粗末様です」

さて、修行だ修行

ちなみにエヴァたんはまだ寝てます

「エヴァたん別荘」

悠翔「さて、まずは瞬間移動でも練習するか、フウー…ハッ！」

バシュウツ、シュバツ

悠翔「ギャアアアア！」

落ちてる、落ちてるよおおお！！

悠翔「くっ、アデアット」

パアアアアア

『スタンバイ』

悠翔「来い、セリア」

『サモン ハーピー』

セリア「何でしょうか？悠翔さ……ってなんでいきなり落ちてるんですかあああ！」

悠翔「たぐすくけくて……！」

ガシィツ

悠翔「た、助かった」

瞬間移動なんか覚える前に、舞空術覚えなきゃ……絶対に死ぬ

十二時間後

悠翔「ハア……ハア……」

セリア「フウ……」

なんでこんなに息が荒いんだって？

あれから浮空術に馴れるためにずっとセリアと模擬戦してたんだよ
確かに戦ってる最中チヨイチヨイセリアの胸触ったり、尻触ったり
したけどさ

あくまで戦ってるから仕方なく！仕方なくだからな！嘘じゃないぞ
！！

すみません今俺、嘘つきました

わざとです、はい

そうそう、舞空術は意外とあっさりできました

後、界王拳も覚えたぞ

もう、技名に関してはいちいち伏せ字にするのやめた

だってめんどいし……

著作権なんか知ったこっちゃねーし

瞬間移動は戦ってる最中、何故か出来るようになってました

だってセリアに触るたびに本気で攻撃してくるんだもん

嫌でも出来るようになるだろ……

え？普通出来ないって？

そこは、ほら……主人公スキルってことで……

セリア「悠翔様って……えっちいですね／＼／」

くはあっ！

赤くなつた顔でそんなヤミたん（金色 闇）みたいな言い方されたら、萌え死ぬ

セリアめ、いつの間にそんな技を覚えやがったんだ

さて、後は十二時間休んで、ここから出れる時間待つかな

セリアはカードに戻したぞ

あのまま出しっぱなしじゃ殺されそうだし（萌え死ぬ的な意味で）

じゃ、お〜や〜す〜み〜

悠翔「ふあああ……」

本日二度目のおはようございまして

後、五分くらいでここから出られるな

てか茶々丸びつくりするだろうな……

俺、服ボロボロだし

ま、茶々丸がオロオロすんの見るの面白いからいいけどね

っと、時間だ

さあ、今日も一日頑張るぞ！

って意気込んでみたけど……やっぱりちょっとした違和感があるんだよな

一日の間に何日も過ぐすっていつ普通じゃ有り得ない生活してるかな……俺

パアアアア

悠翔「よっ……と」

はい、戻ってきました

只今の時刻、7時でございます

とりあえず茶々丸にお茶でも煎れてもらおうか

着替えはその後でいいだろ

そう考えリビングに行く

お、エヴァたん起きてる

悠翔「おはよう、エヴァ」

エヴァ「む、悠翔か、おはよう……って！なんだその姿は！！何かあったのか！？」

おー、驚いてる、驚いてる

そういえばエヴァたんには説明してなかったな、別荘使って何するか

まあいい、それより今は……

悠翔「何だよエヴァ、もしかして俺の事心配してくれてるのか？」

エヴァ「……っーい、いや……そうゆう訳じゃ……／／／」

悠翔「違うのか……なんだ、エヴァは俺の事嫌いなのか……」

ここで必殺、落ち込むふり

エヴァ「いや、そうじゃない！そうじゃなくてだな……／／／」

悠翔「じゃあ、どうゆう事だよ……俺はエヴァの事好きだし心配だぞ」

エヴァ「なっ……！そんな事を恥ずかしげもなく堂々と言うな！！
／／／」

悠翔「だって事実だし……」

エヴァ「うぐっ……ああもっ！そうだよ、私はお前が心配だ！／／」

くくっ、顔真っ赤だな、エヴァたん

ここらでネタばらしだな

悠翔「そうか、エヴァはそんなに俺のことが心配なのか」

そう言いながら落ち込むふりをして伏せていた顔を上げる

勿論満面の笑み付きで

エヴァ「くっ……お前、騙したなああああ！！百回、いや百万回殺す！！／／」

悠翔「別に騙してはいないぞ」

心配なのも好きなのも本当だしな

でもホント、エヴァたん弄るの楽しいwww

その後、エヴァたんを軽く弄りつつ着替えてエヴァたん宅を出る

さて、まだ少し早いけど教室行くか

「教室」

悠翔「おはよー……って誰もいないか」

まだ八時だもんな

さよ「あ、悠翔せんせーおはようございます」

悠翔「しょうがない、アイツ等来るまで暇だけど待つか」

さよ「あの……悠翔せんせー」

悠翔「はあー……暇だ」

さよ「うう……どうせ私なんか……グスッグスッ」

やべっ、泣いちゃったよ

悠翔「悪い、さよ。別に悪気はなかったんだ」

悪戯心なら有り余るほどあったけどな

さよ「ふえ……私の事見えるんですか？」

悠翔「は？見えるに決まってるじゃん。だってお前このクラスの生徒だろ？」

てか見えなきゃ話しかけないって

さよ「……うわああああん！……」

うわあああああ！

余計泣いちゃったよ

悠翔「ごめん、俺……」

さよ「グスッ……違うんです……私影が薄いから……誰にも気付いて貰えなくて……ウウツ……でもやっと……気付いてくれる人がいて……嬉しくて……つい」

なんだ、そうだったのか

悠翔「良かった、てつきり俺が悪いことしたもんだと」

さよ「違います！悠翔せんせーは悪くないんです」

そう言っつて、さよは泣き顔を無理に笑顔にする

ええ娘や、この娘もええ娘や

悠翔「そうか、じゃあ今から俺達は友達だな！」

ニカッと笑って言う

さよ「はい!!よろしくお願ひします／＼／」

泣いていたからか、若干顔が赤い

ギザかわゆすwww

キンコーンカーンコーン

史伽「三年!!」

風香「A組!!」

「ネギ先生ーっ!!」

ホントうるせーな、コイツ等

てか俺は？

風香・史伽「後ついでに、悠翔先生！」

俺ついでかよ！？

あれ？何だろう？

目から汗が出てきたよ……

ネギ「えと……改めまして三年A組担任になりました、ネギ・スプリングフィールドです。これから来年の3月までの一年間、よろしくお願いします」

悠翔「改めて副担任になった神代悠翔だよろしく」「はい！」

悠翔「よろしく」「よろしく！」

悠翔「よ」「ネギ先生ー！」

いじめだ、これ新手のいじめだよ……

泣いてやる、いじけてやるううううう！！

俺は教卓の横にみんなに背を向けて、しゃがんで床に「の」の字書く

そんな風にいじけていると、後ろから若干殺気の籠もった視線を感じる

ぶっちゃけエヴァたんだけどさ

しずな「ネギ先生、今日は身体測定ですよ。3-Aのみんなもすぐ準備してくださいね」

ネギ「あ、そうでした、ここですか！？わかりました、しずな先生」

ん？そういえばこの後の流れって……やべえ！

俺は瞬間移動で教室を出る

もちろん誰にも見られないように教卓に隠れてだからな

ネギ「で、では皆さん身体測定ですので……えと、あのっ、今すぐ脱いで準備してください」

ネギの奴マジで言いやがった！

「ネギ先生のエッチ〜ッ！！」

ネギ「うわ〜ん、まちがえましたー」

そう叫びながら教室からネギが出てくる

さて、俺はのどかが襲われた後のために準備運動でもしときますか

……… 幸い今日は体育の授業ないしね

って言っても特にする事ないけどな

とりあえず夜まで待ちますか

「桜通り」

俺は今、桜通り上空に浮かび、のどかが来るのを待っている

っーかスゲー寒いんですけど

いくら春とはいえ夜はやっぱり冷えるな

もうちょい厚着して来れば良かった

っと、来たみたいだな

のどか「こ…こわくない」…こわくないです、こわくないかも
「こわっ…？」

ザザアッ

そんな音がしたかと思うと、街灯の上にボロいマントと魔法使いが
被るような三角帽子（実際に魔法使いです）を被った、幼女が立っ
ていた

まあ、エヴァたんだけどさ……やっぱり

てか毎回読むたびに思ってたけど歌だけ聴いたら完全に痛い子だよ
な、アレ

エヴァ「27番宮崎のどかか……、悪いけど少しだけその血を分け

てもらっよ」

エヴァたんはニッと笑い、のどかに向かって飛びかかろうとすると

？「待てーっ」

そんな声が聞こえる

あ、のどか気絶した……

ネギ「ぼ…僕の生徒に、何をするんですかーっ」

そう叫びながらネギは詠唱をして、魔法の射手・戒めの風矢を放つ

エヴァ「もう気付いたか、氷楯……」

そう言い、エヴァたんは魔法薬を混ぜて氷楯を展開する

エヴァたんも大変だよな、魔法が自由に使えないのは

まあ、その後は原作通りエヴァたんの魔法で、のどかの服が氷にな

って消え去るわけだ

全力で写真撮らせて戴きました

え？犯罪？知るかWWW

変態？その通りですけど、何か？

勿論カメラは音がしないように改造してありますよ

そうこうしてる内にエヴァたんは逃げ、明日菜達がやって来る

とりあえずネギにエヴァたん追わせなきゃな

俺はネギ達から少し離れた所に降りて走って明日菜達の所に向かう

このか「ネ、ネギ君が吸血鬼やったんか！？」

ネギ「ち、違います誤解ですー」

悠翔「ネギ！」

ネギ「あ！悠翔さん」

明日菜「げっ！！」

げってなんだよ！？げって！？

ま、いいや

悠翔「ネギ、お前はアイツを追え。のどかは明日菜とこのかで保健室まで運んでやれ」

ネギ「はい！宮崎さんを頼みます！」

このか「え、ちよつとネギ君……」

ネギ「じゃあ、悠翔さんお願いします」

悠翔「おお、任せんしゃい」

じゅっつっつくりのどかの裸を観察しといてやるから

その後は普通にのどかを保健室に運んで、明日菜にはネギの所に行かせましたよ

じゃなきゃこの世界の歴史が変わっちゃうからな

だって明日菜行かせなきゃ、ネギ死んじゃうもん

ネギま！ネギ抜き！！みたいなの？

なに言ってるんだろ……俺

このか「なあ、先生。うち、部屋戻ってもええかなあ」

悠翔「ん？ああ、もう戻っていいぞ」

別に問題ないよな？

このか「それじゃあ先生、おやすみなさい」

そう言っって保健室を出て行くこのか

悠翔「ああ、おやすみ」

今頃エヴァたんは明日菜に顔面蹴られてるだろつな

明日、弄りたおしてやるっ……フヒヒWWW

茶々丸が素敵過ぎる（後書き）

悠翔「さて、このコーナーも二回目な訳だが……………どうした作者、土下座なんかして」

作者「イヤ、態々モバから来てくれる人が結構いてさ……………もう感謝感激雨霰さ！」

悠翔「おお、そうだったのか。じゃあ感謝コーナーいきますか、死の恐怖様、神崎貴広様、ノイズ様モバから来ていただき有難うございます……………って、感想書いてくれる人、モバから来た人しかいないじゃん」

作者「そう言えば……………」

悠翔「まあ……………頑張れ」

作者「うん……………orz」

カモとは気が合いそうだ（主に萌え方面で）（前書き）

更新が遅くなって申し訳ありません

悠翔「鬼さんこちら、手のなる方へ」

エヴァ「キイイイイサアアアマアアアア！！！！」

はい、今俺は教室に向けて全力疾走中です

いい加減疲れてきました

でも、止まらない

だって、止まったら確実に地獄行きの片道切符を渡されそうだもん

でも、逃げながらも弄ることを忘れない俺は、きっと勇者なんだろ
うな

まあでも、止まったら死ぬ！絶対死ぬ！！

悠翔「フッフッフツ…ハッハッハッハッ…アーツハッハッハッハ
ツ」

エヴァ「死ねええええ！！！」

思わず悪の三段笑いが出ちまったぜ

っと、いつの間にか教室着いてたぜ

って、あ！止まっちゃった……

俺は恐る恐る振り返る

悠翔「……………」

エヴァ「……………ニヤッ」

何！？ニヤッて何！？

エヴァ「覚悟はいいな、悠翔お！…」

悠翔「イヤアアアアア！…！！」

俺は教卓の横でぶっ倒れている

エヴァさんに捕まった後、これでもか！ってくらいボコボコにされ

ました

ネギ「あ〜ん！ま、まだ心の準備が……」

明日菜「みんなおはよー……って、何やってるんですか？悠翔先生」

悠翔「み、見りゃ分かるだろ……」まき絵「あ、ネギ君、アスナー」

裕奈「おはよー、ん、ネギ君どうしたの？」

明日菜「まきちゃんもう平気？」

まき絵「すっかり」

アキラ「何も覚えてないらしいぞ」

ネギ「あ……いない……エヴァンジェリンさん……」

そう言っつてホツとした表情を浮かべるネギ

茶々丸「マスターは学校には来ています、すなわちサボタージユです」

突然現れる茶々丸

流石に心臓に悪い

ネギ「わ……わあっ!？」

いやいやネギ、お前はびっくりし過ぎだろ

てかいつ来たんだよ、茶々丸?

そして何故エヴァたんはいない?

相変わらずみんな俺の事は無視だし……

死のうかな……マジで

キーンコーンカーンコーン

さて、チャイムもなっただし授業行きますか

えっと今日の体育は二年の……ああ、愛衣ちゃんのクラスか

ま、今の内にコンタクトとっておいてもいいだろ

授業終わりました

そつえば、確か屋上でエヴァたんがサポータージュしてるんだよな

悠翔「行くか……暇だし」

「屋上」

エヴァ「ふわ〜あ…」

お！いたいた

うん、眠そうなエヴァたんも可愛い

とりあえず声かけるか

悠翔「エヴァ、何サボタージユしてるんだよ」

エヴァ「む？なんだ、悠翔か……」

なんだとはなんだ!?

人がせつかく、心配して来てやれば

嘘です、すいません

あわよくばエヴァたん膝枕出来るかな？なんて考えてました

はい、下心まるだしですね、わかります

エヴァ「む、何か来たな……結界を越えた者がいる」

カモか？

悠翔「学園都市内に入り込んだか」

カモだろうなあ……

エヴァ「しかたない、メンドクサイが調べに行くぞ、悠翔」

悠翔「え？俺も行くのかよ!？」

エヴァ「当たり前だ、お前は私の従者だろう?」

悠翔「ぐっ……!!」

それを言われると何も言い返せない

それにかこつけて魔法教えて貰ってるしな

血は吸われていますよ？毎日……

家賃だつてさ

なかなか美味いらしいぞ、俺の血

で、なんだかんだあつて夕方

茶々丸も合流して学園を調べていると明日菜と遭遇した明日菜「ネギッ！ちよつと、ネギどこいつちやったのよ……」

エヴァ「……ほう、神楽坂明日菜か」

エヴァがそう言うと同時に軽くお辞儀をする茶々丸

基本礼儀正しいんだよな、茶々丸って

明日菜「……あんた達！ネギをどこへやったのよ」

エヴァ「ん？知らんぞ」

明日菜「え……」

エヴァ「安心しろ、神楽坂明日菜。少なくとも次の満月までは、私達が坊やを襲ったりすることはないからな」

明日菜「え……？どういふこと」

話が長くなりそうだから、逃げるか

エヴァ「今の私では……」

うーん、エヴァたん説明長いよ

ま、いいや。逃げるし

というわけで……

瞬間移動発動！！

とりあえずエヴァたんの家に戻って来たけどやることないな……

悠翔「寝るか……」

こついつ時は寝るのが一番だ

？「……き……る」

ん？なんだ……

？「おき……お……る」

ん……？

エヴァ「とつとと起きんかあ……！」

悠翔「くぼあ……？」

ナ、ナイスエルボー

み、鳩尾が……

悠翔「何すんだよ！」

エヴァ「うるさい！調査も途中でほっぽりだして、こんな所で寝ている方が悪い！！」

うっ……

悠翔「た、確かに……でも、だからっていきなり鳩尾にエルボーいれることないだろ！？」

エヴァ「知るか！この変態が！！」

悠翔「それは今関係ないだろ！？」

確かに変態だけどさ

自覚はあるんだよ？

で、俺達が騒いでいると、どこからともなく茶々丸が現れ、一言

茶々丸「仲がよろしいですね」

と言った

エヴァ・悠翔「どこがだ!」「」

その茶々丸の言葉に同時に言い返す俺とエヴァたん

茶々丸「そこがです」

くっ……反論出来ない

反論出来ないのはエヴァたんも一緒のようで、まるで苦虫を噛み潰したような顔で俺を睨んでいる

って、なんで俺?

そんなに俺と仲良く見られるのが嫌なのか?

茶々丸「お食事の用意が出来てます」

悠翔「そうか、いつもありがとな」

茶々丸「いえ……私の仕事みたいなものですから」

茶々丸と結婚したいよ……俺は

エヴァたん？愛人かな……

エヴァたんこれ言ったらきつと殺されるな

カモとは気が合いそうだ（主に萌え方面で）（後書き）

悠翔「で？何か言い訳はあるか？」

作者「だって、携帯が止まってたんだもん！」

悠翔「もん！じゃねーよ気持ち悪いな！！まあ、いいや。テメーは後でぶっ殺すとして、感謝コーナー行ってみようか。相良雷霸様、感想有難うございました。遅くなって申し訳ありません。作者は責任持って殺つときますので。っー訳で逝こうか」

作者「えっ！？ちよっ、字が違っ…！！！」

悠翔「問答無用！！地獄で嘆け、そして朽ち果ててしまえ」

作者「イヤアアアア！！！」

茶々丸は俺が守る(前書き)

連投です

茶々丸は俺が守る

俺は今、エヴァさんと茶々丸と校舎に向かっている

確か今日だよな、茶々丸がネギ達に襲われるの

え？のどかなら昨日ネギと仮契約しそうになったよ？

まあ原作通り、明日菜に止められたけどな

それより茶々丸だ

エヴァさんは途中で呼ばれていなくなるし、俺が守らないとな

べ、別にこれで好感度を上げようなんて……考えてないんだからね
！！

はい、キモイですね
わかってます

「校舎玄関」

お、カモいるじゃんネギとなんか喋ってるし

エヴァ「おはよう、ネギ先生」

悠翔「おっすネギ」

エヴァ「今日もまったりサボらせてもらっよ。フフ、ネギ先生が担任になってからいろいろ楽になっ…ゴソッ…くあっ！…何するんだ、悠翔！！」

エヴァたんが喋ってる最中に拳骨をいれる

悠翔「確かにネギが担任だが、俺はお前達の副担任だぞ？俺にも授業に出席させる義務があるんだ、今日は体育もあるしな」

なんて真面目なこと言っつけど、実際はただエヴァたんの体操服姿が見たいだけなんです…グエッヘッヘッ

ネギ「エ…エヴァンジェリンさん、茶々丸さん！！」

え？俺は無視かよ！？

せっかく授業に出るよう促してやったのに……

なんて考えてる間に話が終わったらしく、ネギが逃げていった
さて、授業だけやって放課後まで大人しく待ちますか

あつー！明日菜とネギの仮契約の写真撮っとけば良かった……

後で朝倉に売れそうだったのに……くそっ

てなわけで放課後

茶道部の部室の上で茶々丸とエヴァたんが出てくるのを待ってます

え？時間飛ばしすぎ？

じゃあ何か？ひたすらデスクワークを描写してろってか？

つまらなさ過ぎるだろ、それ……

そうそう、エヴァたんの体操服姿はしっかりと写真に納めたぜ

こっちの抜かりはないさ

なんたつて俺の嫁だしな！

つと、出てきたな

エヴァちゃんと茶々丸が話していると、タカミチがやって来てエヴァ
たんを連れて行く

えーつと、確か公園で猫に餌あげてる時に襲われるんだつたよな……
先回りしとくか……

「公園」

つて訳で先回りして来た

お、ちょうどいいタイミングで茶々丸が見えてきた

たいして先回りになってないのは、気にしない

ええ、気にしませんとも

そして猫に餌をあげ始める茶々丸

ええ娘や……本当にええ娘や

しつこいですね、わかります

さてつと、俺も準備体操でもしときますか

餌をあげ終わったら出てくるんだったよな、アイツ等

猫達に餌をあげ終わると同時に物陰から出てくる、ネギと明日菜

茶々丸「…こんにちは、ネギ先生、神楽坂さん……油断しました、でもお相手はします……」

律儀だよな、茶々丸

ネギ「茶々丸さんあの……僕を狙うのはやめていただけませんか？」

茶々丸「申し訳ありませんネギ先生、私にとってマスターの命令は絶対ですので」

茶々丸はそう言って軽く頭を下げる

ネギ「うつつ……仕方ないです……では茶々丸さん」

明日菜「…ごめんね」

茶々丸「はい、神楽坂明日菜さん…いいパートナーを見つけましたね」

ネギ「行きます！！契約執行十秒間！！ネギの従者『神楽坂明日菜』
！！！！」

契約執行により能力が上昇した明日菜が茶々丸に急接近し、ネギはそのまま詠唱を始める

明日菜の攻撃が当たると同時にネギの詠唱が完成した

ネギ「魔法の射手・連弾・光の11矢！！」

茶々丸「……！！追尾型魔法至近弾多数…よけません。すみませんマスター…もし、私が動かなくなったらネコのエサを……」

よし、今だ！！

悠翔「まだ諦めるのは早いんじゃないか？茶々丸」

そう言いながら茶々丸の前に瞬間移動する俺

茶々丸「悠翔さん……」

ネギ「悠翔さん!?!」

明日菜「悠翔先生!?!なんで……」

なんでって……茶々丸助けに来たんだよ

見りゃわかるだろ……普通www

茶々丸「……っ!?!悠翔さん、離れて下さい!?!」

いや、離れろってもな

もう無理だよ

ネギは俺が現れたことに驚いて、魔法の射手戻さねーしさ

もう目の前まで来てるしね

ま、手が無いわけじゃない

出来るかどうかわかんないけど……

悠翔「大丈夫だよ。俺を信じろ、茶々丸!」

カツコイイなあ、俺

茶々丸「……はい」

うし!茶々丸も信じてくれたことだし、一丁やりますか

っても、やることは簡単だ

気でバリアを作って防ぐだけだ

確かベジ タがそれで民間人を守ってたからな

悠翔「ハアアアア!!!」

そう叫び、気を練り上げ目の前にバリアを作り出す

ドガガガガッ

硬いものがぶつかり合う音が周りに響き渡る

ネギ「当たってない!？」

明日菜「どういうことよ、ネギ!！」

ネギ「わ、わかりません」

茶々丸「悠翔さん、いったい何を……」

ん?なんで茶々丸まで驚いてんの?

……ああ、そっか!

気でバリアを作ったっていつても、透明だしな

見えてないのか……

説明するのめんどいな

この頃のネギは気に關して、殆ど知らないもんな……

ま、気を使ってこんな事出来んの、この世界じゃ俺だけだろうしな

あ、ラカンいるじゃん……

ああ、もうなんかグダグダだ

頭ん中煮詰まってきた

はなしを先に進めよう……

悠翔「とりあえず……茶々丸！逃げるぞ」

そう言い俺は茶々丸の腰に手をまわす

カモ「マズいぜ兄貴！奴ら逃げようとしてるぜ」

ネギ「……え？あ！」

ちっ！カモの奴、余計な事言いやがって

ネギ「に、逃がしません。ラス・テル・マ・スキル・マギステル……」

……」

詠唱ねえ

悠翔「甘いな、ネギ。ハッ！！」

俺はネギの足元に向かって気弾を放つ

気弾は地面に命中し、俺の読み通り辺り一面に土埃が舞う

悠翔「さ、茶々丸。今のうちに逃げるぞ」

そつ言い俺は茶々丸を抱き上げる

所謂お姫様抱っこでな

一度やってみたかったんだよな、コレ

てか俺一度してみたかったこと多いな

ま、ヲタクだしね、俺

茶々丸「え……あ……悠翔さん／＼／」

茶々丸の顔が赤いです

……萌えました

つと、いい加減行かないとな

悠翔「よっ……」

ビシュンッ

悠翔「……つと」

ザッ

エヴァたん宅に到着しましたよ

原作じゃ、茶々丸は近くの建物の屋根に乗ってて、この辺りからネギのことが気になりだすけど、別にいいだろ

少なくとも茶々丸とエヴァたんは俺ルートに入れるつもりだし

あわよくば、このかとか夕映も欲しいです

真祖の吸血鬼も風邪を引くみたいです(前書き)

連投その2

真祖の吸血鬼も風邪を引くみたいです

エヴァ「わ、わるいな……悠翔……ゴホッゴホッ」

悠翔「気にするな。言ったる？俺はエヴァのこと好きだし、心配だつて」

エヴァたんが風邪を引きました

ま、原作でも風邪引いてたし、これでいいんだろっけどさ

ちなみにネギは来ませんよ？

エヴァの看病するからって、俺が休んだしね

エヴァ「むう／＼／……相変わらずそんな事をサラッと……」

悠翔「しょうがないだろ？ホントの事だし。ほら、お粥作ったからこれ食って茶々丸が帰ってくるまで寝てろ」

え？料理なんか出来たのかって？

失礼な！！

俺にかかれば、ただのお粥だって三ツ星レストランのフルコース並みの料理になるんだよ

はい、嘘ですね

茶々丸の置いていったレシピ通り作っただけです

んで、そのレシピの内容に問題があつてな

何故か最後に`悠翔さんの血`って書いてあるんだよな

いや、まあ相手は吸血鬼なんだから、当然と言えば当然なんだろうけどさ.....

エヴァ「ああ、そうさせてもらつよ.....ん／＼／」

そう言つて口を開けるエヴァたん

何？食わせろつてか？

喜んでやらせていただきます

悠翔「ほい、あ〜ん」

エヴァ「ん／／……モグモグ」

悠翔「美味いか？」

エヴァ「ん？……悠翔にしてはなかなかだな／／……ケホツケホツ」

悠翔「はは、相変わらず素直じゃないねえ……大丈夫か？」

そう言つてエヴァさんの背中をさする

エヴァ「んん……大丈夫だ……あ……ん／／」

そう強がるエヴァさんにお粥を食べさせる俺

端から見たら完全にバカップルだよな……うっしっしっ

てかエヴァたんよくこんなもん、美味いと言えるよな

だってさ茶々丸のレシピには、材料を入れる量からタイミング、更には煮込む時間まで事細かに書かれてるのに、悠翔さんの血の項

目だけ、お好みで、とか書いてあるんだよ

んで分量がわかんねーからとりあえず適当に血をぶっ込んだ結果、血で真っ赤に変色したお粥が出来上がったわけよ

自分の血の入ったお粥を、目の前で美味しそうに食べられるのも、乙なものだ

もしかしたら水より血の方が多いかもな

限りなく体に悪そうなお粥だな……そんでまあ、エヴァたんにお粥全部食わせて、寝かせた

エヴァ「さ……寒い……」

悠翔「ん？」

うわっ！汗でぐっしょりじゃねーか

これじゃ良くなるどころか悪化しちまう

着替えさせないと……フヒヒッ

悠翔「今、着替えさせてやるからな」

あくまで心配そうに、だ

変態丸出しじゃ、治ったときにエヴァさんに殺されかねない

んでんで、じっくり観察もとい視姦しながら着替えさせました

写真？撮ったよ？当たり前じゃん

悠翔「ほら、これで寒くないだろ。茶々丸帰ってくるまで寝てろ」

そうやって俺がエヴァさんの部屋から出ていこうと立ち上がると、エヴァさんに服の裾を掴まれたとおもったら

エヴァ「うう……も、もう少し……側にいてくれ／＼」

顔を赤くしてそんなことを言いやがった

これはツンデレのデレか？デレなのか！？

ヤバい可愛い、萌え死ぬ

悠翔「……ああ、わかったよ」

そう言ってエヴァさんの横に座り頭を撫でる

仕方ないだろ？

あんな言い方されたら、いるしかないじゃん

エヴァ「……ん／＼／」

くおお〜！

エヴァさん可愛すぎるよ

明日は大停電の日か……

学園都市の護衛もしなきゃだけど、エヴァさんの写真もしっかり撮らないとな

楽しみだ…フヒヒツWWW

大停電の夜に

さてさて、今日は待ちに待った大停電の日です

ま、授業やって夜まで大人しくしとくよ

そうそう、エヴァたんは昨日の礼って事で授業に出てくれるそうだ

正直心配だったんだよな

エヴァたんが心配で休んだけど、看病するのネギじゃなくて良かったのか、ってな

大丈夫だったけど

で放課後

確かエヴァたん茶々丸は屋上にいるんだよな……行くか、暇だし

あれ？なんかデジャヴ……

俺って暇なこと多いよな、主人公なのに

とか考えてる間に屋上着いてたよ

いつも何か考えてる間に目的地に着いてるよな

すっげー御都合主義だな、この小説

あ、こういうのは作品内では禁句だったけ？

別にいいか、困るの俺じゃなくて作者だし

エヴァ「開始まであと五時間だ、行くぞ茶々丸」

お、いたいた……って！

あの後エヴァたん転げるんじゃないっけ？

茶々丸「あ、マスター」

しゃあねえ、助けるか

個人的にはエヴァたんの悶絶するところも見たいけど、それ以上にエヴァたんが傷付くのを見るのはイヤだからな

え？そんな綺麗事言っつけど、実は好感度上げただけだろって？

ソナナコトナイヨ？

瞬間移動、瞬間移動、　　と

シュンッ、パシッ

エヴァさんの横に行き、制服の後ろ襟を掴む

もちろん首が締まらないように、力加減はしてるよ？

エヴァ「……む？悠翔？」

そう言っただけで閉じていた目を開くエヴァさん

ちなみに今はエヴァさんをお姫様抱っこしてる状態だ

悠翔「ああ、俺だ」

エヴァ「すまん……その……ありがとう／＼／」

エヴァさんが素直や……

顔赤くしてるよ

最近、エヴァさんが俺を殺そうとしてるんじゃないかって思えてきた（くどいようだけど、萌え死ぬ的な意味で）

そんな可愛いエヴァたんには、ご褒美として忠告をしてあげよう

悠翔「……そうだ、大停電の時間に気を付けろよ」

それだけ言ってエヴァたんを降ろす

少しエヴァたんが名残惜しそうにしてたのは、俺の気のせいだろう

茶々丸「それはどういう……」

茶々丸、最近空気だよな

悠翔「悪い、これ以上は教えられない」

原作から反れても困るしね

さて、行くかそんで夜

俺は森の少し開けた場所にいるんだが

「「「グルルルッ」「」」

なんかよくわからない奴らに見事に囲まれています

そいつらはまるで熊のような姿をしている

ま、誰かが召喚したんだろうな

微弱だけど違う魔力が通ってるし

悠翔「ふんっ、はあっ！」

ドカツ！ゴシヤツ！

突っ込んでくるそいつに俺は回し蹴りを叩き込む

めんどくせえな

数ばっかりいっぱいじゃがって

…………… 一気に終わらせるか

悠翔「かーめーはーめー……………」

俺は空中に飛び上がり、叫びながら腰の横で両手を向かい合わせ、あの体勢をとる

いくぜ！

悠翔「波あああああああ！！」

ゴオオオオオツ、ドガアツ！！

その一撃で群がっていたそいつらがすべて消し飛ぶ

ふう、一仕事終わったな

まだ、ネギ達が橋にたどり着くまで時間あるし、何するかな……

悠翔「ん？」

デカイ魔力があるな

ここから5、600メートルってどこか

すぐ近くに気の反応もある

少しずつ小さくなってるけど

苦戦してるんだろっな

おそらく楓と刹那あたりだろう

あの二人が苦戦するなんて相当なもんだ

それに比べて魔力の方はまだ健在だしな

悠翔「しょうがねえ、助けに行くか……」

これでも一応副担任なんでね

あくまでも一応だぞ、一応

大事なので二回言いました

今行くからね、せつちゃん

(このあたりが一応になる原因)

変身してから行くか

だってそっちの方が………面白いじゃん!!

はいそこ、呆れない呆れない

俺はこういう人間なんだよ

悠翔「アデアット」

パアアアア

『スタンバイ』

悠翔「変身!!」

『チェンジ ドラゴンフォーム』

ふう、この姿も久しぶりだな

って言うても一回しかなかったことないけどな

ってか、さっきからなんか違和感があるんだよな………

……

……

……

…

うん、落ちてるね

絶賛落下中だよ

よく考えてればわかることだよな

変身して魔力使ってる間は、気は使えないんだからな

魔力で飛ぶ練習してないし

感卦法？使えませんけど何か？

貰い物の魔力でそう簡単にできるか！？

他の人達は出来ても俺にはできん

あれ？他の人達って誰だ？

ま、いいかとりあえず

『スタンバイ』

悠翔「カモン、セリア」

『サモン ハーピー』

セリア「お久しぶりです、悠翔さん………ってなんでまた落ちてるんですかああああ!!」

二度目の絶叫ありがとうセリア

ノリのいい娘は好きだぞ

ガシッ

セリア「なんか私、出てくるたびにこんな事ばかりやってる気がします………」

気にするな………とは言えないな、俺のせいだし

そう言いつつもすっかりと両足で俺の肩を掴んでくれる

痛っ、痛い！

爪が刺さってるよー！！

セリア「ふふっ……………」

もしかしてわざとか？

悠翔「あゝ、セリアさん？爪が刺さってるんですが……………」

セリア「うふふふ……………」

おい、セリアー、戻ってこーい

絶対わざとだな、コレは

謝るしかないか……………ふう……………

悠翔「悪かったよ、セリア」

セリア「わかればいいんです」

そう言って肩を掴む力を緩めてくれる

ふう、これで肩を引きちぎられないですみそっだ

刹那「ぐっっ！」

楓「刹那殿！！」

熊の化け物に攻撃され、吹き飛んだ刹那は近くの木に激突する

楓はそれを庇うように、刹那の前に立ち、構える

熊「グルアアアアッ！！」

刹那「うっっ……」

楓「くっ……」

((ここまでか……))

二人が同時にそう思った瞬間、発砲音とともに熊の化け物に魔力の弾があたり、よろける

刹那「な、なに？」

楓「刹那殿！上を見るでござる」

刹那「上？」

そう言って二人は上……つまり俺を見上げる

降りるか……

俺は熊の化け物と二人の間に降り立つ

刹那「ま、魔獣……？」

楓「……で、ござるな」

ですよー、そうなりますよね、普通
わかってたさ、どんな反応がくるか

いきなり出てきてこんなこと叫ぶ魔獣がいたら、俺でもああなるもん

セリア「悠翔様、ドンマイです」

悠翔「ありがとう、セリア」

俺の理解者は君だけだよ

あれ？目から汗が……

何かに負けた気がするよ……うっっ

それもこれも……

悠翔「てめえのせいだああああ！……！」

そう叫び、熊の化け物にCDを撃ちまくりながら詠唱を始める

こんな事もあるつかと、始動キーは考えておいたよ

悠翔「ラスト・テイル・マイ・マジック・スキル・マギステル、来たれ雷精、風の精……」

どっかで聞いたことがあるのは気にしない

ええ、気にしませんとも

気にしたら負けな気がするからな

これ以上負けてたまるか

セリア「雷の暴風……！」

ドガアアアアアアッ……！！

熊「グギヤアアアアアアッ……！！……！！……！！」

え………！？

ひとが一生懸命詠唱しとるのに、いきなり無詠唱で倒しちゃまうとか、
どんだけ空気読めない娘なんだよ

やっぱ天然だわ、この娘

刹那「な、な、な……」

楓「あれを一撃とは……」

せっかくカツコ良くキメようと思ってたのに……

セリアめ……後でお仕置きだな

熊「グルアアアアツ……」

つと、んな事考えてる間に起きあがろうとしてるな、あの熊

てかまだ生きてたんだ

セリア「何やってるんですか、悠翔様！早く封印を……」

は？封印？ナニソレ食えんの？

セリア「食べれませんから！ふざけてないで早く……」

また勝手にひとの心読みやがって

お仕置き確定だな

みWなWぎWつWてWきWた

……いい加減真面目にやらないと、話が進まないな

悠翔「封印ってどうすりゃいいんだ？」

セリア「えっとですね……カードホルダーに白紙のカードが入っているので、それを投げて封印と言って下さい、それで封印できるはずです。それと封印した魔獣は使うことが出来るので」

長い説明ありがとうセリア

なんかポケ　ンみたいだな

俺はカードホルダーからカードを取り出す

それはセリアの言った通り白紙で、チェンジカードとサモンカードとだけ書かれていた

封印か……………よし！

悠翔「リリカルマジカル……封印！」

「「「……………は？」「」

うっわ！恥っずっ！

みんな、なに言っちゃってんのコイツ、みたいな目で見てるよ

ノリで言ったけど実際言うととてつもなく恥っずいな

よくこんなの平然と叫べるよな、なのはさん

っと、また話が反れたな

悠翔「ほいっ」

ヒュンヒュンヒュン、サクッ

俺が投げたカードは見事に熊の化け物に命中し、カードに吸い込まれていく

ヒュンヒュンヒュン、パシッ

完全に熊を吸い込み終わると、カードはひとりでに俺の手に戻ってくる

この辺は仮面ライダー ブレイドみたいだな

悠翔「封印完了っ」と

返ってきたカードには、熊の絵とグリズリーという名前が書いてあった

ちなみに封印したのは、チェンジカードのほうな

セリア「あの……悠翔様？」

悠翔「ん？どつたの、セリア」

セリア「いえ……何でもないです……ハア」

なんだそのため息は!?

アレか?俺の頭がおかしくなったとも思ってるのか!?

いいか、一つ言っておくぞ

頭がおかしくなったんじゃない、元々俺自身おかしいんだよ

自分で言ってる悲しくなってきた……

もういいや、話進めよ

悠翔「セリア、すぐにここを離れるぞ」

そろそろエヴァたんが橋につく頃だ

セリア「はい」

セリアは俺の肩を掴み飛び上がる

刹那「あっ……ちよ、まっ……」

なに言ってるかわからんよ、せつちゃん

んでまあ、刹那にも楓にも正体を明かさずに、橋に向かう

橋につく前に変身解いとかないとな

てな訳で、今俺は学園の端にある橋の端にある柱の端から少し顔を出してエヴァちゃんとネギの戦いを見ている

ギャグじゃないよ？

エヴァ「行くぞ、私が生徒だということは忘れ、本気で来るがいい、ネギ・スプリングフィールド」

ネギ「はい！」

ギリギリ間に合ったな

危ない危ない、エヴァさんの写真撮り損ねるところだったぜ

セリア「あの……悠翔様、いいんですか？放っておいて」

悠翔「ん？別に問題ないよ」

おおむね原作通りに進んでるしね

っと、セリアと喋ってる間に戦いがクライマックスに入ったな

俺はカメラを構える

俺のテンションもクライマックスだぜ！！
意味分かって？

当たり前だ、俺もよく分かんないもん

ネギ「ラス・テル・マ・スキル・マギステル来たれ雷精、風の精！
」

エヴァ「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック来たれ氷精、闇の精
！！」

あーあ、ここで調子に乗って同種の魔法なんか使わなきゃ、負けな
かったのにな

ま、そのおかげで俺のエヴァたん写真集の写真が増えるんだけどさ

エヴァ「闇の吹雪！！！」

ネギ「雷の暴風！！！」

ネギとエヴァたんの魔法がぶつかり合う

多少エヴァたんの魔法がネギの魔法を押し始めるが、ネギは子供用の杖が砕けてでた破片でくしゃみをし魔力が暴走、そのくしゃみのおかげでエヴァたんの魔法を押し返す

エヴァ「な…何！？」

ドオンッ

魔法がエヴァたんに当たった事によりまわりが煙に包まれる

煙が晴れるとそこには裸のエヴァたんが！！

シャッターチャンス！

全力で撮るぜ！！

エヴァ「…やりおつたな小僧……フッフ…フッフ期待どおりだよ、
さすがは奴の息子だ……」

俺が写真を撮っているとも知らず喋り続けるエヴァたん

てか、さっきからセリアの視線が痛いです

変態を見る目で俺を見てます

止めないけどね

ネギ「あ、あわっ脱げッ…!?!ご、ごめんなさッ」

お前はまず謝る前に目を反らせ

エヴァ「ぐっ……だがぼうや、まだ決着はついていないぞ」

そう言って再び構えるエヴァたん

裸のままな

茶々丸「いけないマスター!戻って!!」

おいおい、まさか……

エヴァ「な、何!？」

茶々丸「予定より7分27秒も停電の復旧が早い!!マスター!!」

あのバカ共!

時間に気をつけろって言ったじゃねーか

あれ?でもこれってフラグ立てるいいイベントじゃね?

………助けるか

悠翔「セリア、行くぞ」

セリア「はい」

そう言つて柱の影から飛び出すと同時にエヴァさんの封印が復活する

エヴァ「きゃんっ」

てか、きゃんって……ギザかわゆすwww

ってんなこと言ってる場合じゃねえ！

明日菜「ど、どうしたの!？」

茶々丸「停電の復旧でマスターへの封印が復活したのです、魔力がなくなればマスターはただの子供、このままでは湖へ……あと、マスター泳げません」

そう叫びながらエヴァさんの元へ向かう茶々丸

その間もエヴァさんは落ち続けている

ネギ「エヴァンジェリンさん!!」

そう叫び橋から飛び出すネギ

なんと、無謀な

まあ俺も飛び出すんだがな

悠翔「ネギ！エヴァー！！」

ネギ「うえっ！悠翔さん！？」

悠翔「セリア、頼む！」

そう言いながら舞空術で最大限まで加速し、ネギの後ろ襟を掴みセリアに投げる

後はエヴァーたん

落ちながら目を瞑るエヴァーたん

悠翔「エヴァアアアアツ！！」

ガシィッ

エヴァ「ゆ、悠翔……」

悠翔「ふう、良かったぜ無事で」

そう言いながらエヴァたんをお姫様抱っこする

今、俺最高にカッコイイな

エヴァ「……………何故ここにいる？」

上に向かうなか、エヴァたんがそう聞いてくる

悠翔「エヴァが心配だったから。それに言ったはずだぞ、停電の時間、気を付けろって」

エヴァ「む……………そういえばそんな事を言っていたな。この事だったのか……………」

悠翔「ああ。っとそろそろ着くぞ」

エヴァ「……………とう…ボソッ」

悠翔「ん？なんかいったか？」

ホントは聞こえてたけどね

俺ですだから

エヴァ「……………あ……………とう／＼／」

悠翔「ハッキリ言ってくれないとわからないなー（超棒読み）」

エヴァ「くっ……………この……………ありがとうと言ったんだ！！この私が礼を言うんだ、有り難く受け取れ！！／＼／」

ナイス、ツンデレ

ネギ「エヴァンジェリンさん！悠翔さん！良かったです無事で……………」

カモ「ちょっと待ってくんねーッスか？兄貴。アイツは茶々丸を倒そうとしたとき、一緒にいた奴じゃねーッスか。そうそう簡単に信用していいんスかね？」

ネギ「で、でもカモ君、現に悠翔さんは僕を助けて……………」

カモ「いや、その助けたってのも怪しいぜ。なんてったって兄貴を連れてきたのはそこにいる魔獣ッスからね」

そう言つて、セリアを指差すカモ

当然の疑いなんだろうけど、コイツに言われると無性に腹立つ悠翔
「は！疑うのは勝手だが、これだけは言っておくぞ？俺はエヴァの
味方なだけだ、お前達がエヴァや茶々丸に危害を加えないなら、何
もしないし、少なくとも味方だ」

カモ「じゃあ、あの魔獣はどうやって説明する気だよ！？」

セリアね……なんて説明するかな……

悠翔「言っていていいか？仮契約のこと」

エヴァ「別に構わんぞ」

悠翔「そっか。セリアおいで」

セリア「はい、悠翔様」

俺が呼ぶとトテトテと歩いてくるセリア

犬みたいだな

悠翔「コイツの名前はセリア、エヴァと仮契約して出てきたアーティファクトで召喚したんだよ。ちなみにそのアーティファクトはコシな」

俺はセリアの頭を撫でながら説明し、CDをネギ達に見せる
相変わらずサラサラだな、セリアの髪

カモ「なるほど、アーティファクトの力か……それなら納得できるな……悪かったな、疑っちまって」

悠翔「別にいいさ。な、セリア」

セリア「……………／／／」

悠翔「セリア？」

セリア「ふえっ？…………あ、はい／／／」

あー、もしかしてフラグ立ったかな？

いいかもな、魔獣姦

ホント変態だな、俺

ネギ「あ、あの……勝負の結果は……」

悠翔「ん？ネギの勝ちでいいんじゃない？なあエヴァ」

エヴァ「むう……不本意だが一撃もらったのは事実だしな。今日の所は大人しく引き下がるよ」

悠翔「だってさネギ」

ネギ「そうですね！じゃあ約束通り悪いコトもやめて、授業にもしつかり出てもらいますからね」

エヴァ「……わかったよ（悠翔の授業は出るつもりだったなんて、口が裂けても言えん）」

素直だなエヴァたん

エヴァ「あなたが何を考えてるかなんて俺は知る由もなかった」

俺とこのかで仮契約

次の日、俺はエヴァたん、茶々丸と共に学園都市内にあるカフェに
来ていた

そういえばここでネギ達と鉢合わせするんだったよな

ネギ「あ……………」

エヴァ「ぬ……………」

悠翔「お……………」

ネギ「こ…こんにちは、エヴァンジェリンさん、悠翔さん」

エヴァ「フン！気安く挨拶を交わす仲になっただつもりはないぞ」

悠翔「相変わらず素直じゃないねえ」

エヴァ「うるさいっ、お前は少し黙っている！」

悠翔「うわっ、酷っ！茶々丸〜エヴァが酷いよ〜（泣）」

嘘泣きをして茶々丸にすがりつく

うん、キモイね、わかってるよそんな事

茶々丸「あああ……泣かないで下さい悠翔さん……オロオロ」

そう言っつて俺の頭を撫でてくれる

今日も茶々丸はいい娘です

てかオロオロする茶々丸つて、なんでこんなに可愛いんだろうな？

悠翔「グスツ……茶々丸だけだよ、俺の味方は……エヴァなんか嫌いだ！！」

まあ嘘ですけどね

エヴァ「なっ……き、嫌い？そんな……わ、私が悪かったよ、だから……嫌わないでくれ……／／／」

マヂですか、フラグビンビンですな

明日菜「ふふ〜ん……その様子だとエヴァンジェリン、あんた悠翔さんが好きなんでしょ？」

エヴァ「ブー……だ、誰がコイツなんか！」

そう叫び俺を指差すエヴァたん

ホントにコーヒー吹き出しやがった

てか顔真っ赤だぞ、エヴァたん

言わないけどね

言ったら死ぬかもしれないし

悠翔「ふーん、やっぱりエヴァは俺のこと嫌いなんだな」

とことん弄り倒しますよ、ええ

基本エヴァたんもいい娘ですから

エヴァ「だ、だからそうじゃなくてだな……ああ、もうっ……
……だよ／＼／」

悠翔「え？なんて？」

今回はマジで聞こえなかった

エヴァ「す……だ」

ああ、聞こえたよ

それでもハッキリ言うまで聞き返す

これこそ悠翔クオリティーだ

悠翔「すまん、もう一回言ってくれ」

エヴァ「す、好きだ……何度も言わせるな！」

し、死ぬ……萌え死ぬ

で、時間は飛び、放課後

うん、今日も一日平和でした

てか来週から修学旅行なんだよな

買い物行くかな……

とりあえず服とか下着類だけでいいだろ

後は大丈夫そうだしな

そんな風に考えていると、後ろから聞き覚えのある声が聞こえる

明日菜「おいネギー」

ネギ「ア、アスナさん!？」

振り向くとそこにいたのは、パクティオカードを握りしめたネギと明日菜達だった

声かけるか……

悠翔「よう、ネギ」

ネギ「ゆ、悠翔さんまで……」

このか「あ、悠翔さんや、悠翔さんも買い物なんか？」

悠翔「ああ、そうだよ」

このか「そか、じゃあウチらと一緒に行かん？」

悠翔「別にいいぞ」

嫁の頼みを断るはずなからうって

明日菜「そういえばさっきから何顔赤くしてんの？ネギ」

ネギ「い、いや別にっ……」

このか「あーネギ君何やソレ」

そう言っつてネギが握りしめているパクティオーカードを指差すこのか

流石占い研部長

目敏いな

「このか「ひゃーしかもアスナの絵がかいてあるー。やーん、かわえー」

俺はお前かわえーよ

明日菜「えー何…あ、ホントだ！…いつの間に…しかも何コレ、変な格好してるし…」

ネギ「い、いえっ、あのコレはっ…」

悠翔「そんなに慌てることないだろ、ネギ」

そう言っつて俺のパクティオカードをこのかに見せる

「このか「わー悠翔さんのまであるー、ええなー。アスナの方はかわええけど、悠翔さんの方はかつこええなあー」

まあ、偶然の産物ですがね

明日菜「ほら、このか！遊んでないで買い物行くわよ」

このか「あーん、もうちょっとー…」

明日菜に引きずられていくこのか

俺も行くか

「売店」

このか「次はこっち着てみんかー？」

悠翔「はいはい」

このか「わー、かつこええ！次コレなー」

悠翔「はいはい」

うん、完全に着せ替え人形状態だ

いろいろ着させられたよ？

ア ロからキ、終いにはルーシユや朱までな

んで今着ようとしてるのは、某女顔借金野郎が着用しているコンバツトスーツ、所謂執事服だ

なんでこんな物が置いてあるんだよ、この店

そんな風に物思いにふけていると、最初に着ていた服からパクテイオーカードが落ちる

悠翔「なあ、カモ」

カモ「なんスか？悠翔の兄貴」

コイツの中では、俺は敵から兄貴になっただけらしい

悠翔「このかと仮契約しようと思っただけど……」

カモ「お、いいじゃないっすか！このか姉さんもまんざらじゃないみたいですし……まかせて下せえ悠翔の兄貴、キツチリ仮契約、やらせていただきやす」

やっぱりカモとは気が合うな

悠翔「頼んだぞ」

このか「悠翔さん、手伝おうかー？ってもう終わっとなんか……」

カモとの密談が終わると同時に、このかが更衣室のカーテンを開ける
なんだその残念そうな顔は

この娘には羞恥心を教えてやらなきゃダメみたいだ……

いくら遅くても更衣室覗くか？普通

まあ、着替え終わってたからいいけどさ

このか「あーそのカードさっきのやー。もっかい見せてくれへん？」

悠翔「ああ、いいぞ」

このか「はぁーん、やっぱカツコエエなコレー。悠翔さんこれウチ
のも作ってくれへんかなー？」

悠翔「別に作れんこともないが、条件があるんだよ、それを作るに
は」

このか「条件？なんなんソレ」

言ったら引くよな絶対

原作じゃネギに言われても引いてなかったけど、それはネギが十歳
の子供だからだしな

自分より年上のそれも教師に、いきなりキスしなきゃ作れない、な
んて言われてみ！？

最悪、教育委員会とかに訴えられるぜ

それでも言っただけどさ

危ない橋？渡ってやろうじゃん

成さねば成らぬ、何事も、だ

悠翔「その条件だけど……俺とキスすることなんだよ」

「このか」へ……キス？悠翔さんと？」

ほら、絶対引いてるよ！

目が点になってるし

「このか」悠翔さんとキスカー……えへへ、ウチ別にええよ？悠翔さんとなら／＼／」

顔を赤くして、そう言うこのか

あれ？いつの間にこのかフラグ立ったんだ？

悠翔「いやいや、キスって口と口だぞ！？マウストゥーマウスだぞ！？ほっぺとかじゃないからな？」

自分から言ったくせに、いざそうになると動揺しまくりの俺ちゃん

基本初心者なんです

「このか」ええよ、それでも。悠翔さんにならウチの初めてあげても

／／／

はうあ!?

か、可愛い!

ドキがムネムネするよー(死語)

悠翔「そ、そうか…(カモ頼むぜ)」

カモ「(合点承知したっス)」

悠翔「じゃあ、目瞑ってくれ」

このか「うん」

その返事をして目を瞑るこのか

悠翔「いくぞ…ん」

このか「…ん／／／」

カモ「（ちょっと待って下さい、悠翔の兄貴！！）」

パアアアアア

キスと同時に魔法陣が眩い光を発し、空中にパクティオーカードが出現する

カモ「（ああ、やっちゃまったっス……もう離れても平気っスよ）」

悠翔「ん……（そうか、ところで何をやっちゃまったんだ？）」

カモの言葉に疑問を持ちつつも、このかから離れる

このか「うむ……えへへ、悠翔さんウチの初めて大事にしてな／＼」

俺が離れると顔を真っ赤にして、笑顔でこんな事をのたまりましたよ、この娘

いや可愛いよ？ど真ん中どストライクだけどさ……

いくら天然キャラでも、ここまできるとわざとに思えてくる

このか……………恐ろしい娘

このか「わあー！コレがウチのカー…………ド？」

悠翔「ん？どうした」

このか「えと…………コレ」

そう言つてパクティオーカードを俺に見せる

…………あれ？

そこには、俺のまわりに様々な武器が浮いている絵が描いてあつた

悠翔「（なあカモ、なんで俺の絵が描いてあるんだ？）」

カモ「（どうやら魔法陣を書き間違えてたみたいで、悠翔の兄貴を主にするはずが、このか姉さんを主にしちまつたみたいで…………）」

はあ！？

いや……俺としてはこのかとキス出来たし、多分違うアーティファクトが出て来るであろうパクティオーカードが手に入ったから、別にいいんだけどさ

このかがなんて言うかだよな

このか「むう、なんでウチの絵じゃ無いん？」

やっぱりご立腹のようだ

悠翔「ごめん……なんか間違えちゃったみたいで」

素直に謝る

この時期のこのかに、カモの事言う訳にいかないしな

このか「……じゃ、もっかいしーひん？／／／」

は……？

悠翔「するって……何を？」

まさかね、違うよね？

このか「そんなの決まっとるやん。それともウチに言わせたいん？
悠翔さん意地悪やなあ／＼」

やっぱりかあああ！！

やっぱりわざとなんじゃね？この娘

まあ、するんだけどね

だって嫁だもん（意味不明）

悠翔「ま、まあこのかが良いなら、良いけど……」

このか「そか、ならもっかい……ん〜」

目を瞑り、顔を俺に向けキスの体制をとるこのか

うん、綺麗だ……

悠翔「それじゃ……」

俺も目を瞑り、このかの唇に俺のそれを近付ける

そして俺とこのかの唇が触れ……

明日菜「あゝー！何やってるんですか、悠翔先生！？」

合わなかった……

空気読めコンチクショオオオオツ（泣）

てゆーかヤバイよね？これヤバイよね！？

見られちゃったよ、教え子に手を出すの

この場合は口か？

どっちでもいいや

悠翔「あ、明日菜……えっと、コレはだな……」

明日菜「悠翔先生がそんな人だなんて思いませんでした……」

ザ 勘違い

このか「アスナ！悠翔さんは悪くないんよ。ウチがあのカード欲し

いって、わがまま言ったからなんよ」

いい娘だな、このか

明日菜「そ、そう……なら、いいんだけど……」

いいの!?

まあ、そんな事がありつつも買い物を終え、今は帰り道

女子寮とエヴァさんの家の別れ道にいる

このか「じゃ、悠翔さん。今日はありがとう」

悠翔「ああ、こちらこそ」

ごちそうさまでした

ちなみに明日菜達は、もう女子寮に入ってしまった

このか「あつ、そや！お礼と言ってはなんやけど……ん／＼」

悠翔「んう！？」

はい、不意打ちくらいでした

にしても、このかがこんなに積極的だったなんてな……知らなかった

え？何されたんだって？

分かるだろ？話の流れ的に

このか「うむ……えへへ／＼次はカード作ってな？」

悠翔「ああ、わかってるよ……ナデナデ」

そう言っつてこのかの頭を撫でる

冷静に対応しているように見えるけど、内心じゃ動揺しまくりです

冷や汗ダラダラですよ

ヘタしたら前科モンだからな

嬉しいけどね

このか「んん〜……じゃあ、悠翔さん。また明日〜」

悠翔「じゃあな」

「エヴァ宅」

悠翔「ただいまー」

茶々丸「お帰りなさい、悠翔さん」

エヴァ「む、帰って来たか」

うん、なんかイイ

よくわかんないけど、イイ

エヴァ「ん？ちょっと待て悠翔」

悠翔「どした？エヴァ」

エヴァ「いいからじっとしている」

そう言っつて近付いてくるエヴァ

なんだろな？

エヴァ「クンクン……やはりな」

近付いてきたと思ったら、いきなり匂いを嗅いで、そう呟く

エヴァ「悠翔、お前から別の女の匂いがする」

お前は犬かつ！！

てか別つてエヴァたん以外って事か？

最近エヴァたんのデレ度が上がってきてる気がする

悠翔「修学旅行の買い物いったら、たまたま明日菜達に会ってな、

一緒に買い物してたからだろ」

エヴァ「ホントか？何かあったんじゃないか？」

悠翔「ただの買い物だろ？何も無いって」

エヴァ「ホントにホントだな？」

悠翔「ホントにホントだ」

どんだけ疑うんだよ

そんなに信用ないのかな、俺

エヴァ「……………」

悠翔「……………」

ジト目で俺を見つめるエヴァたん

無言……… 案外キツイ

エヴァ「嘘だな、その顔は何かあった顔だ」

悠翔「嘘じゃねーって」

スイマセン、嘘です

エヴァ「嘘だろ？」

悠翔「嘘じゃない」

エヴァ「嘘だろ？」

悠翔「嘘じゃねエヴァ「嘘だっ！！！！」

ちよっ……ひぐしwwww

こえーよ、エヴァたん

赤い目で睨みつけてくるエヴァたん

軽くバンパイア覚醒してね？

エヴァ「嘘だよな？」

悠翔「はい、嘘です。このかと仮契約しました」

エヴァ「たんの異様な圧力に負け、正直に話すビビりな俺

悪かったな！チキンで！！

エヴァ「フン、そんな事だろうと思ったよ」

あれ？意外と怒ってない？

悠翔「あの……エヴァ？」

エヴァ「そうかそうか、じじいの孫と仮契約か……随分手が早いじゃないか、ん？」

悠翔「いや、そういう訳じゃ……」

エヴァ「ふふっ、まあいい……今日の所はこれ位で勘弁してやる。ただし次からは嘘はつくな、わかったな？」

悠翔「ああ、わかった」

エヴァ「わかればいいさ。それと……んむ／＼／」

悠翔「むう!?!」

エヴァ「あなたがキスをして来る」

え、何?何が起こったの?

エヴァ「む……ん……あむ……」

俺が何が起こったのかわからず、茄子がまま……違った、成すがままになっていると、エヴァさんの舌が口の中に入ってきた

悠翔「んう……あ……む」

俺とエヴァさんの舌が絡み合い、淫靡な音が辺りに響く

これなんてエロゲ?

まあ、いいさ

願ってもないチャンスだ、存分に楽しませてもらう

そう思い、成すがままだった状態から一転、攻めにまわる

悠翔「ん……む……うん」

エヴァ「ん……む!? む~~~~~//」

全力でエヴァたんの口の中を犯す

悠翔「うむ……あ……むん」

エヴァ「……& \$ x > % @ ! ? //」

『しほらくお待ち下さい』

エヴァ「ハア……ハア……」

キスで腰が抜けたのか、座り込んでいるエヴァたん

息が荒いうえ、頬を朱に染めたその姿は十歳（体的に）とは思えな
いほど色っぽく、魅力的だった

さすが合法ロリwwww

だんだん官能小説っぽくなってきたな、コレ

ま、いつか。叩かれるの作者だし

いちいち気にしてたらキリがない

悠翔「大丈夫か？」

俺はそう声をかける

俺がやったんだけどね

エヴァ「む……まあ、大丈夫だ」

悠翔「立てるか？」

エヴァ「ああ……………まだ無理そうだ」

立とうとするが再び座り込む

悠翔「そうか、なら……………よっ…と」

俺はエヴァたんをお姫様抱っこする

最近コレばっかやってる気がする

エヴァ「な、ななな、何をするんだ、いきなり／＼」

そう言っつて赤い顔を更に赤く、否、紅くするエヴァたん

最高に可愛いな

さすが俺の嫁（ またまた意味不明）

悠翔「歩けないんだろ？」

エヴァ「むう……………しょうがないな／＼」

悠翔「嫌なのか？なら……」

そう言ってエヴァたんを降ろそうとする

エヴァ「嫌じゃない！嫌じゃないから……止めないでくれ／＼／」

は、鼻血が……

悠翔「そうか？ならいいんだけど……」

そう言いエヴァたんを抱いたままりピングに向かう

その途中エヴァたんが突然俺を見上げて

エヴァ「それとだな、悠翔……その……おかえり／＼／」

笑顔でそう言うエヴァたん

もう死んでもいいや、俺

感想……今日は幸せな一日でした

「J」のかよびと

このか「コレなんかどやろ、悠翔さん」

悠翔「いいんじゃないか？似合ってるぞ」

このか「あんもー、悠翔さんたらちやうてー」

今俺はこのかと原宿に来ている

何故こんな所にいるのかというと、明日菜の誕生日プレゼントを買いに来たからだ

本当はネギのはずなんだけどなあ……

急用だつてさ

確か原作通りなら、チアリーディング部の三人がつけて来てるハズだけど

………いるな、あいつら

尾行が下手すぎる

あんなに騒いでたら普通わかるだろ

何言ってるかまではわかんないけどな

桜子「ね、ねえアレってデートだよね？」

円「で、でも悠翔さんも先生だし……ちょっとした兄妹感覚で買い物に来ただけじゃー」

美砂「それでわざわざ原宿まで出てくるー？」

桜子「あーわわわ、ただ、大変かもーっ」

円「誰かに知られたらマズいよ、これ」

美砂「生徒に手を出すなんて、悠翔さんクビだよクビ〜」

桜子「それはダメーッ！私悠翔さんのこと……あっ……」

美砂「ほうほう円さんや、良いことを聴きましたな」

円「……………」

美砂「円？」

円「へ？あつ、ゴメンゴメン。桜子もだっただーと思って……………」

美砂「桜子”も”？」

円「あ”っ……………」

美砂「成る程成る程、あんた達二人はライバルという訳だ」

円「や、別にそういうのじゃ……………ねえ桜子？」

桜子「そそ、そうそう、私達は別に……………」

美砂「ふ〜ん……………とにかく当局に連絡しなくちゃ」

桜子「ととっ、当局って！？職員室!？」

美砂「バカ、んなどこ連絡したら即クビ&退学でしょ」

桜子、円「それだけは絶対ダメーッ！！！！」

あいつら騒ぎすぎだろ

相変わらず何言ってるかわかんねーけどな

このか「どうかしたん？悠翔さん」

悠翔「ん？何でもないよ、ただ誰かにつけられてる感じがしてな」

このか「ふふっ、そんなはずないやろ？でも、もし本当なら見せつけたくなるなー……えいっ」

そう言って俺の腕に抱き着くこのか

胸が当たってるよ

言わないけどね

言っても離れるとは思えないし

悠翔「はは、そうだな。でもゴメンな、ホントはネギと来るはずだったんだろ？」

微塵も悪いなんて思っちゃいけないけどね

まさしく嘘八百だな

このか「ううん、ウチ嬉しいんよ、悠翔さんの方からこんな言い出してくれるなんて」

悠翔「このか……」

完全に勘違いされる台詞だろ、それ

円「そ、そんな……」

桜子「悠翔さんの方から……?」

美砂「だ、大丈夫だよ二人共。まだわかんないし」

桜子「美砂は他人事だからそんなふうには言えるんだよ」

美砂「た、他人事って……あんたねえ」

円「桜子の言う通りだよ」

美砂「だから……あーもう!私にとっても一大事なの!あんた達と同じだから!」

円「お、同じって……」

桜子「まさか美砂も?」

美砂「……………うん」

円「は、はは、そっか、美砂もか……でも美砂って彼氏いたよね?」

美砂「ふ、フラれたのよ……」

桜子「ドンマイ、美砂」

美砂「ありがとう」

円「で、でも負けないわよ」

美砂「上等！受けてたってやるわよ」

桜子「私も負けないよ」

円「悠翔さんは……」

桜子「悠翔さんは……」

美砂「悠翔さんは……」

三人「渡さない……」

桜子「つとまあ、三人の友情を深めた所で、どうする?」

円「どうするったって……」

美砂「決まってるでしょ、このデートが上手くいかないように妨害するのよ」

円「ぼ、妨害!?!」

桜子「い、いいのかな、そんなことして……」

美砂「いいのよ!命短し、恋せよ乙女ってね」

桜子「ちょっと違う気が……」

円「と、とにかく明日菜に連絡を」

このか「なー悠翔さん、これなんかどやろ?」

悠翔「へーパールックか、いいんじゃないか？」

このか「もー、悠翔さんだったら、さっきからそれしか言つとらんよ」

悠翔「そうか？」

全然気付かなかつた

後ろの連中の会話が気になつてね

このか「せやつて。それともウチとのデート、そんなに楽しめないか？」

悠翔「いやっ、違う違う、ちょっとボーっとしてただけだから」

このか「ほうか？ならええんやけど……」

そう言つて俯くこのか

罪悪感が半端ないんだが

そのあとは、このかとウィンドウショッピングを続けた

このかの機嫌を治すのに時間がかかったのは、また別の話

まあ、例によってチアリーディング部の三人が変装（って言っているのか？）して邪魔してきたけどな

無茶苦茶疲れた……

で、時間は夕方

俺達は階段に座り、少し休憩している

悠翔「いやー、疲れたなー」

このか「せやなー、一日中歩き通しやったからなあ……そうや！悠翔さん、ちよつとええかな？」

そう言っつて俺の肩を掴むこのか

そのまま俺の頭を自分の膝に乗せる

これが伝説の……

H I Z A M A K U R A

このか「悠翔さん、どうや？ウチの膝は」

最高です

やべっ、眠く…な……

俺はそのまま意識を手放した

このか「ふふっ、寝てまう程ええんかな？悠翔さん、いつもはかっこええお兄ちゃんやけど、寝顔は子供みたいでかわええなあ」

桜子「ああ〜っ、膝枕だーっ」

円「しっ！桜子、声でかいよ」

桜子「う、うめん…」

美砂「しかし膝枕か、このかめ……意外と難敵かもしれないわよ」

桜子「そんな、うつつ……勝てる気がしないよ」

美砂「何言ってるの！諦めたらそこで試合終了よ」

桜子「そ、そうだよ！人間諦めないことが大事だよ」

美砂「そう！その通りよ、桜子。諦めず頑張りましょう！」

桜子「はい、美砂先生……！」

桜子&美砂「エイエイオー……！」

円「あんだ達……それやってて虚しくない？」

桜子&美砂「結構虚しい……orz」

円「ん〜？あっ！ちよっ！二人とも、あれ！！」

このか「あ、そやカード！悠翔さんにキスしたら出てくるんやっ
た！うふふ、丁度寝とるし……」

桜子「えっなっキス！？」

円「え！？？するの！？」

桜子「と、止めなきゃ……！！」

美砂「でもカードって？」

このか「ん〜〜」

桜子「ちよ……あ〜〜」

円「このか……！！」

このか「やっぱりやめた。いくらなんでも、寝てるこの唇奪つの

はアカンな」

ドサッ

このか「あら？どうしたん？三人共」

明日菜「このかー！」

ネギ「あ、明日菜さん、待って下さい」

あやか「明日菜さん！ネギ先生がお困りでしょう」

このか「あれーアスナにネギ君、いいんちよまで？なんやーみんなそろってこんな所でー？」

ネギ「こここのかさん、悠翔さんとデートってホントだったんですかー！？」

うるせえな

せっかく気持ち良く寝てたのによ

え？いきなり出てくるなつて？

しかたねえだろ？今まで寝てたせいで、ナレーションする奴いなか
つたんだから

明日菜「こ、このか、あんたホントに悠翔さんと……？」

このか「あちゃーもしかしてバレてたんか？／＼／」

あちゃー、じゃねえ！！

その言い方は、完全に誤解される言い方だ！！

てか起きるに起きれないんだが

中学生に膝枕とか……恥ず過ぎる

このか「悠翔さん、起きてくれんか？」

起きるしか無いのか？

いや待て、考えるんだ！

この状況を打開する術を！

どじする？どじするよ俺！？

今こそライフカードを……！

？そのままこのかの膝をゴロゴロペロペロ

？寝ぼけたふりしてこのかに抱き着く

？このかにk i s s

？このかのスカートに頭を突っ込んで、クンカクンカ

……あー、なんだコレ？

まともな答がねえ！！

全部下ネタじゃねえか！！

最低だ、俺……

自覚はあるんだよ、自覚は

やっぱり普通に起きるしかないか……

悠翔「よお、お前ら、揃い踏みだな」

起き上がりながらそう言う

このか「悠翔さん、どうやらバレてたみたい」

悠翔「バレちまったか……どうする？」

俺はそうこのかに問いかける

丸投げとか言うなよ

あやか「バ、バレてたって……」

明日菜「じゃあやっぱあんた達……」

このか「うん、こうなったらしゃーないな」

悠翔「そうだな、一日早いけど……ま、問題ないだろ」

このかとの相談の結果、プレゼントは今渡すことに

悠翔「ほれ、明日菜。誕生日おめでとう」

明日菜「へ………?」

ネギ「あっ！そうでした！明日、明日菜さんの誕生日でしたね」

悠翔「今日は朝からこのかと一緒に、このプレゼントを選んでたんだよ」

このか「アスナの好きな曲のオルゴール……」

あやか「な………そ、そう言えば……」

桜子「あー………」

美砂「ああーッ！！そうそう」

桜子「私達もプレゼントあるよ、アスナッ」そう言いながら、明日菜にプレゼント、基俺達を妨害した結果、手に入れた不要品を渡す

ネギ「明日菜さん、良かったですね」

明日菜「う、うん。ありがとう悠翔さん、このか、みんな……こないきなり……わ、私……私嬉しいよっ」

そう言っつて涙目になる明日菜

意外と可愛い

ネギじゃないからあやかが怒ることもないし、このまま感動的に終わるのもありかもな

ま、最後の最後で爆弾投下するのが俺なんだけどさ

悠翔「いい雰囲気のとこ悪いけど、ネギはプレゼントないのか？」

瞬間、まわりの空気が凍った

ネギ「えつと……すみません明日菜さん、まだ準備してないんです……」

明日菜「いいのよ、プレゼントなんてなくても、私はみんなの気持ち嬉しいのよ」

なんだよ、くそ面白くもない

コメディ―路線に持ってこうとしたのに、一言でシリアス路線に戻されたよ

その後はカラオケに行つて、歌いまくりましたよ

何故かもと居た世界の曲があつたからな

コスプレ衣装がある時点で予想は出来てたけど

明日菜「このか、ごめんね。変なふうに疑っちゃって……」

このか「へ？何の話？」

やはりこのかは最強の天然だった！！

修学旅行スタート！（前書き）

連投その1

修学旅行スタート！

茶々丸「おはようございます、悠翔さん」

悠翔「ああ、おはよう、茶々丸」

うん、いい朝だ

このかとのデート擬きから2日、今日は修学旅行当日だ

んで現在朝の五時半

教員は早めに行かないといけないんだよ……まだ眠いの

茶々丸「悠翔さん、朝食の準備ができました」

悠翔「ありがとう」

やっぱり茶々丸最高だわ

この従順っぷりが、グッとくる

エヴァ「くあゝ、むう……」

茶々丸の朝食を食べつつ和んでいると、エヴァたんが起きてきた

悠翔「ん？今日はやけに早いな、修学旅行に行くわけでもないのに」

エヴァ「フン！見送りくらいはと思ってな。せいぜいガキ共と楽しい旅行をしてくるがいい」

そう言い捨てるエヴァたん

朝からキツイですな

しかしエヴァたんが見送りか……可愛いところあるじゃん
知ってたけど

まさに、ツンデレだね

大好物です、はい

今日はちょっと違う感じに弄ってみるか

悠翔「見送りが……ふふっ」

エヴァ「む？何が可笑しい」

悠翔「いや、ただエヴァはやっぱり可愛いな、と思ってな」

エヴァ「かわっ……！いいいきなり何を言い出すんだ！！／＼／」

悠翔「だって事実だしね」

エヴァ「うう……も、もうおおお前なんて知らん！！／＼／」

悠翔「知らんって……まいいや、俺はエヴァの側にいられるだけで
幸せだしな……あわよくばずっと一緒に居たいけど」

エヴァ「ななな何を言っているんだ……いや、まあその……わわ私
も／＼／」

グツハア、マジで死ぬるよ

でも完全俺にフラグが立ってるな、ナギはどこに逝ってしまったん
だろうな

そのままエヴァたんを軽く弄りつつ、朝食を食べ、準備を始める
俺が玄関から出ようとすると、エヴァたんが話しかけてくる

エヴァ「逝くのか……」

悠翔「ああ……」

逝くのが違うのには、絶対にツッコまないからな

時間は飛び、場所も飛び、現在八時半、大宮駅にいる

悠翔「よっ、ネギ」

ネギ「あ、悠翔さん！おはようございます」

まき絵「おはよー悠翔先生」

悠翔「ああ、みんなおはよう」

「「「おはようございまーす」「」」

うむ、元気でよろしい

さって、一通り挨拶もすましたし、隠れてる刹那とこ行くか

悠翔「こんな所に何隠れてるんだ？刹：ブンツ…那」

刹那「あつ！悠翔先生！？」

いきなり夕風振るなよ！抜いてないとはいえ当たったら痛いんだぞ

悠翔「いきなりそれは無いだろ、刹那」

刹那「すす、すいません。いきなり話しかけられたのでびっくりして……つい」

つい！？ついつて、そんなんで一々刀振ってたら、まわり死体だらけになるよ！？てかまず刀を常に携帯してるってどうよ！？いいの？ここは日本だぞ！？銃刀法違反だぞ！？何故に捕まらない！？

刹那「あの……」

おおっと、いろいろシツコミどころが多すぎて、黙りこんでたみた
いだ

悠翔「いや、いいんだけどさ、当たってないし」

あえて言わない俺は紳士だと思っ

刹那「そうですか……」

悠翔「おう！だから気にすんな」

刹那「はい」

しずな「それでは京都行きは3A、3D、3H、3J、3Sの皆さん、各クラスの班ごとに点呼をとってからホームに向かいますよ」

悠翔「よし、行くぞ刹那」

刹那「はい」

刹那を連れてネギの元へ向かう

んで、電車に乗った

え？何かなかったのかって？

強いて言うなら本当はネギが点呼をとるはずだったのに、一斑と四班の点呼が俺で、五班は二人で点呼をとったことくらいかな

さて、お次はカエル地獄だな

うえ、想像しただけで吐き気がしてきた

いくら式神でもキモいもんはキモい

で、現在新幹線の車両の間に待機中です

騒いでる声が聞こえてるから、カエルは出てきたのかな

ま、目的は刹那だしたいした害もないから関係ないけどね

つと、来たな

刹那「っ！悠翔さん！？何故ここに……」

君に会うためだよ、せつちゃん

悠翔「刹那こそ、なんでこんな所にいるんだ？」

刹那「そ…それは（マズイ……悠翔さんは一般人、その上教師という立場だ……夕凧を見られる訳には……）」

悠翔「ま、いいや俺は戻るからな」

刹那「は、はいっ」

返事を聞き、刹那に背を向ける

悠翔「そうそうその”刀”、あぶねえからあまりに振り回すなよ？」

背中越しにそう声を掛け、歩き出す

刹那「はあ……（っ！？何故コレが刀だと？夕風は見られていないはず……まさか、悠翔さんが西のスパイ？」

ま、伏線はこれくらいでいいだろ

後はしばらく大人しくしとくか

露天風呂にて（前書き）

連投その2

ちょっと短めです

露天風呂にて

悠翔「くああ、いい湯だなあ、ネギ」

ネギ「そうですね、僕は露天風呂に入るの初めてなので」

今俺はネギと一緒に露天風呂に入っている

え？章タイトル？関係ないよ？

酒は飲んだけど、特に原作との齟齬もなかったし

カラカラカラ

っと、刹那が来たな

ネギと二人で岩に隠れて覗く

てか、いくら十歳でも覗きはいかんでしょ、覗きは

俺？俺はいいんだよ、嫁だから（更に意味不明）

それにしても綺麗だよなー、刹那

刹那「困ったな…魔法使いであるネギ先生なら…何とかしてくれる
と思ったんだが……」

魔法とか平気で口に出すなよWWW

ネギ（…え！？ええっ！？な、なぜ僕が魔法使いだと……？）

刹那「殺気？誰だっ！？」

やっべ！そう言えば斬岩剣使ったっけ？ネギはちっちゃいから
いけど俺は首が切れる！！

悠翔「瞬動お！！！」

まだ死にたくなかです

俺が瞬動で逃げると一瞬遅れて岩が吹き飛ぶ

あ、危ねえ（汗）

その後は原作通りにネギが刹那にナニを掴まれ、敵ではないと説明
する

ネギ……このラッキースケベめ!!!

というか刹那さん？そのバスタオルはどこから出したんでっしやるか？

このか「ひゃあああ〜っ！」

ネギ「こゝこの悲鳴は……」

刹那「このかお嬢さま!？」

そう言つて脱衣所に向かうネギと刹那

俺も行くか……腰にタオル巻いてっつと

明日菜「ま、まって二人とも。このかがおサルにさらわれてるよ〜
〜!？」

このか「ひゃあああ〜!？」

あるえ〜?タイミング逃した?

刹那「お嬢様！！神鳴流奥義　　百烈桜華斬！！」

そう叫びこのかを拐おうとしていたサルを切り刻む

ん？まだ何匹が残ってるな

悠翔「アデアット」

ダンッダンッダンッ

俺は刹那が倒しきれなかったサル共を片っ端からCDで撃ち抜く

え？パクティオーカードはどっから出したかつて？

そこはホラ、主人公スキルってことで

ネギ「ゆ、悠翔さん！！」

刹那「このか「え！？」

おーおー、驚いてる驚いてる

明日菜「ゆゆ悠翔さんなんでここに!？」

悠翔「いやそれコッチの台詞だし…いきなり入って来たのは明日菜
たちの方だろ？」

明日菜「そ、そういえば……」

何故俺が責められる？

悠翔「それよりこのか、大丈夫か？」

このか「や…ゆゆ悠翔さん……あんま見んといてえ〜!!」

そう叫び走り去るこのか

軽く………ショックです(泣)

刹那「悠翔さん、その銃は……やはり貴方が西のスパイ……!!」

そう言つて夕凧を構える刹那

いやいや、今を見てなんで俺が敵だと思つんだ？

明らかにこのか助けてただろ

明日菜「さ、桜咲さん、悠翔さんは味方だよ」

ネギ「そうです、僕達も助けてもらったことあります」

助け……？ああ！エヴァちゃんと戦つたときか！！

刹那「そ、そうでしたか……すみません、変な風に疑つてしまつて、
ではやはり悠翔さんは魔法先生なんですか？」

悠翔「ん〜、厳密に言つと違つけど、そう考えてくれて構わないよ」

刹那「厳密に……とは？」

悠翔「一応魔法も使つけど基本的には気で戦うからな」

刹那「成る程……」

納得してもらえたようですねによりです

ちなみに明日菜とネギは何を言ってるのか分からない、という顔を
していた

その後は風呂から上がり刹那とこのかの昔話を聞き、
3 ガーディアンエンジェルス A 防衛隊
を結成してた

俺は横で見てただけだけどな

あつ……新しいアーティファクトの能力確認しておかなきゃ

今夜、もう一度このかが拐われるし、やること山積みだろ！！

おはあちゃんが言っていた…… (前書き)

連投その3

おばあちゃんが言っていた……………

俺は今、駅にいる

なんでかって？このか助けるためだよ？

そうそう、俺の新しいアーティファクトだけど、マジでヤバイ

まず名前な『王の財宝』だとさ

はい、まんま某英雄王の宝具ですね

まあ、名前だけだけど

で、能力だけど、俺が想像した武器を創造できるみたいだ

いろいろ制約はあるけどね

一つ目・武器は二種類同時に創れない、ただ元々二つの武器とか一連のツールなら創れるみたいだ

二つ目・俺が武器と認識している物しか創れない、試しにリリカルなのはのデバイス創ろうとしたらダメだった。ま、俺の中では頼れる相棒って認識してるからな。そのかわりライダーベルトとか口ポット（主にガンダム）とかは創れた、勿論本物だ

んで今はいろいろ武器創って遊んでる

このアーティファクト、俺にとっては最高の一品だ

何せあの糞爺からあらゆる物での戦い方を教え込まれたからな

何度投げ出そうとしたことか……

だってさ剣や銃ならまだ分かるよ？人生いつ何が起こるかわからないしね、今の俺みたいに

ただどさストローや爪楊枝での戦い方まで教えなくてもいいと思うんだよ。糞爺曰く、どんな状況でも戦うためらしい

おかげで爪楊枝一本あれば人を気絶させられる位の技術は身につけることができた。ま、あくまで不意打ちとして、けどどな

んで、流石にストローで戦うことはないだろ……そう思った時期もありました

え？なんで過去形かって？

実際あつたんだもん、ストローで強盗犯撃退したこと……

え？ストローでの戦い方？高速でストローを振り抜いて鎌鼬を起すだけです、何か？

まあ、その話は今度するとして

そろそろ来る……来たな

千草「フフ…よーここまで追ってこれましたな」

良く見ると千草も美人だよな

まあ興味ないけどな

そういやロリコンって見た目なのか？それとも年齢なのか？

っと、そんな事考えてる間に戦いが終盤に差し掛かっていた

増援の月詠と…誰だアレ？

そこには千草を守るように、猫耳美少女が立っていた

うお！あの猫耳美少女、ネギの『戒めの風矢』を気をぶつけただけで相殺したぞ

原作にはいなかったぞ、あんなキャラ

アレか、俺というイレギュラーのせいでセカイが変わり始めてるのか？

千草「ホーホホホホ！まったくこの娘は役に立ちますなあ！この調子でこの後もしょー千草下がれ」なんや陽光はん、どないしたん

や？」

陽光「アイツ等以外に誰かいる……」

すっげ……気配は極限まで隠してるのに気付かれた

ま、いいや。今はカッコ良く登場するだけだ

俺は隠れていた場所から、出ていく

因みにライダーベルトも装着済みだ

今回はカブトだ、章タイトルで分かった人も、いるかもしれないけど

悠翔「おばあちゃんが言っていた……子供は宝物。この世で最も罪深いのは、その子供を傷つける奴だ……」

一度言ってみたかったんだよな、コレ

陽光「誰だ!？」

悠翔「俺か？俺はな、お前等が拐おうとしてる、その娘の副担任の先生だよ」

はい、ごく んです

わかる人いるかな？

千草「その副担任が何の用や」

悠翔「なあに、ちよいと人助けをね」

陽光「千草、オレから離れるなよ」

あの猫耳美少女オレっ娘なのか……

千草「大丈夫や陽光はん、お嬢様がいる限りアイツは手出し出来へんはずや」

悠翔「さて、そいつはどうかな？」

そう言いながら、手を上に向ける

すると何処からともなく赤いカブト虫が現れ、熊鬼、月詠、陽光を吹き飛ばし、俺の手にとまる

陽光「な、なんだ!？」

刹那「赤い、カブト……虫?」

明日菜「何あれ!？」

ネギ「何でしょう?」

おお、いい感じに驚いてるな

悠翔「お前達に、俺の力の一端を見せてやるつ。変身」

『ヘンシン』

そう言っつて、俺は仮面ライダーカブトに変身する

陽光「鎧!？」

まあ、初見じゃそうみえるよな

悠翔「まずはその熊公からだな」

そう言いカブトクナイガンで熊鬼を撃ち抜く

陽光「何！？」

千草「ウチの熊鬼が、あんなにあっさり送り返されてもった！？」

慌てる千草と陽光

ま、当然か

悠翔「さて、お次はこのかを返してもらおうぞ。避けるよ？キャスト
オフー！！」

そう叫び、カブトゼクターのホーンを倒す

『キャスト オフ』

電子音声が流れると周りの外装が弾け飛び、カブトライダーフォー
ムへと変わる

『チェンジ ビートル』

「「「変わった!?!」」」

全員声を揃えて叫ぶ
こいつら実は仲いいんじゃないね?

悠翔「クロックアップ!」

『クロックアップ』

俺はクロックアップのセカイに入る

ウホッ、ホントに周りが遅く見えるZE
キモいですね、サーセンWWW

「「「消えた!?!」」」

やっぱり仲いいだろ、コイツ等

さてと、まずは月詠からだな

俺は呆然と立っている（ように見える）月詠を陽光に向かって殴り飛ばし、そのまま走り今度は陽光を、飛んできている月詠に向かって蹴り飛ばす。すぐに走りだし、千草からこのかを掻っ払い刹那の元へ跳ぶ

『クロックオーバー』

電子音声と共にセカイが再び動き始める

陽光「がっ!!」

月詠「うっ!!」

狙い通りぶつかったようだ

悠翔「刹那、このかを頼むぞ」

刹那「は、はい」

俺はこのかを刹那に渡し、振り向く

千草「なっ……いつの間になっ!？」

悠翔「さてね。教えてやる義理はないな。それじゃあ、『お話』しようか?」

魔王流だけどな!!

『ワン・ツー・スリー』

千草「な、なんかヤバそうやな……ここは逃げるが勝ちや!」

そう言っつて陽光と月詠を拾い、逃げようとする

悠翔「逃がすか!クロツクアップ!」

『クロツクアップ』

俺は再びクロックアップのセカイに飛び込む

さて、とっととやりますか

三人共まとまってくれたのは好都合だったな

悠翔「ライダーキック」

『ライダーキック』

電子音声と同時にベルトからタキオン粒子が放出され、頭のホーンを經由して右足に蓄積される

悠翔「ハアッ！！」

『クロックオーバー』

ライダーキックが当たると同時にクロックアップが解ける

千草「あ〜れ〜」

陽光「うわああああー!？」

月詠「きゃあああ！」

おお、盛大に飛んでったな

俺は右手を上げ、人差し指で天を指差す

そう、天道総司のあのポーズだ

あれ？俺今メチャクチャカッコ良くない？

ダメだこいつら……早くなんとかしないと

って訳で修学旅行二日目、現在班別行動中です

因みに俺は五班とまわっている

のどかがネギを誘ったことで、同行することになった

え？昨日の夜？

まあ、あの後はこのかの目が覚めて概ね原作通りにいったよ

変わったことといえば、俺が乱入したことで、このかの服が消えて
なかったこと位だな

まあ、その……なんだ。このかの浴衣がいい感じに着崩れて、妙に
エロかったとだけ言っておこう

ごちそうさまでした

まあそれはさておき

班別行動だが

一言で表すならカオスだ。正にカオス

パルとゆえはのどかに告らせようと躍起になってるし、このかは
のので刹那追いかけて廻してるし、俺完全に蚊帳の外なんだが……

ザジ「……………」

うおおっ！いきなり現れるの止めてもらえます？

いくら何でも、心臓に悪いから！

ザジ「……………」

悠翔「慰めてくれるのか？」

ザジ「……………」
「コケッ」

悠翔「ふふっ、ありがと、ザジ」

そう言ってザジの頭を撫でる

若干顔が赤いのは俺の気のせいだろう

気のせいだと信じたい

ザジ「……………//」

ジーザス…………orz

知らぬ間にナデポを会得していたらしい。気をつけねば……

ザジは好きなキャラだしいいけどね

因みにのどかの告白は原作通り成功したらしい

ネギが知恵熱でぶっ倒れてたからな

で、夜になった訳だが…………うん、まあ、予想通りと言っか、何と言
うか…………

その夜、朝倉に魔法がバレた

俺の事もな！

巻き込みやがって

悠翔「ざけんじゃねえぞ、ああんっ！俺は面倒事が一番嫌いなんだ
よ…………」

ネギ「うう…………す、すみません」

悠翔「すまんですむか、ボケエ!!」

明日菜「ゆ、悠翔さん。絡み方が完全に不良になってるわよ」

おおつと、怒りに我を忘れてたぜ

ま、いいや。もうすぐ朝倉が来るだろうから、O H A N A S
Iすればいいか

朝倉「おーい、ネギ先せ……い……」

悠翔「来たな、朝倉あ……ニタア」

朝倉「ひっ……ゆゆゆ悠翔先生、目が、目が笑ってないよ」

悠翔「ソンナコトナイヨ？」

朝倉「何故に片言!？」

悠翔「ほう。ツッコミする余裕があるなら大丈夫だな。さて、『お
話』しようか?」

制服の後ろ襟を掴み、引きずる

朝倉「イヤアアアアアア！！！！」

そのまま朝倉を物陰に連れていく

事情を知らない奴からしたら、立派な犯罪現場だな

ネギ「だ、大丈夫ですか、朝倉さん」

朝倉「ひ、酷い目にあつた……」

悠翔「ほう、まだ足りないか？」

そう言いながら、朝倉の顎を持ち上げる

朝倉「あ……………//」

恍惚とした表情を浮かべる朝倉

うん、可愛い

明日菜「ちょっ……悠翔さん！朝倉になにしたんですか！！」

悠翔「タイシタコトジヤナイヨ？」

明日菜「何で片言なんですか！？」

悠翔「……………別に」

明日菜「今の間は何！？」

え？朝倉に何したかって？

想像に任せるよ。ただ一つ言えるのは、俺が変態という名の紳士だ
ということだけだ

ラブラブキッス大作戦！？（前書き）

連投です

ラブラブキッズ大作戦！？

さてさて、あの後騒いでいた3 Aの面々を叱り、部屋に戻ってきたのはいいけど

悠翔「なあ、ネギ。何か寒気がしないか」

ネギ「あつ、悠翔さんもですか？実は僕も……」

これは、アレだ。第六感がここから逃げると告げている

悠翔「ネギ、俺はパトロールに行ってくる」

ネギ「あ、はい。じゃあ僕も身代わりを用意して行きます」

ネギの言葉に頷きで返し、外に出る

何か忘れてる気がするんだよな……

陽光「お前、昨日はよくもやってくれたな！今度こそ潰す！！」

あー、なんだ？

只今、昨日の猫耳美少女に襲われてます

悠翔「あぶねっ！」

突然殴りかかってきた拳を避ける

気が滅茶苦茶乗ってるんですけど……

悠翔「何すんだ、いきなり！」

陽光「うるさい！さっさと潰れるおおおお！！！！」

ドゴオオオオツ

ちよっ！地面にクレーター出来てるよ！！

とつかあの娘、拳が……

悠翔「おいつ、やめろ！拳から血が出てるぞ」

陽光「うるさい！これくらい、どつってことない！！」

なんだ？何でこんなに必死なんだ？

そんなに東が嫌いなのか？

いや、だったらこんなに強いのに誰かの下についているのはおかしい

何か理由があるのか？

悠翔「何でそんなに必死なんだ？」

陽光「うるさい！お前に言ったってどうにもならねえよ」

ふむ、この反応からするに……人質か？

悠翔「なあ、誰か人質にとられたりしてるのか？」

陽光「っ！？」

あらら、凶星か

悠翔「話してくれないか？何か力になれるかもしれない」

ここは魔王流でいこう

陽光「話したって無駄だ！どうせお前も”正義の味方”なんだろう！？」

悠翔「は？」

何言ってるんこの娘？

陽光「は？って……だから、お前もオレ達を捕まえに来た正義の味方なんだろう！！」

……なるほど、大体事情はわかった

要約すると、この娘達は正義の味方とやらに追われ、この京都に辿り着いたのはいいが、関西呪術協会に人質（おそらく家族だろう）をとられ仕方なく従っている……と

ま、いいや。とりあえず俺が返す言葉は一つだな

悠翔「正義の味方？ ナニソレ食えんの？」

陽光「え？」

おお！そのキョトンとした表情いただきー！

自前の音無しカメラで激写！激写！激写あ！！

陽光「テメツ、なに撮ってんだよ」

悠翔「いや可愛かったから、つい」

陽光「かわっ……！！／＼／＼、そんな事言っても逃がさねえぞ」

悠翔「わかってるよ。とりあえず話を聞かせてくれ」

陽光「話したって、何も変わらない！」

はあ、コイツは骨がおれそうだ

悠翔「話してみなきゃわかんないだろ」

陽光「うるせえ！そうやっていい人面して、オレ達を利用するつもりなんだろ！？」

そう叫びながら、気弾を放ってくる

それは俺の足元に当たり、煙がまう

陽光「悪魔め……！」

あれ？コレはさそってんの？さそってるよね？……よし！

悠翔「悪魔でいいよ。悪魔らしいやり方で、お話聞かせてもらおうから」

思わずネタに走った俺は悪くない

悪くない……よね？

陽光「くそっ、次は必ず潰すからな！覚えてろ……！」

捨て台詞を吐き、跳び去る陽光

結局なにがしたかったんだ？

……………帰る

side 陽光

なんなんだよ、アイツ！

いきなり……………か、可愛いなんて言いやがって

まだ顔が熱いぜ

でも、もしかしたらアイツは”正義の味方”じゃないのかも……………

side out

悠翔「夕映、お前何やってんだ？」

夕映「あ！悠翔先生、助けて欲しいです！」

ネギ（偽）「チュー」

陽光とのお話から帰ってくると、そこには寝ているのどかと、ネギに押し倒されている夕映がいた

あー……そういや今日はラブラブキッス大作戦だったな

忘れてた……………

取りあえず

悠翔「何やってんだ貴様あ！！」

バキバキボキメキッ

ネギ（偽）に本気で蹴りを叩き込む

ちょっとヤバい音がしてスプラッタな感じだけど、問題ないよな

夕映「あゝあゝあゝ、何やってるですか悠翔先生！ネギ先生が死ん

でしもうです」

悠翔「大丈夫だよ、あれは偽者だ」

俺がそう言つと同時にネギ（偽）は煙になつて消える

夕映「本当に偽者だったですか……良かったです」

そう言つて安心した表情を浮かべる

そういえば……

悠翔「夕映はネギの事が好きなのか？」

わかつてるけどね

夕映「なななナニを言つてます！私はのどかが悲しむから！！それに私がホントに好きなのは……／／／」

あれ？なんか反応が……変？

ま、いいや

悠翔「そっかそっか、変な事言っつて悪かったな」

謝りながら夕映の頭を撫でる

夕映「うう……わ、わかればいいです／＼」

おーい、夕映さーん顔が赤いですよー

またやっちまった……orz

さてっと……カメラはどこだ？

……あつた

朝倉とカモにはお仕置きだな

悠翔「朝倉あ、カモオ、そこ動くなよ？」お話『しよう』

笑顔で、カメラに向かって言う

その日の夜、旅館では正座させられている者の他に、一匹のオコジ
ヨの悲鳴と、女の子の嬌声が聞こえたとか聞こえなかったとか……

…

陽光の理由（前書き）

な、なんだかノリで書いてたら、フェイトがどこのどの三流悪役みたいになってしまった

フェイトファンの方すいません

陽光の理由

今は修学旅行三日目の朝、朝食を食べた後、休憩所でネギ達と話している

明日菜「ちょっとどーすんのよネギ！こーんなにいつぱいカード作っちゃって、一体どうやって責任取るつもりなの！？」

ネギ「えうっ！？僕ですか！？」

カモ「まあまあ姐さん」

朝倉「そーだよアスナもーかったってことでいいじゃん」

悠翔「お前等は黙ってような。それともまた『お話』するか？」

カモ「ヒイイイ！わ、分かりました」

朝倉「……………はい／／／」

明日菜「（ねえ、悠翔さん朝倉とエロガモに一体何したのかしら？）

「

ネギ「(さ、さあ?)」

おーい、丸聴こえたぞー

言わないけど

悠翔「そっぴやネギ、のどかにカードの複製渡したんだな？」

ネギ「はい、一応景品なので……」

カモ「おー、そっだった。姐さんにもカードの複製渡しとくぜ」

明日菜「えー、そんなのいらないわよ。どーせ通信できるだけなん
でしょ」

カモ「ちがうって！兄貴がいなくても道具だけ出せるんだよ。ぜっ
てー役に立つって」

悠翔「そっぴだぞ明日菜。俺が一昨日の夜変身したのもアーティファ
クトの力だからな」

明日菜「えっ！？それって、あの何かよく分からないけど、滅茶苦茶速く動いてた赤い鎧の事？」

悠翔「そ、俺のはちよいと特殊だけだな。ホラ」

そう言つて、全員にパクティオーカードを見せる

悠翔「出すときは『アデアット』って唱えりゃでてくる」

明日菜「へへ、アデアット」

パアッ

明日菜「わっ…ホントに出た。すごい手品に使える！」

カモ「ち、ちゃんと使ってくれよお」

刹那「所で、悠翔さんは誰の従者なんですか？」

悠翔「ん？俺？エヴァだけど」

刹那「えっ！エヴァンジェリンさんってあのエヴァンジェリンさんですか！？」

悠翔「ああ、そうだけど……」

他にどのエヴァたんがいるんだ？

このかのアレは事故だしね

で、そんなやり取りがあつてから少し経ち、ネギが親書を渡しに行くと言つので着いていく事にした

で、今はというと……ゲーセンでプリクラ撮ってるんだが……

悠翔「あのさ、このか。ちょっとくっつきすぎじゃない？」

このか「えへ、えーやん、細かいこと気にせんで」

このかがすごいです

腕組んできたり、手を繋ごうとしてきたり、刹那の殺気が凄かった

り、ラジバンダリ………ちょっと古いか？

ネギ「なんのゲームをやってるんですか？」

ハルナ「あーゴメンね先生上手くいくと関西限定のレアカード、GETできるかもしれないんだよー」

夕映「魔法使いのゲームですよ」

ネギ「へー、魔法使いですかあ………やってみようかな僕………」

悠翔「よし俺もやるぞ」

くくっ、ちようどそのコンビニでレアカード当てまくってきたからな

夕映「悠翔先生出来るですか？」

悠翔「おいおいバカにすんなよ？」

ハルナ「凄い自信ね………相当な実りよk悠翔「ルールも知らん!!」」

……はい？」

だってカード買ったただけだもん

ハルナ「じゃ、じゃあ教えますから……」

てことで教えてもらうことになったんだが……

十分後

ハルナ「そうそう、うまいうまい」

悠翔「面白いなコレ」

このか「せやろー」

二十分後

悠翔「よっしゃあ！行けえ！バーストフレア！！！」

ハルナ「は、はは……強っ！！」

夕映「ホントに初心者ですか！？」

三十分後

悠翔「よし、暗黒の鎌を地獄の使者に装備！！究極神化、常闇の死神召喚！！！」

夕映「無茶苦茶です……」

ハルナ「究極神化って何！？そんなんあるなんて知らなかった……」

カオスでした

そんなこんなで楽しく遊んでると、ネギと明日菜がいつの間にかいなくなってた

うん、置いてかれた……………orz

くそっ！こうなったらシネマ村行ってやる

てなわけでシネマ村に向かってるんだが

このか「せ、せっちゃんどこ行くん？足速いよぉー」

刹那「あぁっ。す、すいません、このかお嬢様」

絶賛マラソン中です

悠翔「そっだな、ちよっと速すぎるな」

夕映「はあはあ……………後ろ向きで走ってる人に……………せえせえ……………言われたくない……………です」

そりゃあだつて……ねえ

なんか針っぽいの（名前わからない）が飛んでくるんだもん

刹那「お嬢様失礼！」

このか「ふえ？」

飛び上がる刹那と驚くこのか

てかまた置いてかれた……orz

俺一応裏の関係者なのに

もういい後つけてやる

んでシネマ村に入ったはいいんだが……

右見ても知らない人

左見ても知らない人

後ろ見ても、前見ても知らない人

上を見る

うん、空が……蒼いなあ

はい、迷いました

陽光「あっ！ここであつたが百年目。今日こそ潰す！！！」

んでまた件の猫耳美少女に絡まれてるわけです

まさかシネマ村でまで仕掛けて来るとは思わなかったぞ

悠翔「はあ、わかったよ。場所移すぞ」

そこでお話すればいいだろ

で、適当に広い場所に来た

もちろん人払いはしてある

悠翔「それで？昨日も聞いたけど、何で戦うんだ？」

陽光「オレに勝ったら教えてやるよ!!」

悠翔「そうかい。んじやとつとと終わらせるか……」

陽光「馬鹿にしゃがって!」

悠翔「いやいや、馬鹿になんかしてないぜ?ただ俺の方が強いってだけだ。界王拳!」

俺は体に赤い気を纏う

陽光「何だよそれ!?そんなん見たことねえぞ」

当たり前だ

というか見たことあったら俺が困るわ

陽光が瞬動を使い突っ込んでくるが、俺はそれを上回るスピードで陽光の後ろに回り込む。

陽光は予測していたのか、裏拳をはなってくるがそれをしゃがんで避けて、足払いをかける。

どつやらこれも読まれていたらしい

後ろに半歩下がって避けられる

うまい、戦い慣れてる

単純な経験なら俺の方が少ないだろう

ま、それを補って余りある力があるからな、俺には

悠翔「ハッ！」

俺は陽光の腹に向かって気弾を放つ

防御されたが、関係ない

その気弾は突然軌道を変え、陽光の懐にぶち当たる

もうお気付きだろう

そう、俺が使ったのは某浮気男ことヤ　チャが使う、操気弾だ

陽光「がつつ……なんだその技は!？」

腹を押さえてしゃがみこむ陽光

悠翔「なに、ただ気弾を操っただけさ」

陽光「はっ、そんなこと出来るの、お前だけだろうぜ」

悠翔「だろうな」

だって異世界人だもん

悠翔「それでお話聞かせてくれるんだよね？」

陽光「くっ……」

???「まったく……君はもう役に立たないね」

何処からか声が聞こえてきた

声のした方を見るとそこに居たのは、三番目ことフェイト・アーウ
エルンクスだった

悠翔「お前は……ん？」

フェイトの後ろになんかあるな……………石像か？

陽光「月光！！フェイト、貴様……………月光をどうするつもりだ！？」

そうか、あれが人質か

フェイト「ふふっ、言っただろう？君はもう用済みなんだよ、陽光。だから、こうするのさ」

そう言うと、フェイトは石像を木っ端微塵に砕いた

陽光「月光おおお！！！！」

悠翔「お前……………！！！！」

フェイト「アハハハハ。滑稽だね、陽光。君は忘れているんだよ。いや、正確には忘れさせた……………かな。君に家族なんていない。何故なら

僕が皆殺しにしたからね」

陽光の理由（後書き）

作者「どーも」

悠翔「うっす」

作者「さてこのコーナーも三回目な訳だが……」

悠翔「どした？」

作者「批判が……ね」

悠翔「ああ……（遠い目）」

作者「確かにセリフ多いし、台本書きはアレかもしれないけどさ……」

悠翔「けど？」

作者「文才が無いんだよ！セリフ中心にしなきゃ……名前書かなきゃキャラを捌ききれないんだよ！！うわああああん！！！」

悠翔「威張るなよ！つーかキモいから泣くな！……あー、もう力
すは置いといて、感謝コーナー行こうか。キラ様、感想有難うござ
いました。あの感想に作者は救われたそうです」

作者「ありがとうおおおお！！！！」

陽光の真実

陽光「皆……殺……し？」

美奈殺し……間違えた。皆殺し……か……

フェイト「そうさ、もう一度言おうか。君に家族なんていない」

陽光「じゃ、じゃあ……その石像は……」

フェイト「ああ、これかい？コレはただの石像だよ。いや実に滑稽だったよ、こんな石の塊の為に必死になる君の姿は」

コイツ……！

悠翔「ふざけるな！！お前は……お前は陽光を……！」

フェイト「そうさ、利用しただけだよ。魔法で記憶を改変してね」

陽光「じゃあ……じゃあオレは……何の為に」

フェイト「ハハハハ、何のため？君に存在理由なんていらぬ。君はただ僕の言うことを聞いていればよかつたんだ。なのに……」

悠翔「俺に負けそうになつた」

精神的にも、肉体的にも

フェイト「そう言うこと。まあ、精々家族のいない苦しみを味わうんだね。あ、憶えてないのか。ハハハハハハハ」

陽光「うう……うああああああ……！！！！」

大声で泣き始める陽光

くそつたれ……原作以上の悪党だな

悠翔「フェイト、貴様は許さない！！アデアット！！！！」

俺は王の財宝を起動させる

創造するのは『聖職者』の名を冠する白き戦士

悠翔「神は間違いを犯した。お前のような存在を生み出してしまったことだ」

『レ・ディ・ー』

悠翔「変身!!」

『フィ・ス・ト・オ・ン』

俺は仮面ライダーイクサに変身した

悠翔「その命、神に返しなさい」

フェイト「へえ、昨日の赤いのは違うみたいだね」

悠翔「うるさい!」

俺はイクサカリバーを使い、フェイトに斬りかかるが、軽く避けられてしまう

フエイト「ふふふ、そんなものかい？イレギュラー！」

悠翔「この野郎！！」

俺はカリバーホイッスルを取り出しベルトに差し込む

『イ・ク・サ・カ・リ・バ・ー・ラ・イ・ズ・ア・ツ・プ』

俺はイクサ・ジャツジメントを放つが、転移魔法で逃げられてしまった

くそ……次は必ず

つてこれじゃあまるで俺が悪役みたいじゃねえか

そんな事より陽光だ陽光

陽光「ああ、家族……いない……オレ……一人？……一人は……嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だイヤだイヤだイヤだイヤだイヤだイヤだ……イヤだ！！！！！！」

っ！マズいな、気が暴走してる

とにかく落ち着かせなきゃ

俺は陽光に走りより抱き締め頭を撫でる

悠翔「陽光、大丈夫だ。俺が居る、俺が家族になってやる。だから落ち着け。大丈夫、俺はここにいる」

陽光「う……あ……ああ……おま……え」

悠翔「大丈夫、大丈夫だから。俺はいなくなったりしない。ずっとお前の家族でいてやる。だから……な？」

陽光「あ……ああ……」

悠翔「好きなだけ泣きな。我慢なんかする必要はない。今なら誰も、俺も見えてないからさ……胸くらいなら貸すぜ？」

あゝ臭えな、自分で言っつて吐き気がしてきたぜ

陽光「うあ……あああ……うわあああああん！」

その後、数分間陽光は泣き続けた

その姿は戦士でも何でもない、ただの女の子だった

このまま抱き締める強さを強くしたら、折れてしまっんじゃないか

そう思わせるほどに、危うかった

だから誓う、家族として、この娘を……陽光を守ろうと

陽光「わ、悪かったな。いろいろ／＼／＼でも、ホントにいいのか？
オレなんかが……」

悠翔「いいんだよ。それより、これからよろしくな。陽光」

陽光「ああ、よろしく。兄貴!!」

兄貴？なんで？

陽光「だって兄貴いくつだよ？」

17だけど……

陽光「オレ16だもん」

さいで………というか

悠翔「何でナチュラルに人の心読んでの!?!」

人権侵害だ!!

陽光「だって顔に書いてあるぜ」

またかあああ!orz

どんだけ顔に出やすいんだよ

まあ、それは置いといて

悠翔「それでさ、俺と仮契約しないか?」

陽光「仮契約?」

悠翔「そ、仮契約。すればアーティファクトつっぴアイテムが使えるの。それ以外にもいろいろ」

陽光「へー、で？どうすりゃいいんだ？血の交換とかか？」

悠翔「なに、簡単だよ。キスすればいいんだ」

陽光「なあんだ、キスするだけか。簡単だな……………ん？キス……………
……………フニヤアアア／／／」

フ、フニヤアアアって、かわいいなあ……………もう

意外と初なんだな、陽光

ああ、Sの血が騒ぐ

悠翔「なんだ、陽光はしたことないのか？」

陽光「な、ななな……………／／／しし、したことなんかありません！悪い
ですか！？／／／」

ん？

悠翔「別に悪くないよ。そっか、初めてか……嫌ならやめとくか？」

陽光「え？べべ、別に嫌じゃないですけど／＼その……恥ずかしいんです／＼」

やっぱり敬語になってる

顔真っ赤だし、テンパると敬語になるのか？

悠翔「そっか、なら……いいか？」

陽光「は、はい／＼」

こ、これがギャップ萌えか……なんつー破壊力

とりあえず魔法陣書いてっと……出来た

悠翔「じゃあ陽光、この中に入れてくれ」

陽光「わかった／＼」

陽光が遠慮がちに魔法陣に入ってくる

回復したみたいだな

敬語の陽光、もう少し見てたかったけど

悠翔「じゃ、目瞑って」

陽光「あ、ああ／／／」

返事をして目を瞑る陽光

うわ、プルプル震えてる

可愛い、可愛すぎる

悠翔「行くぞ……ん」

陽光「む……／／／」

パアアアアア

仮契約!!

悠翔「……ん、よし。はいコレ」

陽光「……ふぁ／＼それが？」

悠翔「そ、パクティオーカード」

陽光「へえ。お！オレの絵が描いてある」

さてここで陽光のパクティオーカードについて説明しよう

うん、陽光の絵と名前、それから俺の名前以外、何も描かれていない

どういっしょっちゃん

悠翔「……」

陽光「……」

説明書読み中です。決してザジの真似ではありません

悠翔「……なるほどな、大体わかった」

どうやら陽光のパクティオカードは、アーティファクトをコピーするアーティファクトらしい

パクティオカード同士を触れ合わせれば、そのアーティファクトをコピーできるみたいだ

ん？て事は、俺のアーティファクト（このかゝる）コピーさせれば最強じゃね？

悠翔「よし！陽光、俺のアーティファクトをコピーしろ」

陽光「わかった」

陽光と俺のパクティオカードが重なり光輝く

陽光のパクティオカードに、俺のパクティオカードとまったく同じ絵が浮かび上がる

さて、今夜スクナと戦うんだから、夜までに俺の知識を教え込まなきゃな

その後、夜までひたすら俺のオタク知識を陽光に説明した

幸い、陽光は頭がいらしく、一度説明すればちゃんと憶えてくれた

バカレンジャーに見習わせたよ、ホント

そうそう、練習で俺も一緒にいろいろ創ってて気が付いたんだが、このアーティファクト生命を創りだす事は出来ないらしい

もちろん生命を生み出す武器もだ

つまり、ディエンドが使えない……………orz

泣いていい？

地獄兄弟参上!! (前書き)

ここからネタが多くなります

地獄兄弟参上!!

あれから、陽光にいろいろ説明して、現在ネギ達の所に向かってお
ります

そうそう、陽光に舞空術教えたら一発で使いやがりましたよ、ええ

コレが真の天才か……

さて、そろそろ着くな

悠翔「陽光、準備しとけよ」

陽光「おう！」

刹那「そこまでだ！お嬢様を放せ！！」

っと、見つけた

悠翔「ネギ、明日菜、刹那！」

ネギ「悠翔さん!？」

刹那「何故ここに……ん?貴様は!？」

明日菜「お、一昨日このかを拐おうとした人じゃない!何で悠翔さんと一緒に!？」

そんな三人で言葉繋げなくても

陽光「悪かったな、いろいろ。でももう平気だ、オレは兄貴の味方(家族)だから」

そう言っつて俺の腕に抱き着く陽光

正直、物凄く気まずい

千草「陽光はん!裏切りよつたんか!？」

陽光「何言っつてんだ!オレを騙してたのはお前等だろ!！」

千草「……何を言っつとるのか、よおわからんけど、まあええわ。それよりあんたらにもお嬢様の力の一端見せたるわ。本山でガタガタ

震えてれば良かったと後悔するで」

そう言つて千草は呪文を唱える

次の瞬間には地面から、まさに百鬼夜行とでも言わんばかりに大量の異形が現れる

その数、裕に500を越えている

……………あれ？

原作より大分数多くね？

あれか、俺と陽光がいるからか？

勘弁してくれよ、マジで

面倒くせえ

ネギ「風花旋風風障壁！！」

悠翔「障壁……………ネギか？」

ネギ「はい、ですが2、3分しか持ちません」

カモ「よし！手短かに作戦立てようぜ」

刹那「『二手にわかれる』これしかありません。……私が一人でここに残……パチンツ……っっ！なにするんですか、悠翔さん！！」

悠翔「なーにが一人で残るだ。そんなんほつとけるわけないだろ？デコピンですんだだけ有難いとおもえ」

明日菜「そうだよ、刹那さんっ！私も一緒に残る！！！」

ネギ「ええっ！ア……アスナさん！？」

悠翔「大丈夫だ、ネギ。いざとなりゃ俺がしっかり守ってやるよ」

明日菜のハリセンはある意味最強だけどな

カモ「よし！んじゃあ、ネギの兄貴は一撃離脱でこのか姉さんを奪取！！後の連中が鬼共を抑える。これっきゃねえっスよ」

悠翔「そうだな……」

刹那「……わかりました、それでいきましょう」

カモ「決まりだな!!よし、そうとなったらアレもやっとなっげ!」
刹那の姉さん、アンタ悠翔の兄貴の事好きかい?」

あれ?何で俺?ネギじゃないの?

刹那「なっ……!あ、えと……えええっ!?!?!」

いや、そこで赤くなれると非常に気まずい

というか陽光さん?

足踏むの止めてもらえます?

地味に痛いんですけど!?!?

陽光「けっ!」

何で怒ってるの?俺何かした?

てか、?多いな

明日菜「エロガモ、まさかアレって」

カモ「キッスだよキス。仮契約!!」

刹那「キス!?!」

カモ「緊急事態だ!!手札は多い方がいいだろうがよお。それとも兄貴とするかい?」

刹那「え、あ、えと……ゆ、悠翔さんで………お願いしますノノ」

グフツ

ザクとは違うんだよ!ザクとは!!

ああ、大分壊れてきたな

刹那が異常に可愛いからな………

カモ「よっしゃ!そうと決まれば、急げ!障壁が解けるぞ」

刹那「す……すいません、悠翔さん…… // /」

悠翔「いや、刹那がいいなら良いんだ」

刹那「は、はい // /」

ああもつ、何この可愛い生き物

テイクアウトOK？

悠翔「いくぞ？……んう」

刹那「うむ…… // /」

仮契約!!

悠翔「刹那、お前も明日菜も俺がしっかり守るからな」

刹那「はい! // /」

明日菜&陽光「そこ! 何見つめ合ってるのよ(だよ)」

カモ「風が止む！」

悠翔「陽光！準備いいか？」

陽光「もちろん！」

悠翔&陽光「アデアット」

その言葉と共に俺と陽光の手には不可視の剣が握られる

見せてやるぜ！某腹ペコ貧乳王の力！！

悠翔&陽光「真名解放『エクスカリバー約束された勝利の剣』！！」

ドガアアアッ！！

結果的に言えば、やり過ぎちゃった。てへっ

陽光「キモッ！」

悠翔「酷っ!!!」

まあでも、流石にエクスカリバー×2は止めたほうが良かったかな？

だってエクスカリバーの斜線上に何もなくなって、焦土と化してるもん

これ損害賠償の請求とかくんのかな？

まいいや、きたら全部ぬらりひょんにやらせりゃ

このかを助けるためにやったって言えば何も言えまい

とりあえず、今ので200近くは逝ったはずだ

悠翔「ネギ！行け!!!」

ネギ「はいっ!」

飛び立つネギ

周りには気持ち悪いぐらいにいる、鬼共

さて、暴れますか

アーティファクト創り変えてっつと

悠翔「陽光」

陽光「もう、終わってる」

悠翔「そうか、流石俺の妹だ」

陽光「そそ、そうか／＼／」

惚気とでも何とでもいいやがれ！

俺は逃げも隠れもしない！！

嘘です、すいません。だから、あたっ……い、石を投げないで。ち
よっ、包丁はシャレにならな……アッ……

鬼「ぬっふっふっ……こいつはこいつは、勇ましい坊っちゃん、嬢
ちゃんやな」

そう言うてにじりよる鬼

悠翔「お前……今、俺を笑ったな？」

さて、地獄兄弟……いや、地獄兄妹の出番だな

俺と陽光は腰に付けたベルトのバックルを開く

すると何処からともなく、真ん中で色が緑と茶色に別れているバツタが二匹現れる

明日菜「何？今度はバツタ！？」

刹那「もう、訳がわかりません」

いいんだよ、わかんなくて！

悠翔&陽光「「変身……」」

『『ヘンシン』』

『チエンジ パンチホッパー』

『チエンジ キックホッパー』

俺はキックホッパーに、陽光はパンチホッパーに変身する

悠翔「行くぜ、相棒……」

陽光「ああ……兄貴となら、何処までも……!!」

カツコイイな、地獄兄妹

悠翔「行くぞ、刹那、明日菜」

明日菜&刹那「はい!!」

刹那と明日菜に声をかけ、俺と陽光は鬼共に突撃する

そこからは、ひたすら無双

名付けて、ライダー無双

語呂悪いな……

え？明日菜のハリセンでもないのに何で無双出来るんだって？

だってちよつと考えてみるよ

ライダーはみんな何トンってパンチ・キック力持ってたぜ？

そりゃ、いくら鬼でも一撃で帰るわ

痛いもんなあ……

んでまあ、途中で別格の奴らも出てきたんだけど、仮面ライダーには勝てないね、やっぱし

因みに俺は地上戦なら仮面ライダーが最強だと思ってます

だってカブトのハイパークロックアップとか使われてみ？

確実に死ねるぜ

つと、そんな事より早く終わらせないとスクナが復活しちゃう

さつき、楓がネギの所に向かったみたいだし、そろそろ真名と古菲が来るだろうしな

悠翔「陽光！決めるぞ！！」

陽光「オツケー兄貴」

悠翔&陽光「ライダージャンプ！」

『ライダージャンプ』

電子音声が鳴り響くと、俺と陽光は跳び上がる

悠翔「ライダーキック！」

『ライダーキック』

陽光「ライダーパンチ」

『ライダーパンチ』

そして二人で同時に必殺技を放つ

技はしっかり鬼に命中し吹き飛びながら他の鬼共を巻き添えにしていく

いや……まあ、これでいいんだろっけどさ

やっぱライダーの必殺技つついたら怪人の派手な爆発が付き物じゃん？

だけどコイツ等、ボヒュツとかいう気の抜ける音しかしないんだぞ
気持ち悪いと思わない？

そのまま暴れまわっていると、真名と古菲がやって来た

真名「この助っ人の仕事料はツケにしてあげるよ、刹那」

古菲「うひゃー あのデカいの本物アルかー？強そアルねー。お！
あのバツタっぽいのも戦ってみたいアルなー」

へ？バツタ？

いやいや、俺と陽光じゃん！

味方だよ、味方！！

そのころ学園長室では、妖怪と吸血鬼による壮絶な戦いが繰り広げられていた

エヴァ「何いい！？やっぱりダメとは何だじじイ！！学園から出れると言っただるおが！？」

妖怪「ううゝむ、修学旅行も学業の一環じゃし、短時間なら呪いの精霊をだまくらかせると思っただんじゃがのゝ。ナギの奴め、力まかせに術をかけおつてからに…………正直無理かも」

エヴァ「何とかしろじじイ！！！殺るぞ！？」

茶々丸「マスター、そんなに熱心になって。よほどネギ先生と悠翔さんが心配なのですね…………」

エヴァ「誰・が・あのガキと変態の心配してるってゝゝ。ま、まあ、あの変態が何かしでかさないか、気が気でないのは確かだがな…………」

何気にデレるエヴァであった

因みにエヴァの予想は的中し、修学旅行終了後、学園長に2000万ほどの損害賠償請求が来たそうなの

憐れぬらりひよん……

顔が二つたあ生意気な！！（前書き）

修正しました

顔が二つたあ生意気な！！

さて、んじゃあここはアイツ等に任せるとしますか

さつきから古菲が血走った目でこっち見てるし

バトルジャンキーめ

悠翔「陽光、俺達は一足先にネギの所に行くぞ」

陽光「ああ、でもアイツ等放っておいていいのか？」

大丈夫大丈夫。原作位までは数減らしたから

こちららネギの転移がないから、自力でスクナン所まで行かにゃならんのだよ

ネギのもとにたどり着いたときには、丁度明日菜”だけ”が召喚されてた

ああ……忘れてた。刹那は俺が喚ばなきゃいけないんじゃん

悠翔「ネギ、大分ヤバそうだな。今すぐ刹那喚ぶからな」

ネギ「く……はい」

悠翔「召喚！悠翔の従者！！桜咲刹那！」

刹那「っ！悠翔さん！！アレは……！！？」

悠翔「ん？あーアレはリョウメンスクナノカミつつー鬼神さ」

やー、それにしてもスクナでかいな、流石鬼神だぜ

ってフェイト詠唱してるうううう！！！！？？

フェイト「石の息吹！！」

うおおおお！！

あつぶねえええええ！って、あ……

陽光「あ、兄貴……足が……」

悠翔「大丈夫だ。かすっただけだ」

やっちまった。

ネギが浴びてない所を見ると、俺が盾代わりになったみたいだな

刹那「……皆さんは今すぐ逃げてください。お嬢様は私が……ゴンッ……くうっ!？」

刹那に拳骨を叩き込む

ったく……

悠翔「お前はまたそうやって、何でもかんでも一人で背負い込みやがって。さっき言っただろ？俺が守るって。少しは頼れよ、俺等をさ」

刹那「悠翔さん……ありがとございませう、おかげで決心がつきました。この姿を見られたら、もう……お別れしなくてはなりません。でも……今なら、あなた達になら……」

そう言って翼を出す刹那

ふつーに綺麗じゃん

グダグダ言っつて明日菜に思いっきり叩かれて、活入れられてるし

あれは痛そう……

明日菜「なーに言っつてんのよ刹那さん。こんな背中に生えてくんなんてカツコイイじゃん」

刹那「え……」

悠翔「そうだぞ、刹那。大体お前はこのかの幼なじみなんだろう？
だったらこのかを信じてやれよ。お前の知ってるこのかは、翼が生えるくらいで人を嫌う奴か？このかならきつと天使みたいとか言うはずだぞ」

刹那「あ……明日菜さん、悠翔さん……」

悠翔「行け刹那！！そしてこのかを取り戻してこい」

刹那「……ハ、ハイ！」

飛び立つ刹那

しっかしどうすっかな、この足

刹那 side

私はこの翼のせいで人からも、妖怪からも疎まれていた

だけど、明日菜さん、悠翔さん、お二人の言葉で私は救われました

もし、このちゃんに受け入れて貰えなくても、悔いはありません！！

刹那「天ヶ崎千草、お嬢様を返してもらっぞ」

私は飛ぶ

お二人の言葉に、ネギ先生の努力に、龍宮達の気持ちに応えるために。

このちゃんを救うために

猿鬼、熊鬼を出してきたが、関係ない！！

二匹の鬼を切り裂き、お嬢様を救い出した

刹那「お嬢様、お嬢様、御無事ですか？」

お嬢様の口をふさいでいる呪符をはがす

このか「う……ん？ああ……せつちゃん。へへ……やっぱりまた助けに来てくれたー」

お嬢様……私のことをそこまで……

つと、感傷に浸っている場合じゃないですね

刹那「お嬢様、どこか痛い所は？」

このか「あ……あー／＼／＼なんやあの人の言うとおり、気持ちええだけやったわ。あちゃー、ウチはずかしー／＼／＼」

刹那「／＼／」

このちゃん……

このか「あ、や〜ん見んといてせつちゃん〜」

刹那「お…………お嬢様…………」

このか「……………？せ…………せつちゃん、その背中のは…………」

うぐっ……………！

刹那「えっ…………あっ……………」
「…………これはっ…………」

どうしよう……………受け入れて貰えなかったら

一瞬、そんな考えが頭をよぎった

けど、お嬢様は微笑んだ。そして次に聞こえてきたお嬢様の言葉で、
私は……………

このか「キレイなハネ……………なんや天使みたいやな〜」

悠翔さんの言つとおりでした

刹那 side out

さてさて、刹那がこのかを助け出したみたいだな

で、こっちはというと

ネギ「エヴァンジェリンさん!!」

エヴァ「これで借りは無しだな、ぼーや」

エヴァたん降臨!!

茶々丸の結界弾も命中し、スクナの身動きを封じる

そつだ、ちょっと試してみるか……

なんかエヴァたんが講釈垂れてるけど……まいつか

悠翔「エヴァ!ちよい待ち」

エヴァ「何だ！？悠翔、これからいいところなのに！」

悠翔「あれは俺に殺らせてくれないか？後で何か埋め合わせするからさ」

エヴァ「……ちっ、いいだろう。その代わり貸し一っだからな？それとなるべく派手に決めろ、お前は私の従者なんだからな」

悠翔「了解。さあ、殺るぞ陽光」

陽光「おう！」

創造するのは、運命と戦い勝利した男が乗っていた、天を突く二重螺旋の力

悠翔&陽光「アデアット」

現れたのは、皆さんご存知グレンラガン

因みに俺がラガン、陽光がグレンだ

明日菜「ななな……ナニよアレ〜!？」

ネギ「大きい……」

エヴァ「フフフ……ハハハハハハ!考えたな悠翔、デカイ物にはデカイ物か」

何か下で言ってるが、知らん

さて、何合体にするか……アレだな

だからわざわざラガンのコックピットに乗ったんだし

っと、やるまえに外に声が聞こえるようにしとかなきゃな

悠翔「陽光!アレをやるぞ!」

陽光「アレ?フツ……それも一興!」

あ、ノリいいな陽光

まあ、知識を詰め込んだのは俺だけど

悠翔「人と獣の二つの道が、捻って交わる螺旋道!!」

陽光「昨日の敵で運命さだめを砕く!明日の道をこの手で造る!!」

悠翔&陽光「宿命合体!グレンラガン!!オレを誰だと思っていやがるううう!!!!」

二人で叫ぶと同時に螺旋力ならぬ気を放出する

ま、螺旋力も結局のところ、気合いで落ち着いてるんだから問題ないだろ

悠翔「さあ、行くぞ!!」

鬼神対ガンメンの戦いが始まった

茶々丸の結界弾を破ったスクナは、四本ある内の二本の手でグレンラガンを掴もうとするが、一本は下から腕を振り上げることで弾き、もう一本は手首から出したドリルで粉々にする

スクナ「グオオオオ!?!」

うるせー!痛いのはわかるけどもう少し静かに叫べや

目の前で聞いてんだよ、こっちは一！

悠翔「っ！？あゝ忘れてた……」

俺、足に石の息吹浴びてんだっただ……

もう腰辺りまできてる

死亡フラグビンビンだな

駄菓子菓子！たとえ死にそうでもネタに走るのには止めない

それが神代クオリティー！！

悠翔「いいか……陽光……忘れんな。お前を信じろ」

陽光「兄貴？何言ってるんだよ」

悠翔「俺が信じるお前でもない、お前が信じる俺でもない……お前が信じる、お前を信じる！！」

陽光「兄貴……？」

しっかり乗っかってくるな、陽光

てかネタに走ったのはいいけど、今のでさらに死亡フラグが強化されてね？

ああ……マジで死んじゃうかも……

とにかく!!

悠翔「必殺!!」

胸部のグラサンカッターをスクナ向かってぶん投げる

悠翔「ギイガ!ドオリルウウ!ブレイクウウ!!」

スクナにギガドリルブレイクを食らわせる

スクナの腹に向こう側が見える、巨大な穴が空いた

やべ……もう……意識が……

悠翔「ア……ベア……ット」

ゼロ(前書き)

短いです

ゼロ

悠翔「知らない天井だ……」

とりあえずネタに走った俺は悪くない。というか言わなきゃならんだろ、コレは

……とりあえず起きるか

アレ？石化が治ってる？てことは、このかと仮契約したのか……うん詳しい事は後で聞けばいいか

外で騒いでる連中うるさくて、寝れねーし

ネギ「だから刹那さん、自分でこのかさんをこれからもずっと守ってくださいよーっ」

刹那「そんな無茶な。あなたそれでも先生ですか」

元気だなーアイツ等

エヴァ「若いっていいよなー……」

悠翔「急に老け込むな、エヴァ」

エヴァ「たんに後ろから抱き着く」

あ……いい匂い

エヴァ「うお！？／＼起きてたのか、悠翔！！／＼」

茶々丸「おはようございます、悠翔さん」

悠翔「ん、おはよう」

エヴァ「いつまで抱き着いてるつもりだ！！／＼」

とか言って抵抗しないのな

悠翔「いつまでも？」

エヴァ「私に聞くな／＼／まったく貴様は……何故そんなところまで奴に似て……ゴニョゴニョ」

何か最後の方、聞き取れなかったけど……まいつか

それより俺等も旅館に帰らなきゃな

悠翔「行くうぜ、エヴァ」

エヴァ「うむ……／＼／」

それから、なんだかんだあって、やって来ました『紅き翼』の別荘

そうそう、陽光の処分だけど、俺の使い魔になるって条件で不問になった。まあ、脅迫されてたようなもんだしね

ネギ「……この写真は？」

詠春「サウザンドマスターの戦友達……黒い服が私です」

おお！これが紅き翼の面々か。うん、しっかり七人写って……
七人？

あるえ〜？この写真に写ってるのって、タカミチ抜いた六人だよな？

よし、右から順に確かめよう

えっと……ガトウ、詠春、ゼクト、ラカン、ナギ、アル、某反逆王子ゼロ……ん？ゼロ？

悠翔「なんでだああああ！！！！？」

エヴァ「うおっ！どうした、とうとう頭がおかしくなったか？」

え？流石にそれは酷くね？って、んなこと今はいいんだよ。いやよくないけど。それより何で紅き翼にゼロがいるの？

悠翔「あの……詠春さん？この人はいつたい……」

詠春「ああ……ゼロの事ですか？彼は紅き翼の中でも、謎が多くてね。彼の素顔を知ってるのはヘラスの第三皇女だけなんですよ」

ヘラス第三皇女「と、あのじゃじゃ馬姫か……」

エヴァ「フンツ、何が謎だ。私を置いていったくせに……」

おろ？エヴァさんは、ゼロの事何か知ってるみたいだな

悠翔「何か知ってるのか？」

エヴァ「まあ、お前になら話してもいいだろう。アレは……」

その後は延々とゼロについて聞かされた、主に愚痴を

しかし聞けば聞くほど俺に似てるな、主にネタに走るところとか。
もしかして転生者か何かか？

だったら原作介入とか言つて、麻帆良にいるはずだしな………うん、
謎だ

んで、話を聞く限りでは、四十年前くらい前に会って、それから二
十年くらい一緒にいたらしい

じゃあもう今オッサンじゃねーか

エヴァ「悠翔、お前は奴に似ている。妙に馴れ馴れしいことかな
……」

なるほど、エヴァさんの俺に対するデレ具合はそれが原因か………

悠翔「話してくれてありがとな」

エヴァ「別に大した事じゃない」

朝倉「おい、悠翔先生、エヴァちゃん、記念写真撮るからこつち来て」

記念写真を撮り、修学旅行は終了した

ちなみに、陽光はエヴァたんの家に住む事になった

余談だが、学園に帰ったら、妖怪が涙目でこつちを見てた

知らない、俺は何も知らないぞ

ドラゴン？ああ、ちょっと大きいトカゲだろ？

夕映&のどか「は？」

ネギ「……………」

悠翔「はは……………」

ドラゴン「グアアアアアアッ！！！！」

今俺の目の前にはドラゴンがいる

うん、やっぱり実物はデカイな

さて、ここで現実逃避という名の回想に入ろうと思う

あれは今日の早朝のことだった……………」

ネギが図書館島に出掛ける日なのを思い出し、朝から寮の前で張ってたんだ

え？弟子入りテスト？原作通りでしたけど何か？

夕映「おはようございます！ネギ先生」

ネギ「わわ、夕映さん、のどかさん！？」

あー、そういやこの二人が付いてくるんだっけ

しょうがない、行くか……

悠翔「ネギ、朝から元気だな」

ネギ「ゆ、悠翔さんまで」

夕映「悠翔先生、おはようございます」

のどか「あ……お、おはようございます」

悠翔「ん、おはよう。ところでネギ、図書館島行くんだろ？俺も連れてけ、ついでにこの二人もな」

ネギ「えっ！で、でも……」

のどか「……………」

夕映「ジーーーーー……………」

悠翔「ニヤニヤ……………」

カモ「こりゃダメだ、嬢ちゃん達の熱意勝ちだぜ、兄貴。というか、そもそも悠翔の兄貴がいる時点で兄貴の負けだ」

コイツの中では、俺は明日菜以上に怖い存在らしい

ネギ「うっっ……………仕方ないです」

悠翔「よし、そうと決まればさっさと行こうぜ」

ネギ「わかりました、乗ってください」

のどか「え……………」

夕映「乗る？」

ネギ「のどかさんは前に一回乗ったことありましたよね」

のどか「あ……はいー」

悠翔「ちよつと待てネギ。お前二人共乗せて行く気か？」

ネギ「え……あ、はい。そのつもりですけど……ダメですか？」

悠翔「いや、ダメじゃないけどさ……そうだ！綾瀬、こっちこい」

夕映「なんですか？」

悠翔「綾瀬、お前は俺と飛んでいくぞ」

夕映「え……？」

注・ここから二人は小声で喋っています

悠翔「だから……あの二人を、二人つきりで空中散歩させるんだよ」

夕映「なるほど……中々いいアイデアです（しかし悠翔先生と二人つきりですか……）」

悠翔「だろ？つて訳で行くぞ！」

夕映「いや、ですが……いきなり言われても心の準備というものが……／／／」

んなもん知らん

夕映をお姫様抱っこする

夕映「あ、ちよっ……！こっ、この体制は……／／／」

悠翔「何か問題あるか？」

夕映「いや、決してそういう訳では……ただその……好きな人に抱えられると……ボソボソ／／／」

なんだ？最後の方聞き取れないぞ？

まいいや

悠翔「ア〜イ・キャン・フラ〜イ！」

そう叫び飛び上がる

夕映「何ですか、今のかけ声は!？」

いいッッコミだ、夕映

夕映「そう言えば、悠翔先生も魔法使いなんですか？」

飛んでる途中、夕映が話しかけてきた

見りゃわかんだろ、空飛んでんだし

悠翔「ああ、一応な」

夕映「一応、とは？」

悠翔「俺、ほとんど魔法使わないからな」

アーティファクトで遊んでばっかで

夕映「そうですか……ありがとうございます」

悠翔「別にいいさ、それくらい」

因みにネギ達は、俺達から十メートル位後ろを飛んでいる

で、その後図書館島に入ったのはいいけど、次々トラップに引っかかってた。ネギ達はね

え？俺達？力業で全て破壊しましたけど？なんか夕映が後ろで呆れてたが知らん

ほんで、冒頭に戻るわけだ

よし、回想（現実逃避）終了

いや、忘れてたぜ。ドラゴンが出てくるの

悠翔「しょうがない、三人は逃げろ！コイツは俺がなんとかする。
茶々丸！いるんだろ」

茶々丸「ばれてましたか……」

悠翔「夕映を連れてけ。ネギ、お前はのどかを」

あ、つい名前で呼んじゃった……まいつか

ネギ「はい！行きましょう、のどかさん」

のどか「はは、はい！」

悠翔「茶々丸、夕映を頼むぞ」

夕映を茶々丸に渡す

茶々丸「はい」

夕映「悠翔先生、流石にアレと戦うのは、いくら魔法使いといえど無理があるのでは」

悠翔「大丈夫だ、俺は無敵だからな」

夕映「そうですか……わかりました。それと…… / / /」

悠翔「ん？」

夕映「これからも、名前で呼んで下さい……です / / /」

悠翔「え？ああ、わかった」

茶々丸「では、行きます」

悠翔「おう！」

さーて、久々に暴れますか

前回は死にかけたしな

んゝそうだな……このまま戦ってもいいけど、面白くないしな、やっぱドラゴンにはドラゴンかな？そうと決まれば久しぶりにアレいきますか

俺はパクティオカード（エヴァたんver）を取り出す

悠翔「アデアット」

久しぶりに出ました、チェンジトライブC D今更ながらに、名前が中二臭い

うん、セリア呼ぶの久しぶりだな。最近は陽光と組み手ばっかして
たからな、今度紹介しなきゃ

『スタンバイ』

悠翔「さあ来い、セリア」

『サモン ハーピイ』

電子音声が鳴り響くと、俺の前に体育座りをしていじけたセリアが
……………何で？

セリア「酷いです、悠翔様。全然喚んでくれないですし、私のこと
なんか忘れてたんですよね……………グスグス」

悠翔「いや、そういう訳じゃ……………」

セリア「何が違うんですか？読者の皆さんだって、私のことなんか忘れてますよ！どうせ私は作者が何も考えず勢いで生まれたモブキヤラですよ……シクシク」

ちよっ！そういうメタな発言止めれ

悠翔「悪かった、今度からちよくちよく喚ぶから」

セリア「約束ですよ？／＼／＼」

悠翔「あ、ああ……」

涙目＋上目遣いは反則だろう。いくら魔獣でも美少女は美少女。一瞬飛び付きそうになった俺は悪くない。うん、悪くない

つと、それはさておき。セリアの機嫌も治ったことだし、いっちょやりますか

は無敵だからな」

夕映「そうですね……わかりました。それと……／＼／＼」

悠翔「ん？」

夕映「これからも、名前で呼んで下さい……です／＼」

悠翔「え？ああ、わかった」

茶々丸「では、行きます」

悠翔「おう！」

さーて、久々に暴れますか

今回は死にかけだったしな

ん〜そうだな……このまま戦ってもいいけど、面白くないしな、やっぱドラゴンにはドラゴンかな？そうと決まれば久しぶりにアレいきますか

俺はパクティオーカード（エヴァたんver）を取り出す

悠翔「アデアット」

久しぶりに出ました、チェンジドライバーCD今更ながらに、名前が中二臭い

うん、セリア呼ぶの久しぶりだな。最近は陽光と組み手ばっかして
たからな、今度紹介しなきゃ

『スタンバイ』

悠翔「さあ来い、セリア」

『サモン ハーピィ』

電子音声が鳴り響くと、俺の前に体育座りをしていじけたセリアが
……………何で？

セリア「酷いです、悠翔様。全然喚んでくれないですし、私のこと
なんか忘れてたんですよ……………グスグス」

悠翔「いや、そういう訳じゃ……………」

セリア「何が違うんですか？読者の皆さんだって、私のことなんか
忘れてますよ！どうせ私は作者が何も考えず勢いで生まれたモブキ
ヤラですよ……………シクシク」

ちよっ！そういうメタな発言止めれ

悠翔「悪かった、今度からちよくちよく喚ぶから」

セリア「約束ですよ？／＼／＼」

悠翔「あ、ああ……」

涙目＋上目遣いは反則だろう。いくら魔獣でも美少女は美少女。一瞬飛び付きそうになった俺は悪くない。うん、悪くない

つと、それはさておき。セリアの機嫌も治ったことだし、いつちよやりますか

『スタンバイ』

悠翔「変身！」

『チェンジ ドラゴンフォーム』

悠翔「さあ、いくぜ？セリア」

セリア「はい！『千の雷』！！」

イヤイヤイヤ、いきなり殲滅魔法ですか！？しかも無詠唱！！

え？やっぱり俺の出番なし？ドラゴン煙上げて気絶してるし

セリアが出てくると毎回こうなんだけど……………チートオリ主よりチートな召喚獣って……………泣いていい？

セリア「ちょっと”殺りすぎちゃいました。てへっ”

ちよつとじゃねーよ！あきらかにオーバーキルだろ！？殺るの字が違っし！…てか、てへっ…って、可愛いなコノヤロウ

悠翔「はあ……………もういいや。セリア、帰るぞ」

なんかもう、どうでも良くなってきた。いろいろと諦めた

セリア「はい」

その後、アーティファクトをしまい、地上に出る

ネギ達はまだいなかった。また置いてかれたorz

泣くおっ・マンデー

クウガvsアギト

今日はネギ達と共に修行をしている。と言っても、陽光と組み手してるだけけど

それとさっきから、古菲がずっとこっち見てるんだけど、どうしよう……

古菲の対処法を考えていると、空が光りネギが気絶した

因みに刹那とこのかには、ネギと仮契約してもらった

あまり原作と違えるのは良くないしね

悠翔「ん、ネギ気絶したみたいだし、ちょっと休憩するか？」

陽光「そうだな」

組み手を中断し、エヴァたんの元へ向かう

お、カモがなんか言ってる

確か気絶して当然的なことを言っただよな

エヴァ「黙れ、この下等生物が。並の術者程度で満足できるか……

煮て喰うぞ?」

悠翔「エヴァ、怖いよ。折角可愛いのに台無しだぞ?」

エヴァを抱き上げ、胡座をかいてその上に乗せ、後ろから抱き締める

エヴァ「な、何をする! / / ええい、放せ / / /」

可愛いな / エヴァたん

周りの視線が冷たいけど気にしない

このか「あゝ、エヴァちゃんばつかずるいわゝ、ウチも膝乗せて!」

そう言つて、このかがエヴァたんを退かそうとする

エヴァ「何をする、近衛木乃香。コイツは私の従者だ、私には優先的に使用する権利がある」

俺は物ですか? いや確かに従者だけどさ

きつと自分の物を取られたくないっていう、独占欲なんだろうな

このか「従者って、あの……パクテオーとかいうやつやる？」

エヴァ「む……まあそうだが」

このか「せやったら、ウチにも権利あるよ。だってウチ悠翔さんとパクテオーしとるもん、もちろんウチが主や」

エヴァ「う……！痛い所を……」

確かにな。事故とはいえ、このかが主なのは確かだな。そのおかげで『王の財宝』だって手に入ったんだし

刹那&明日菜「えええっ!?!」

あゝ、そういやこの二人は知らないんだったな。陽光には、俺のアーティファクトコピーさせる時に説明したけど

刹那「どういふ事ですか悠翔さん!!」

半狂乱しながら俺の肩をグワングワン揺らす刹那

やべ、気持ち悪くなってきた

後少して吐くというところでこのかが助けてくれた。ああ……このかの背中に羽が……

このか「もー。ダメやって、せつちゃん。それにウチがお願いしたんよ？パクテオーカードが欲しくて」

刹那「そ、そうですか………すみません悠翔さん、少し………取り乱してしまいましたノノノ」

少し？アレが！？相当の間違いだろ！！！？？

明日菜「てことは、悠翔さんパクテオーカード二枚持つてるってことよね？」

悠翔「ああ、この二枚だ」

俺はパクテオーカードを取り出し見せる

ついでに能力も説明する

まあ、エヴァたんverの方は、見る方が早いだろうということだ、

エヴァさんに認識阻害結界を張ってもらい、見せることにした。皆にセリアを紹介するいい機会だしね

『スタンバイ』

悠翔「さあ来い、セリア」

『サモン ハーピィ』

光と共にセリアが現れる

明日菜「あなた……!!」

刹那「っ!……お前は!!」

明日菜&刹那「え?刹那(明日菜)さん、知ってるの(んですけど)?」

二人して頭に疑問符を浮かべている

まあ、とりあえず自己紹介だな

悠翔「セリア」

セリア「何でしょうか？悠翔様」

悠翔「コイツ等、俺の生徒と家族。自己紹介して」

セリア「はい。私、悠翔様にお仕えています、セリアと申します。
以後お見知りおきを」

そう言っつて華麗に一礼する

このか「わっつ、羽がモフモフや〜。気持ちええな〜」

なんかいきなりこのかがセリアに、正確にはセリアの羽に抱き着いてる

セリア「ひゃわっ！／＼いきなりにするんですか、このかさん
／＼」

このか「あれ？なんでウチの名前知っとるん？」

セリア「ゆ、悠翔…んっ／＼／＼…様から、聞いて…ひんっ／＼
／…いました…あう／／／……ので」

このか「へー、そやったんか」

このかが動く度に小さく悲鳴のような物を上げるセリア

羽が弱いのか？……今度やる

いやーしかし、美少女同士が絡み合つと絵になるな

うっん、眼福眼福

うっ！？なんか後ろから凄い殺気が……

陽光「兄貴、お話……しよつか？」

なぜそこで魔王ネタ！？

悠翔「あのー陽光さん？一応聞くけど、俺何か悪い事した？」

陽光「うるさい、この女つたらしがー！アデアット！…！」

確かにフラグは立ててるよ？でも、まだ女ったらしって言われるほど、立ててるつもりはないけどな

えっと、エヴァたん、茶々丸、ザジ（この辺は微妙だけど）、このか、刹那、夕映、一応陽光とセリア……………あれ？意外と多いな。アハハ……………死亡フラグかー？

って陽光さん？何故オルタリング！？目覚めちゃうんですかその魂！？

陽光「変身！！」

変身ポーズをとって、陽光は仮面ライダーアギトに変身する

「「「変わった！？」「」」

その場にいた全員が、驚きの声を上げる

マジですか……………しょうがない、やるっきゃないか

悠翔「そつだ！ついでだからもう一つのアーティファクトの力、もう一回見せてやるよ。セリア、これ持つとけ」

セリアにCDを投げ渡す

悠翔「アデアット!!」

俺は腰にアークルを出現させる

悠翔「変身!!」

ポーズをとり、仮面ライダークウガに変身する

明日菜「こないだの赤いのと違う!!」

刹那「ええ、この間の巨大ロボとも違いますね」

悠翔「そりゃ、このアーティファクトの力は『想像創造』だからな」

陽光の攻撃を捌きながら言う

カモ「そりゃ使いようによっては最強じゃねーッスか」

悠翔「まあ、武器だけだな」

エヴァたん、茶々丸、夕映、カモ以外はわかってないようで、頭に疑問符を浮かべている

明日菜「ねえ、エロガモ。そのそつぞーそつぞーって何よ？」

カモ「姐さん、『想像創造』ってのは、その名の通り『想像』で物を『創造』することッスよ」

明日菜「え〜っと……え？どついう事？刹那さんわかった？」

刹那「え、ええ……一応は……」

明日菜「え〜……じゃあ教えてよ、ね？」

刹那「はあ……」

なんかあつちで説明会始めたぞ、エヴァたん茶々丸は参加しないで、こつち見てるけど

陽光「この〜、馬鹿にして！」

陽光はオルタリングの左のボタンを押し、ストームフォームへと変身し、ストームハルバートを取り出す

悠翔「あーもー！超変身！」

俺はドラゴンフォームへと超変身する

明日菜「二人共変わってる！？」

どうやら説明会は終わったようだ

悠翔「ネギ！杖借りるぞ」

ネギ「は、はい」

ネギに杖を借り、ドラゴンロッドへと変化させる

ネギ「ああ！僕の杖が……！！！」

エヴァ「ククッ、本当に何でもありだな」

茶々丸「楽しそうですね、マスター」

勢いで変えちゃったけど、戻るよね？この杖

そのまま、ドラゴンロッドとストームハルバートで戦い始める

横薙ぎを受け止め、ドラゴンロッドを回転させ受け流し、突きを放つが上に弾かれる。そのまま回転させ逆側の柄を振り上げる、と同時に陽光は飛び上がり、後退する

陽光「ちっ………だったらー!!」

そう言っただけは右側のスイッチを押し、フレイムフォームへと変身、オルタリングからフレイムセイバーを取り出す

何かもうグダグダだ………

悠翔「はあ………超変身」

タイタンフォームへと超変身する。それと同時にドラゴンのロッドが杖に戻る

良かった、戻った

悠翔「ネギ、これ返すぞ。刹那悪い、夕風貸してくれ」

刹那「え、あ……はあ、どうぞ」

悠翔「サンキュー」

夕風をタイタンソードに変化させる

刹那「夕風が……!?!」

大丈夫、ちゃんと元に戻るから

悠翔「さあ、二回戦といこうか」

陽光「おう!」

ん、なんか最初と目的変わってない？純粋に勝負を楽しんでる自分に気付いた。俺ってバトルジャンキーだったのか……orz

いや、気にしたら負けだ

陽光「ハアッ！」

悠翔「よっ！」

陽光が振り下ろしてきたフレイムセイバーを軽く受け流す

フフフ……武器、特に剣で俺に挑むとは愚かな

前にも言ったと思うが、俺は糞爺からあらゆる物での戦い方を、教え込まれてきた

特に、刀剣類、銃類等の扱いは徹底的に教え込まれた

それこそ山に刀だけ持たされて放置され、サバイバルさせられた事もあつたくらいだ

結果、五歳の時点で野生の熊とガチで殺り合える位にはなっていた。普通の人からすれば、俺も大概チートだよな、ウン

まあ、そんな俺がちょっと剣術かじっただけの素人に負けるはずもなく

悠翔「ほいっと」

陽光「ニヤアッ!？」

あっさり陽光からフレイムセイバーを奪い、タイタンソードに変化させる

クウガつてある意味最強だよな。敵の武器、自分の武器にできちゃうし、フォームも仮面ライダー最多の12種類あるしな

ま、そんなどうでもいい知識は置いといて

悠翔「陽光、俺の勝ちだ」

陽光「くそ、やっぱりまだ勝てないか……」

因みに陽光が俺と組み手して勝った事は一度もない。まあ、チートオリ主ですから

で二人共変身を解除して、なんかゴチャゴチャやってるみんなの元に向かう

エヴァ「わ、私のことは師匠と呼べ」

ネギ「は、はい師匠！あのところまで、ドラゴンを倒せるようになったには、どれ位修業すればいいですか？」

エヴァ「何？……もう一回言ってみる」

ネギ「ですからドラゴンを……」

エヴァ「ほつほつドラゴンか……」

ネギ「はい……」

エヴァ「アホかーッ」

悠翔「ストップだ、エヴァ」

ネギを殴ろうとしていたエヴァたんを、羽交い締めにして止める

エヴァ「何を……」

悠翔「いや、ただドラゴンならいるぞ？セリアが倒したし」

エヴァ「貴様まで……私をバカにしてるの」「ええええええ！？」
「……うるさいぞ！私の台詞を遮りおつて」

驚きの声を上げるネギ達

悠翔「別にからかってないって、ホントに図書館島の地下にドラゴンがいるんだって」

そういや、あのドラゴンってアルの家の番犬代わりだったんだよね？

倒して来ちゃったけど……平気だよね？根拠ないけど

その後は、パイソン事件（勝手に命名）があつて、エヴァたん宅に行き魔法使いにするか、魔法剣士にするか考えている

それにしてもメガネエヴァたんも中々……

悠翔「そういや俺って魔法使いと魔法剣士、どっちなんだろうな？」

エヴァ「フンッ、貴様の場合もう魔法戦士だろう？」

悠翔「魔法戦士ねえ……」

セリア「悠翔様は何でも出来ますから」

いや、何でもって訳じゃないけど

エヴァ「まあ、精々考えるんだなほーや。木乃香、お前にはもう少し詳しい話がある、下に来い」

エヴァ「あなたがこのかを連れて下に行く」

悠翔「じゃあ、俺も今夜は仕事だから」

刹那「あ、はい」

ネギ「頑張ってください」

悠翔「ああ」

刹那「悠翔さん！一つ確認してもいいですか？」

悠翔「ん？何だ？」

刹那「あの時……大停電の夜、私達を助けてくれたのは……………」

悠翔「ああ、俺とセリアだ」

刹那「そうですか……………ありがとうございました」

悠翔「うんにゃ、気にすんなって。さて陽光、行くぞ」

陽光「ああ」

陽光と共にエヴァたん宅から飛び立つ

余談だが、巡回中エヴァたん宅の方から明日菜の悲鳴が聞こえた

タカミチ……………タイミング悪いよ

南の島はパラダイス

ふおおおお！！！いや、いいねーいいねー。やっぱり水着は最高だぜ！え？何、もうこれ映ってるの？ゴホンッ……えー、失礼しました

今日はあやかかの招待で南の島に来ている

で、何で俺が壊れてたかって言うと

大体わかってるだろうけど………みんなの水着姿が眩しいんです。ハイレグビキニからスク水まで、よりどりみどり

やー、眼福眼福。地球に生まれて良かったー！！

特に千鶴のメロン！アレは反則でしょう。ホントに中学生か？いくらロリコン気味とはいえ、アレには反応しちゃっぞ

ナニがと言わないが

あ、ネギ気絶した

まあ、みんな思い思いに過ごしてる

俺？もちろん水着観賞ですけど？

朝倉「悠翔先生、オイル塗ってよ」

何！？いいのか！！？？

悠翔「おう！」

まあ、断る理由も無いしね。決して邪な気持ちがある訳じゃない

ホントダヨ？

それからしばらくして

朝倉「ハア……ハア……／＼悠翔……先生……んっ……それ以上は……／＼／」

俺の横で朝倉が息を荒くして、倒れている。ま、俺のゴットハンドにかかればこんなモンよ

ナニしてんだって？

認識障害に防音防視の結界を張るくらいの事、とだけ言っておくぜ。
南の島サイコー！！！！

なんかネギがサメに襲われてたけど、知らん。今は朝倉に悪戯する方が優先だ

o u t s i d e

これはネギがサメに襲われた後、悠翔が朝倉を弄り倒しているころ

ハルナ「確かにねー、最近の男子は情けないってゆーか、カッコ悪
いってゆーか、元気ないところはあるよ」

祐奈「まーねー」

ハルナ「やっぱり男は戦ってないとね 目標に向けてさ」

アキラ「目標…夢か…」

祐奈「てことは付き合っなら年上ってことかじゃー」

亜子「でも先輩とか兄貴も将来何になりたいか、わからんとかよー
言ーてたけど」

祐奈「でも、その点は悠翔さんなら大丈夫でしょ。カッコイイし優しいし、何より年が近い」

亜子「……まあな、カッコイイとは思っけど、一応先生やし」

ハルナ「なに言ってるの。教師と生徒の禁断の愛なんて、いいネタじゃない」

亜子「ネタにされても困るんやけど……」

まき絵「ハハ……確かにね」

アキラ「私は……いいかも／＼」

祐奈「アキラ!？」

ハルナ「嘘!？これはネタにしがいがあるわね!」

ちよつとずつ悠翔に対する気持ちを暴露した、話が行われていた

side out

夕映「悠翔先生と仮契約というヤツをさせて頂けませんか？」

オーケー、落ち着け。まず何故こうなったか整理しようか……箇条書きでね

・朝倉を弄り倒してたら、いつの間にか夕方になってた

・ネギと一緒に休んでたら、夕映とのどかが魔法使いになりたいと相談してきた

・夕映が仮契約を求めてきた 今ココ

……別にいつか

悠翔「仮契約ね……別に俺は良いけど」

夕映「俺は」ということは、私の方に何か不都合でも？」

悠翔「いや……不都合っていうか……」

朝倉「やつほー、何の話してんだい？」

カモ「おっ、朝倉の姉さん。実はよ、夕映の姉貴が悠翔の兄貴と仮契約したいつつてよ……」

朝倉「へ、へー。いい良いんじゃない？やつちやいなよ」

なんで朝倉の奴、動揺してんだ？

朝倉「そーそー、仮契約するともれなく一人に一つ面白アイテムがついてくんだよね。私も何か欲しかったんだよなー。ね？悠翔先生」

何故そこで俺に振る？よし、ここはスルーだ

朝倉「（いいのかい？ゆえっち。仮契約の儀式って悠翔先生とキスするんだよん？）」

夕映「（えゝ！？キ、キス！？）」

なんか夕映が朝倉とコソコソした話した後、キヤーキヤー喚いてた

ありや仮契約の中身知ったな。別にいいけど……今更キスの一つや
二つ

それに相手は美少女だ、断る理由が何処にある？いや、ない！っ
わけで寝る

意味わかんねーって？大丈夫、俺もわかってないから

目覚めた時には、もう帰りの飛行機の中でした

ネギの過去、ゼロ再び

最近ネギが別荘で修業を始めた

俺？見学だよ？

しかし3対1は虐めだろう

俺は勝てるけど

おー、雷の斧が決まったな

しっかり得意でもない雷系魔法をバンバンと……流石エヴァたん

エヴァ「悠翔、後はお前がやれ。私は少し疲れた」

悠翔「了解」

ネギ「よ、よろしくお願いします……！」

うん、元気があっただけですわー

悠翔「さ、始めるぞ」

ネギ「はい」

俺がネギに教えてるのは、空手、柔術、ムエタイだ

そう、某史上最強の弟子をリアルに造ろうとしてるんだ。その為なら心を鬼にして

悠翔「オラオラ、キリキリ走れ！」

ネギ「は、はいいい！..！」

ネギにタイヤを引きずらせ、その上のにりネギを鞭で叩き、別荘の広場を十周ほど走らせる

もちろん魔力による強化はなしだ

走り終わったら、次は背負い地蔵で背負い投げの練習をさせる
因みにこの背負い地蔵、毎日少しずつ重くしていたりする

最初の頃は全長120センチ、重量は30キロだったんだが、今では大きさをこそ変わらないものの、重量は70程まで上がっている

某哲学する柔術家さんの修業だ

その後はひたすら巻き藁を正拳突きさせる

拳から血が出ようが関係なしに続けさせる。治癒魔法使えば即効治るしね。いざとなりやこのかに頼めばいいし

んで、その後も色々やって今日の修業は終わった

あゝ眠い……

悠翔「悪いエヴァ、俺寝る」

エヴァ「む……そうか」

悠翔「ああ、おやすみ」

エヴァ「ん」

茶々丸「おやすみなさいませ」

別荘を出て部屋に向かう

扉を開けると、そこには男の夢と希望が詰まった双丘、もとい二つ

のメロンが……………陽光つて着痩せするタイプなんだなー

目測でDかEくらいだ

陽光「なな、何まじまじと見てるんですか！！／＼／」

悠翔「ガフツ！！??」

鳩尾にいいパンチをもらい、そのまま気絶する

て、照れ隠しにしてはキツすぎないっすか？

その日、俺は廊下で寝かせられた

次の日、別荘に明日菜達がやってきた

エヴァたんがネギの血を吸ってるので、みんなから見えない所で俺も休憩中だ

因みに陽光は別荘には来ていない

四葉の所で、料理の修業中だ

向こうでは、魔法を使える使えないで騒いでる

平和だなー

そうだ！

悠翔『エヴァ、ネギに、俺に教えられた技を使って戦えって言ってる俺を呼んでくれ。手を叩くだけでいいから』

エヴァ『いきなり念話してくるな！しかし何をするつもりだ？』

悠翔『それは見てからのお楽しみ、頼むぞ』

さて、変身といきますか

CDを取り出し、チェンジカードを突っ込む

『スタンバイ』

悠翔「変身」

『チェンジ グリズリー』

俺は全長3メートル近くの大熊に変身する

手と足には爪を覆うように銀色に輝く装甲が付いている

今回は仮面ライダーじゃなくて、こないだチェンジカードに封印したグリズリーだ

魔獣の方が迫力あるしね

エヴァ「ぼーや、今日の課題だ。悠翔から教えられた技を使ってコイツと戦え」

そう言って手をパンパンと二回叩く

さて、行きますか

暗がりからゆっくりと出ていく。なるべく怖そうに、恐そうに、だ

悠翔「グルルルル」

ちよつと唸ってみた

夕映「ひい！何ですかアレは！？」

明日菜「あんなん居るなんて、聞いてないわよー！！」

刹那「お嬢様、下がって下さい！」

エヴァ「安心しろ。ソイツはぼーやしか狙わんよ」

ふふっ、みんな怖がってら。エヴァたんも平静を装ってるけど、頬がひきつってるよ

エヴァ「おい悠翔！何なんだコイツは！？」

悠翔「俺だけど？」

エヴァ「はあ！？」

悠翔「だから俺だって。アーティファクトで変身したの」

エヴァ「なるほど………だが、それならそうと最初に言え！！」

悠翔「えー、だってさ………」

エヴァ『だってなんだ？』

悠翔『そっちの方が面し』エヴァ『死ねい！！』『うわっ！！？』

いきなり攻撃はなしでしょ

明日菜『急にどうしたのよ』

エヴァ『む……いや、なんでもない』

誤魔化すエヴァたん

む？なんか腹の辺りに違和感が。下を向くとそこには

このか『わぁ、もふもふやー！気持ちええー』

刹那『お、お嬢様！危険です』

このか『そんなことあらへんって。せつちゃんもやってみたらええんよ』

刹那「わあっ！お、お嬢様！？」

このか「どや？」

刹那「た、確かに気持ちいいです……」

このか「せやるー」

俺に抱き着いて、腹に顔を擦り付ける超どや顔のこのかと、このかに引つ張られ、仕方なくくつついたものの意外と気持ち良かったのか、頬擦りをしている刹那がいた

というかこのか、そこ俺の腹。なんでお前がどや顔なんだよ

エヴァ「おい！いつまで遊んでるつもりだ、さっさと行け。ぼーやも、精々死なないようにな」

ネギ「は、はい！」

いや殺さねーよ!？

戦い終わったら変身解こうと思ってたけど、解きにくくなったじゃねーか

このか「頑張つてなー、ネギ君！悠翔さん！」

全員「え？」

バレてる

普段はポケポケなのにここ一番では超鋭い

このか……恐ろしい娘

ネギ「ほ、ホントに悠翔さんなんですか？」

今更隠す必要もないか……

悠翔「おう、俺だ」

ネギ「その姿は……？」

悠翔「アーティファクトだよ」

ネギ「……なるほど」

俺のアーティファクトは反則気味だから、大体この一言で片付け
まう

楽でいいけどね

まあ、バレたなら正体隠す必要もないし、変身解くか

悠翔「さ、殺ろうか」

ネギ「はい……」

俺の一言で、お互いの顔から表情が消える

俺がネギに一番最初に教えたのは、脳と体を日常生活から戦いに一瞬で切り替えることだ

某史上最強の弟子はスロースターターで苦しんでたからな

互いに距離をとり、制空圏を発動する

ネギには、かなり早い段階で制空圏を覚えさせた

まあ、基礎体力はある程度あったし、魔力による補助もある。 10

歳だからか体は柔らかかったので、そこら辺はかつ飛ばせた

刹那「なんですかアレ!？」

古菲「お！見えるアルか、刹那。アレは制空圏とって、武術の究極の一つアル。あんなの教えた覚えないアルが」

エヴァ「当然だ。アレは悠翔が教えた技だからな」

古菲「何っ!？悠翔先生は人に制空圏を教える程の使い手だたアルか？」

エヴァ「らしいな」

古菲「むむ……戦ってみたいアル」

俺とネギは互いにジリジリと間合いをつめていく

互いの制空圏が重なりあう

先に動いたのはネギだった

ネギの突きをいなし、そのまま反撃する。が、その反撃を避けられ、

再び突きを放ってくる

超至近距離で全力の突きを出す

制空圏が無ければ出来ない戦いだ

悠翔「ネギ、やはりお前はスジがいい。特別だ、必殺技を教えてやる」

ネギ「必殺技？」

悠翔「そうだ。中国拳法、空手、ムエタイ、柔術、すべての体の動きの要訣の上に成り立つ技だ。その中には、腰、足、目の運び、気の運用、ネギの場合は魔力だな、それらすべてを掛け合わせた技だ」

明日菜「えっと……悠翔さん、何言ってるの？」

古菲「簡単に言えばネギ坊主に教えた四つの武術の動き全てを合わせた技、ということアル」

明日菜「なるほど……」

古菲「ま、そんな無茶苦茶な技、簡単には出来ないアルよ、”普通

は”」

エヴァ「だが、ヤツは普通ではない」

古菲「そうアル。だから見せて貰いたいアル、その無茶苦茶な必殺技を」

なーんか向こうでゴチャゴチャ言ってんなー

古菲の目が怖いです

悠翔「いいかネギ、よく見とけ。カツコ悪いが威力は確かだ。……小さく前習え」

俺は近くの柱に向かって小さく前習えをする

ネギ「……………え？」

古菲「は……………？」

エヴァ「ク、クククツ……………」

刹那「……………」

イヤ！そんなに見詰めないで！感じちゃ（ry

キモいですね、サーセン

ネギ「あの……………それは？」

悠翔「いいから黙って見てろ」

イヤアアアア！！恥ずかしい、恥ずか死ぬ

しょうがないじゃん、こごいう技なんだから

悠翔「フツ……………無拍子！！！！」

バゴオツ！

俺の一撃を喰らった柱は、拳の当たった位置が粉々になり、崩れ落ちる

ネギ「す、凄いです悠翔さん!!」

悠翔「だろ？」

さて、これをネギに覚えさせなきゃな

古菲「アイヤー、何アルかあの技」

刹那「多少気は籠めていたようですが、それでも凄い威力ですね」

エヴァ「悠翔！貴様私の別荘を壊しおって！バカか？バカなんだよな!？」

このか「なんやよーわからんけど、すごいわー」

朝倉「こ、こりゃ悠翔先生のプロフィール書き換えなきゃ……………」

夕映「の、のどか……………さっきの熊といい、今の技といい、もしかしたら私達、とんでもない世界に踏み込んでしまったのかもしれないです……………のどか？」

のどか「キョ」……」

夕映「き、気絶してるですー!!」

その後、ネギに無拍子を教えていたが、いつの間にか夜になったので、今日の修業はここまでとした

そして夜、明日菜がネギの意識シンクロ魔法で、ネギの過去を見ている

俺はというと、のどかのアーティファクトで覗いている

しかしエヴァたんの言う通り、この日記絵下手だな

この辺は原作通りに進み、そして運命の日が訪れる……

川で釣りをしていたネギが村に戻ると、そこは一面火の海で、召喚された原作より遥かに多い悪魔達が暴れまわっていた

ネギが悪魔に襲われ、現れるナギ

ナギが雷の斧でその悪魔を倒すが直ぐに困まれてしまう

次々と悪魔を倒していくが如何せん数が多すぎた

逃げ出したネギを庇い、スタンとネカネが石化魔法を浴びる

スタンが悪魔を封印したが、直ぐに新手の悪魔が現れる

ネカネを庇うように立つネギに、刃が振るわれた

そのとき、ネギとネカネを庇うようにゼロが降り立つ

色んな所で出てくるなゼロ

ゼロはまるで嵐のように暴れまわる

上級古代語魔法を無詠唱で乱発し、悪魔達を次々と消し去っていく

五分もすると、辺り一面焼け野原で悪魔は一匹も残っていないかった

ナギがネギに杖を渡すと同時に、ゼロその場を後にしたにしてもコイツ等泣きすぎだろ

エヴァたんまで泣いてるし

でも、ゼロかぁ……………一体誰なんだ？

ま、今考えてもしょうがない

今夜だったなヘルマン出てくるの……………

ボクっ娘悪魔登場！？

夜、ヘルマンに皆が拐われた

で、俺は陽光と共に見学に来ていた……………はずだった

なんで過去形かって？だつてさ……………

？「おにいちゃん……………とる……………ぼく……………ゆるさない！！」

現在進行形で悪魔な幼女に襲われてたりする

陽光がね

俺？悪魔幼女に抱き着かれてますが何か？

？「ぼく……………クウ……………よろしく」

はいはいクウちゃんね

またオリキャラですか、そうですか

まあいいか、ヘルマンの相手はネギと小太郎がしてるから、陽光と二人でこの娘片付けねば

この娘も仲間にしちゃおうか

美少女だし、ロリだし、無口だし、舌つたらずな感じだし、ボクっ娘だし、ヤンデレだし、妹系だし、何コレもう要素詰め込み過ぎでしょ

それっばい要素詰め込めば萌えると思ったたら大間違いだぞ

いや萌えたけどさ、お持ち帰りしたいけどさ

で、何でこの娘が俺になついているかって言うと、昔自分を助けてくれた人と同じ匂いがするかららしい

陽光「なあ兄貴……ソイツ、殺^{バラ}していいか？」

不敵な笑みを浮かべて聞いてくる

何この娘怖い

背後にライオンが見える

クウ「おにいちゃんぼくのものおにいちゃんぼくのものおにいちゃんぼくのものおにいちゃんぼくのものおにいちゃんぼくのものおにいちゃんぼくのものおにいちゃんぼくのものおにいちゃん……すき………」

ブツブツ言いながら構える

この娘も怖い！ガクガクブルブル

てか何気に告白された

陽光「ギヒヤヒヤヒヤヒヤア！アデアツトオ！！」

クウ「……………きっひひひひひ」

ヒイヒイヒイ！！??

壊れた！陽光が壊れたあ！！

奇声を上げながら戦い始める二人

もうイヤ！この二人怖すぎ

女の子同士の戦いは怖いって聴いてたけど、ここまでとは思わなかった

因みに陽光が使っているのはライトセイバーだ

当たったイスとか柵とか溶けて無くなってる

何ソレ怖い

っーかさっきから怖いしか言ってるねーな、俺

それにね、なんかね、もうね、俺やることないの（泣）

ネギの方手伝ってやろうかなー、なんて思ってネギの方見たらもう
終わってた

てことで皆で陽光とクウちゃんの戦いを観賞中だ

陽光も強いけど、クウちゃんも強いな

当然かwww悪魔だもんなwww

ところで、アレは何時になったら終わるんだろうか？

結局、戦いは朝まで続き、陽光とクウちゃんの間で友情っぽいものが芽生えてた

で、召喚されたとはいえ、この場に在る以上封印できるだろ？って
ことでサモンカードに封印させてもらった

こうして新たに家族が増えた

えっと、エヴァさんと茶々丸（同棲的な意味で）
陽光とセリアとク
ウちゃん

………皆さん気付きましたか？

純粋な人間がいNEEEEEEEEE!!!!!!

麻帆良祭準備開始！！（前書き）

やっと麻帆良祭編に突入です

麻帆良祭準備開始！！

皆さんおはようございます。今日も元気な悠翔です
え？そんなことどうでもいい？さいですか

閑話休題

で、もう学祭の準備期間に入ってたりする

ああ、騒がしい

変なコスプレした連中がいるし

教室に着くと、学祭でやるメイドカフェの準備をしていた

俺は廊下にいるけどな

でもコレって風俗だよな？コスプレ風俗

刹那の猫耳スク水に燃えた、もとい萌え尽きた

千雨がメイド姿に着替えてる。丁度いい、アイツには言いたいことがあるからな

悠翔「よう、何やってんだ？」

千雨「なっ……！テメーいつの間に!？」

悠翔「今さっきだ。それから教師に向かってテメーは良くないんじゃないか？ちうたん」

千雨「っ!？な、なな……なんでその名前を！まさか……」

悠翔「ああ、毎日見てるぞ？ちうのホームページ」

千雨「いいいいつからだ！いつから見てた!？」

悠翔「この学園に来たその日からだ。まあそれはいいとして、本題に入ろうか………で？誰がチビでデブでキモ男で脂ぎってて包インな変態教師だった？」

今の俺の顔はまさしく鬼の様だろう

千雨が微かに震えてる

千雨「そ、それは………」

悠翔「『お話』しようか？……………」

確か空き教室があったはず

千雨「イヤアアアア！！ゴメンなさああい！！！！」

なんかこの世界に来てから、O H A N A S I する機会が多い

その後千雨にはたつぷりとO H A N A S H I した結果、朝倉
ほど従順にならないまでも、それなりに素直になった

具体的に言えば

千雨「な、なあ……………何かしてほしいコスプレないか？／／／」

こんな感じ

もちろんコスプレしてもらったけどね

基本的な猫耳や犬耳から始まり、果てはゴスロリやスク水まで

写真？もちろん撮ったよ

まあ、ルーランルージュのコスプレは学祭まで待つとくよ

で、千雨のコスプレショーを見ている間、3 Aの連中は新田先生に怒られ正座させられていた

バカだなあ

次の日、メイドカフェは禁止されたため、代わりに何をやるか決めている

しかしカオスだ

なんだよ『女だらけの泥んこレスリング大会喫茶』って？

レスリングしてたら客に商品運べないじゃねーか！縦しんば運べたとしても泥だらけだろう？嫌だわそんなの！！そもそも何処で殺る（誤字ではない）つもりだよ！？

それから『ネコミミラゾクバー』について。絶対意味わかってねーだろ？

まあ……ノーパン喫茶には、こっ………なんだ？誘われるものがある。ウン、コレは男として当然の反応だと思う

俺だけか？違うよね？違うね？違うはず、違（ry

閑話休題ってことで

で夜、コンビニに来ている

確かここにさよが居たはず……………居た居た

悠翔「よっ！さよ」

さよ「ふえ？あつ、悠翔先生こんばんはっ！！」

悠翔「あい、こんばんは。ところで、こんな所で何してんだ？」

さよ「あの……………実は私とっても怖がりです。夜の学校は何か出そうで怖すぎなので……………」

ごめん知ってた

じゃあ、なんで聞いたんだって？

仕様だ！なんとなくだ！！

悠翔「そうか……………じゃあしばらくお話ししよっか」

さよ「え……あ、はい！」

その笑顔が見たかった！

翌々日

え？昨日？ずっとクウとセリアと陽光を、撫でたり愛でたり弄ったりしてた

うん、とっても癒された

特にクウ

あの可愛さは反則だ

何が可愛いって、とにかく可愛い！アレは国宝級だね。いや世界遺産だ……！

小動物チックなことか……もう、とにかく全部可愛い

そうそう、クウにちゃん付けしないよう言われたのでやめました

朝、麻帆良新聞にさよが載ってた

アレは怖い、あの写り方は怖すぎる

完全に悪霊だよ、アレじゃ……………

確か今日の夜だったよな。さよが除霊されそうになるの

で夜、俺はさよの頭を撫でてたりする

うん、何故か普通に触れた

これも主人公スキルだろうな

チートオリ主万歳！

さよ「うっ……………うっ……………私、写真写り悪いから……………ふえ〜んっ。
悠翔先生、どうしたらいいんですかぁ？」

か、可愛い！

涙目（完全に泣いてる）+上目遣い（俺のが背が高いから自然とそ

うなる）ですがってくるさよ

つい抱き締めた俺を誰が責められようか

抱き締めた瞬間、さよの顔が真っ赤になって爆発したけどな

まあ、それはさておき

悠翔「とりあえず、自分の気持ちを伝えておいで？それでもダメだったら、助けてあげるから」

さよ「……………はい！逝ってきます」

ちよっ！？字が違うよ、字が！！

逝かれたら困るんだよ、話的に！

で結局、さよが暴走

刹那と真名に追いかけてる

てかアイツ等普通に刀とか銃とか振り回してるけどいいのか？

まあ、比較的狭い島国であるはずの日本に、こんなデカイ学園都市を造ってる時点で常識からはずれてるけどな

誰も不思議に思わないのは、学園結界のお陰なんだろうけどね

っとまた話が逸れ……………そこまで逸れてないか？

まいいや

さよ助けに行きますか

真名「よく私達からここまで逃げた、ほめてやろう……………だがこれで
終りだ。成仏しな」

悠翔「ストップだ。二人とも武器をしまえ」

真名の銃を掴む

真名「む……………何をするんだい？悠翔先生。私は依頼を受けているん
だが……………」

刹那「悠翔さん……………わかりました」

うむ、刹那は素直でよろしい

悠翔「まあ、仕事なのは分かるけどさ……ここは退いてくれないか？
じゃないと……」

俺は真名の銃をバラバラに分解してエセCQCを発動する

見よう見まねだけど、意外とイケるな

ありがとう、蛇の人！

悠翔「こうなるよ？」

真名「っ！？………そういうのはやる前に言ってほしいね」

刹那「今……何が！？」

悠翔「悪いな、不器用なもんでね」

真名「どこが不器用なんだか………わかった、今回は退くとしよう。
それと………」

悠翔「なんだ？」

真名「そろそろ退いてくれないかな？さっきから刹那の視線が痛い。
それに…………この距離は色々とマズい／＼」

そういえば真名を押さえ込んだままだったな

状況的には真名の手や足を絡めとったまま顔が至近距離にある

ん？若干顔赤くねーですか？真名さん

てかCCCってこんな技じゃなかったよな？

まあ所詮はエセってことか……………後、宇宙意思（作者の都合）

むむっ？また変な電波受信しちゃったぜ

悠翔「悪い悪い。ホラ」

真名「すまないね」

俺は真名に手を差し出す

うん、俺って紳士

まあ、CQC喰らわせてる時点で紳士かどうかあやしいけどな

さよ「悠……翔先……生………うわ〜ん！怖かったです〜!!」

さよが抱き着いてきた

悠翔「おーよしよし、もう大丈夫だからな」

頭をナデナデっつと

役得役得

さよ「ううっ……ぐすっ……」

その後ネギや朝倉が来て、さよと友達になった

俺に抱き着いたままだけどな

真名「なあ刹那、私達完全に悪役なんだが……」

刹那「知らん！真名とはもう喋らない！！」

真名「現在進行形で喋ってると思うんだが……」

刹那「っ！うるさいっ！！！！」

真名「何をそんなに怒ってるんだか……ハア」

確実にCQCについてでしょうよ、真名さん

次の日、俺は朝から超包子に来ていたりする

まあ、陽光の様子見だ

陽光「よお、兄貴」

悠翔「頑張ってるみたいだな」

陽光「ああ、料理も中々楽しい」

うむ、いい笑顔だ

む？アレは……………

悠翔「よっ！茶々丸、ネギ達もおはようさん」

茶々丸「あ…………おはようございます」

ネギ「おはようございます、悠翔さん、茶々丸さん、陽光さん」

このか「おはよー。ウチらいつものヤツでー」

陽光「はいよ、ちょっと待ってる」

悠翔「そういえば茶々丸、髪上げたんだな？似合ってるぞ」

頭をナデナデ

最近撫で癖が付いてきてるな

茶々丸「え……あ……き、恐縮です」

可愛いな、茶々丸

欲しいな、茶々丸

痛っ！！

ちよっ！陽光、料理持ったまま足踏むなよ

陽光「不穏な気配がした」

さ、さいですか……

何？この間からそうだけど、陽光ってエスパーかなんかか？

で、茶々丸の髪についてひと悶着あり、オシャレのくだりに

悠翔「俺はカワイイと思うけどな、茶々丸」

茶々丸「え……そそうですか。そそ、それはどうもありがとうございます。で、では仕事に戻らせて頂きます……あ」

茶々丸が転けた！

悠翔「よっ、ほっ、はっ」

桶をキャッチ！うーん、MVPモノだな

頭まで使ったしね

悠翔「ホレ、茶々丸。大丈夫か？」

茶々丸「はははい、大丈夫で………ああ」

再びキャッチ！！

茶々丸「すす、すいません、悠翔さん」

悠翔「大丈夫大丈夫」

まあ、そんな事があり、茶々丸が点検整備をすることに

放課後

俺は今、大学の工学部にあるハカセの研究室に来ている

しっかし、スゲーなハカセ

さすがマッドサイエンティスト

そこら中訳の分からない機械だらけだぜ

でも、そのエンジンのシャツはどうかと思っぞ？

そつだ！今度、俺用の茶々丸（妹）造ってるもらおう

うん？何かバチバチいってないか？アレ

ドオオオオオン！！！！

悠翔「ギアアアアアア！！！！？？」

爆発しやがったああああ！！！！！！

「……………ゆ……………きて……………さい」

うむう……………誰だあ、俺の眠りを妨げるのはあゝ

刹那「悠翔さん、起きてください」

悠翔「んー？刹那か……………どうした？」

刹那「いえ……………先程の爆発で気絶していたようなので……………」

悠翔「そうか。ありがとな？」

刹那の頭を撫でる

サラサラだな、刹那の髪

でも、刹那みたいな美少女に起こしてもらえるなんて最高だな」

刹那「びしょっ……！？／／／」

このか「悠翔さん、ウチは？ウチは？」

ん？このかも可愛いぞ？将来美人になりそうだ」

このか「えへへ、そうかな／／／」

アレ？何で二人とも顔赤いの？

悠翔「もしかして声に出た？」

明日菜「思いつきりね」

おっつ。やっちまったぜ

んで、コーヒー店の前で茶々丸ファッションショー

いやー、可愛いなー茶々丸」

このか「悠翔さん、また声に出とるえ？」

おっとっと、気をつけねば

おっ！どうやらハカセが茶々丸の記憶ドライブを見るらしい

あ……茶々丸が暴走した

はあ……止めにいくか

悠翔「アデアット」

ま、周りに不思議がられないで動くなら、機械を使うのが一番だろう

って訳で今回はファイズだ

アクセルフォームなら茶々丸（暴走）にも追い付けるだろう

仮面ライダーの中じゃ一番現実味があるだろうし

って、知らない内にギャラリーがいっぱい

まあ、突然変なベルトと携帯取り出せば、ここのマッド達は食いつくだろうな

ま、知らねえや

魔法の秘匿？ナニソレおいしいの？

555、エンターっと

『スタンディング バイ』

ポーズをとって

悠翔「変身！！」

『コンプリート』

俺はファイズに変身した。で、アクセルメモリーをファイズフォン
にっつと

『コンプリート』

ハカセ「おお！何ですかソレは！？どうなって……いやでも……
だけど……ブツブツ」

マッドがブツブツ言い始めた

悠翔「茶々丸止めに行ってくるわ。待ってるよ？十秒間だけな」

ネギ「ええ！？ちよっせ」

『スタートアップ』

電子音声と共にカウントが始まる

さて、行きますか

そして俺は、その場から消えた

お、茶々丸居た

うん、ゆる〜っくり動いてる

俺は茶々丸の右胸を押して、お姫様抱っこをする

え？戻るんですよ？

『3 2 1』

ただいまっ

『タイムアウト リフォーメーション』

ネギ「あん、一人では……っで、ええ!!??」

悠翔「ただいま」

刹那「はは……もういろいろと諦めました」

刹那の目のハイライトが消えた

明日菜「刹那さんすっかりしてっ!」

このか「せつちゃん!!」

PS・茶々丸は、抱っこしてるのが俺だとわかると、オーバーヒートしました

模擬戦？なんで今さら（前書き）

ツッコミはなしの方向でお願いします

模擬戦？なんで今さら

アレから数日、特に変わったこともなく、平和に過ごしていた。強いて言うならネギの予定が三分の一位俺にまわってきたことぐらいだ
まあ、それはいいとして、何故か今俺は世界樹前広場にてタカミチと対峙していたりする

どうやら麻帆良の魔法先生や魔法生徒が集まるらしく、それに呼ばれた訳だ

もちろんネギ達もいる。原作ではエヴァたん達は来てないけど、何故か居る

エヴァたん曰く、麻帆良祭の警備は毎年しているらしい。理由を聞いたらはぐらかされたけどね

タカミチ「さて、時間もないし、やるうか」

悠翔「了解」

しかし、どいつもこいつもエヴァたんをジロジロ見て……………そんなに悪が気に入らないかねえ

エヴァ「悠翔、お前は私の従者なんだ。タカミチごときに負けるな

よ？」

オイイイイ！いきなりハードル上げすぎたる！？

つて、ん？なんか周りがザワザワしてない？なんか GANGRO とかが、
脱げ女とかが妖怪に文句言ってる

てか、時間ないんじゃないのかよ？

GANGRO「神代先生、悪いことは言わない。今すぐ闇の福音の従者
なんて止めるんだ。君は知らないかもしれないが、ソイツは何百人
もの人間を殺した極悪人だ」

悠翔「エヴァ……………今の話……………本当か？」

一応、事実確認ね？念のため

エヴァ「ああ…本当だ……………」

おいおい、そんな捨てられたチワワみたいな目で見るなよ

可愛いじゃねーか

俺はエヴァさんの頭を撫でながら言う

悠翔「大丈夫だよ、俺はどんな時だってエヴァの味方だ。安心しろ」

エヴァ「悠翔……………フ、フンツ……………当然だ！なんせ貴様は私の従者なのだからな！！」

そんな満面の笑みで言っても説得力皆無だぞ？

悠翔「つーわけだ、ガンなんとか。俺はエヴァの従者を止めるつもりはない」

ガングロ「なっ……………本気か！？ソイツは化け物なんだぞ！？」

あ？今コイツなんて言った？

悠翔「テメー今なんつった？エヴァのこと化け物って言ったか？」

ガングロ「ああ、言った。だが事実だろう？そして、そんな化け物に手を貸す君も同罪だ。学園長、彼の相手を自分にさせてくれませんか？悪は『正義の魔法使い』である我々が叩かねば」

一度ならず二度までも……ただじゃおかねえ！

妖怪「ふむ……どうしたもんかのう」

タカミチ「僕は別に構いませんよ？」

妖怪「うむ、ではガンドルフィーニ君。君が相手をしたまえ」

ガングロ「はい！」

話をついたみたいだな………そうだ！

悠翔「いちいち絡まれんのも面倒だから、ガンなんとか以外で俺がエヴァの従者な事が気に入らない奴がいたら出てこい。纏めて相手をしてやるよ」

そう言うところ Aの連中と妖怪とタカミチ以外が全員構える

つてオイオイ、いくらなんでも多くね？流石にこの人数は骨が折れるよ？負けねえけど

エヴァ「お、おい悠翔………いくらなんでも無理があるだろう？」

ネギ「そうですね！死んじゃいます！」

悠翔「いや、もちろん死なない程度で済ませるよ？」

ネギ「悠翔さんの方です！！」

あーあー、五月蠅いな薬味坊主。黙って見てろ」

ネギ「僕は薬味じゃありません！！！」

悠翔「あるえ〜？声出てた？」

エヴァ「クククツ……ん？ああ、モロにな……ククツ」

さいですか、またですか。まあ、ふざけるのはこのくらいにして

悠翔「学園……妖怪さん、アーティファクト使っても？」

妖怪「別に言い直さんでも……アーティファクトは使ってよいぞ」

妖怪がいじけてるけど、キモいだけだから、マジで

悠翔「そうですか、じゃ、アデアット」

パクティオーカード（このかver）を空に向かって投げる

悠翔「さて、戦う前にお前達に一つ言いたい事と、聞きたい事がある」

ガングロ「なんだ？命乞いなら聞かんぞ？」

『正義の魔法使い』が何処の悪役だよ？コイツ等

悠翔「そんな事しねーよ」

脱げ女「じゃあ、何ですか!？」

やっとガングロ以外が喋った。というか、俺のガンなんとか発言には誰もツッコまないのな

俺はエヴァの頭を撫でながら言う

悠翔「知ってるか？人は皆…心に音楽を奏でている。それは、人それぞれ違う。お前達『正義の魔法使い』に聞こえるか？たった十歳で無理矢理吸血鬼にされ、ただ吸血鬼と言っただけで、お前達のような『正義の魔法使い』に追われ、六百年間たった一人で孤独に生きてきた、エヴァの心に流れる哀しみの音楽が！」

エヴァ「悠……翔」

悠翔「聞こえるのならば、その命で償え。聞こえないならば、貴様等に生きる価値などない！！蝙蝠もどき！力を貸せえ！！」

俺がそう叫ぶと、空から蝙蝠が飛んでくる

キバット？世「悦べ、絶滅タイムだ……ガブリッ」

エヴァ「その蝙蝠……まさか！？」

知ってるのか？そんなわけないよな………後で聞こう

今はコイツ等を潰すのが先だ

悠翔「変身……」

俺は仮面ライダーダークキバに変身した

エヴァ side

初めて悠翔に会ったとき思った事は「何だこの馴れ馴れしい奴は？」
だった

夢か何かと勘違いしたのか、私の目の前で茶々丸に飛び付こうとしたのも、今では良い……まあ、あまり良くはないが、思い出だ

その後話す内に、異世界から来たことを知った

そして私が吸血鬼である事も知っていた

それでも尚、私に対する態度を変えようとはしなかった

その時、四十年前ただ一人私を拒絶しなかった、奴の面影と悠翔が
ダブって見えた

それから一緒に過ごす内、悠翔の存在が私の中で大きくなっていった

そして、段々とゼロに対する気持ちが薄れていった

だが、不思議と嫌な気分ではなかった

能力を封印されているとはいえ、吸血鬼の真祖である私を、平気で殴るわ、頭は撫でるわ、足も舐めるわ、拳げ句の果てにキスマでするわ

ま、まあ嫌ではなかったが……… / / /

話が反れたな

まあ、そうして生活する内に悠翔に惹かれ始めている自分に気付いた訳だ

それと同時に怖くなった

悠翔が私の事を何処まで知っているのか、もし私が吸血鬼だという事だけしか知らないなら、全てを知ったときどうなるのか

悠翔に拒絶される、そう考えただけで胸が苦しくなった

悠翔が、私が何百人もの人間を殺したのを知り私に真偽を確かめた時、本当に怖くなった

悠翔の顔には表情がなく、まるで機械のようだった

私は迷ってしまった

このまま真実を話さなければ……そう考えた

でも所詮はその場しのぎ、いつかはばれる

これからも共に過ごせば、この気持ちはどんどん大きくなる

そうなった時、悠翔が私を拒絶すれば、私はきつと壊れてしまう

そう考え、肯定することにした

私の中では、拒絶されたらどうしよう。そんな考えしか浮かばなかった

まあ結果的に言えば、その心配は杞憂だったが

悠翔は全てを知って尚、私の味方だと、従者を止めるつもりはないと言いきり、私が止めるのも聞かず『正義の魔法使い』全員に喧嘩を売っていた

私の為に戦おうとしてくれている。そう思うだけで、胸に暖かい物が広がっていく

ああ、やっと分かった……私は悠翔が”好き”なんだ

ゼロ、二十年も私を放置しおって……貴様など私からフってやる！

そして悠翔……お前は私のモノだ。誰にも渡さんからな？

とりあえず戦いが終わったら、色々と聞かせて貰おうか。ゼロの使

っていた蝙蝠にソックリな、その蝙蝠について……………な

エヴァ side out

俺はまず、波動によりキバの紋章を空中に出現させ、ガングロ以外の男連中を捕縛、電撃を浴びせ、そのまま紋章を下ろし、指パツチンで爆発させる

そう、ファンガイアに大牙が殺ってたアレだ（誤字にあらず）

まあ耐えきれぬ筈もなく、全員綺麗に気絶した

女性陣はジャコーダービュートを使い叩きまくった後、縛り上げ刹那と真名に監視させている

何人がナニかに目覚めかけてたけど、見なかった事にしよう。ウン、そうしよう

そして……………残るはガングロ唯一人

さて、どうやって料理して殺るのか？（しつこい様だが誤字にあらず）

とりあえず呆然としているガングロをキバの紋章で張り付けにする

ガングロ「グアアアアア！」

悲鳴上げてるけど、しばらく放置だな

良い気味だ。エヴァたんを化け物扱いするからそうなるのだよ

うーん……………よしガングロの調理法決めた！

キバの最終回での戦闘を再現する！！

悠翔「ハアアアアア！」

俺はガングロを引き寄せ殴る

飛んでいったガングロはキバの紋章に叩きつけられ、再び電撃を浴びる

もう一度引き寄せ、今度は蹴り飛ばす

再びキバの紋章に叩きつけられ、電撃を浴び悲鳴を上げる

ガングロを俺の後方に飛ばし、飛び上がってチョップとパンチを喰らわせる

実はこの時点でガングロがヒドイことになってたりする

最後はライダーキックだな。スネーキングデストロイヤーで吊るしてないけど、まあいいや

『ウエイクアップ2』

周りが夜になり、赤い月が現れる

俺は空に飛び上がり、フラついているガングロにキングスバーストエンドを喰らわせる

ガングロ「ウワアアア!？」

綺麗に飛んでった

悠翔「ふい〜、終わった終わった。で？がk……妖怪さん、タカミチと戦った方がいいですか？」

俺はジャコーダービュートを回収しつつ、妖怪に問いかける

なんかちよつとトリップしちゃってる娘がいるけどな！主に脱げ女とかその妹分とか

妖怪「む、むっ……さつきから妖怪妖怪と……お主エヴァを化物呼ばわりされて怒ったんじゃ……」

悠翔「ハハハ……確かにな」

妖怪「じゃろう？ならワシのこと悠翔「だけど、本物の妖怪に妖怪と言ったらいけない道理はない」……ワシ泣いちゃうよ？」

泣くな、気持ち悪い。妖怪と呼ばれたくなかったら、まずその頭を何とかしろよ。っーかお前ホントにこのかの縁者か？どうやったら妖怪から大和撫子を体現したような孫が出来るのか知りたいよ。大体オメーとエヴァを一緒にすんなよ。エヴァは可愛い女の子だしね

エヴァ「なっ……／／／」

ん？何でエヴァ顔赤いの？可愛いけどさ

エヴァ「うっ……／／／」

向こうでは妖怪、もといバイオハザード人「ヒド過ぎるじゃろ!？」
うるせえ、地の文にツッコむんじゃねえよ

失礼……………まあ、タカミチに泣きついてたりする。実に気持ち悪い。
マジで勘弁してほしい」

ネギ「あの……………悠翔さん?声に出てますよ」

悠翔「え?えつと……………どの辺から?」

ネギ「妖怪と呼ばれたく　あたりからです」

ほぼ最初からじゃねーか。ああ、だからエヴァたんの顔が赤かった
のか!納得納得

なんかもうグダグダだ

閑話休題(便利だよねコレ)

悠翔「で?結局タカミチと戦った方がいいのか?」

妖怪「別に構わんぞい。なんせこれだけの人数を相手にして圧勝じ
やっただからな」

悠翔「そうか……じゃあ行くからな？あ、そうそう、あそこに転がってるガングロ、早く治療しないと死んじゃうよ？」

妖怪「そうじゃのう。誰か彼を治療してやってくれんか」

バイオハザード……長いな

ハザード人がそう言うと、何処からともなく黒子が現れガングロを連れていく

あ、そういえば超見てるんだよな

悠翔「超、盗み見はあまり良い趣味とは言えないぞ？まあ、今回は見逃してやる。その変わり、ネギにカシオペアを渡してやれ」

俺が殺っちゃったせいでネギ達が超を助けるイベントがなくなっただけからな

悠翔「さあ、行くこうぜ？エヴァ」

エヴァ「ああ」

超 Side

超「アヤー、気付かれたネ」

ハカセ「しかし何故カシオペアの事まで……………」

超「そうネ、何故未来の技術であるカシオペアをゆうとさんが知ってるネ」

ハカセ「何か知りませんか？」 陽光”さん」

陽光「んー……………そう言えば兄貴、前に「断片的だけどある程度の未来がわかる」って言ってたぜ？」

ハカセ&超「それだ（ネ）！」

ハカセ「そうになると計画に気付いている可能性もあります」

超「確かにネ、でもあの考え方は素敵過ぎるヨ。是非仲間になりたいところネ」

陽光「多分無理だと思っぞ?」

八カセ「何故ですか?」

陽光「あれでも一応教師だからな」

超「……………なるほど」

八カセ「……………」

超「ふふっ……………ホントに面白い人ネ、ますます仲間にしたくなつたヨ」

麻帆良祭開始！！

今日から麻帆良祭本番だ

で、俺はエヴァ、チャチャゼロと一緒にまわっている

因みにチャチャゼロは俺の頭の上だ

お！ネギだ

刹那と二人だけなところを見るに、二回目か？

そう言えば、この二回目って言うのも相手の捉え方で意味が変わってくるよな。麻帆良祭二回目と捉えるか、タイムスリップ二回目と捉えるかで大分変わる

果てしなくどうでもいいがな

それよりエヴァたん、君はいじめっ子かい？チャチャゼロ、君はその物騒な思考をなんとかできないかな？なんかこの二人？というところ精神がガリガリ削られていくんだが……

まあ、味方宣言しちゃった以上エヴァたんから離れる訳にもいかないしね。元から離れるつもりないけど

ああ……… 陽光は今頃何やってるかな、きっと超包子で忙しく働いてるんだろうな

……… ウン、現実逃避は止めよう

余計に虚しいだけだ

悠翔「よお、ネギ」

ネギ「あ、悠翔さん！助けて下さい」

おーおー、薬味坊主よ。泣きついてきてもダメだぞ？俺はシヨタは嫌いだからな。ロリ？大好物ですが何か？むしろペドかも知れないからな、俺

悠翔「ところでお前達、”二回目”か？」

麻帆良祭の方の意味だね

ネギ「えうつ！？なな、なんでそれを！……あつ……なんの事ですか？」

いやいや遅いよ薬味坊主君。そんなだから薬味坊主なんだよ、ホントにこの薬味坊主は駆け引きには向かないな、超テンパってんじやねーか

刹那「あの……悠翔さんは……ご存知なんですか？」

悠翔「ご存知なんですよ？」

エヴァ「オイッ！さっきから私を無視して話を進めおって！！悠翔、”二回目”とはどういう事だ！？」

悠翔「あー、それについては後で説明するよ。とりあえず、お前達は行け」

ネギ「ハ、ハイ！！」

刹那「ありがとうございます」

別に礼を言われるような事をした覚えはないんだけどな

で、只今エヴァさんに説明中な訳だ

ダークキバについても合わせてね

エヴァ「なるほど……本当に異世界から来たんだな、お前は」

悠翔「信じてなかったのかよ!？」

エヴァ「イヤ……ただ再認識しただけだ」

悠翔「そうかい」

エヴァ「しかしタイムマシンか……非常識だな」

俺からすればこの世界も十分非常識だけどね

タイムスリップならハイパーカブト使えば俺も出来るし

悠翔「まあ、面白ければなんでもいいじゃん。さ、行こうぜ」

エヴァ「たんの頭を撫でる」

エヴァ「あ、ああ……フッフッフ」

チャチャゼロ「ケケケ、楽シソウダナ?ゴ主人」

エヴァ「茶化すな!／／／」

エヴァたん赤くなったら

悠翔「…………可愛い」

エヴァ「ぬう…………／／／」

チャチャゼロ「悠翔、オマエワザトダロ？」

悠翔「エ？ナニガ？」

チャチャゼロ「マネスンジャネーヨ」

悠翔「マネシテネーヨ」

エヴァ「ハア…………頭痛くなってきた……………」

呆れられた……………」

その後、パトロールも兼ねて、学祭をぐるぐるしていると、夕映と

ネギと小太郎を発見した

面白そうだし行くか

悠翔「エヴァ、ちよっくら行ってくらあ」

エヴァ「む……わかった」

チャチャゼロ「ケケケ、浮気スンナヨ」

しないよ、多分、きっと、メイビー

悠翔「おっす、ネギ。三回目のご苦労さん」

ネギ「あ、ゆゆ悠翔さん！」

小太郎「よーっす兄ちゃん」

夕映「あ……こんにちはです」

悠翔「おう」

夕映「あの……ところで先程の三回目とはまさか……」

悠翔「ん？タイムスリップのことだよ？」

夕映「やはり悠翔さんも知っていましたか」

そりゃあ、超にカシオペア渡すように言ったの俺だしね

その後は夕映の哲学ショーだった

しかし愛とか本当の強さとか、本当の戦いを知らない奴の言葉だよな

皆さん忘れてるかも知れないけど、俺はあの糞爺に小学生の頃、アフガニスタンの紛争地域とかに放り出されたりするからな？

本物の戦場で愛だの強さだの言ってる暇なんてないんだよ

昨日の味方は今日の敵、昨日まで元気にしてたヤツが今日には消し炭に変わってるんだ

人だって何人殺ったかわからない。十人殺した辺りから数えるのはやめた。虚しいだけだからな

で、だ。そんな所に小学生が放り出されてみ？人生観位変わるだろ？

ホントあの糞爺の人脈は今でも謎なんだよ。本当はあの糞爺が一番チートなんじゃね？

ま、そのお陰で守れたモノもあるんだけどね

悠翔「そう言えば夕映、学祭一緒に回ろうって約束してたよな？今からいかないか？」

夕映「ハハ、ハイ！わかりました。仮装してくるので、待っていてほしいです」

悠翔「つー訳で、俺は夕映と学祭まわるから」

ネギ「はい、わかりました。ところで悠翔さんはまほら武道会には出るんですか？」

悠翔「もちろん」

ネギ「そうですか。じゃあ、失礼します」

小太郎「兄ちゃん出るんやったら、面白くなりそつやな」

そう言つて遠ざかつていく、ネギと小太郎
隣にはいつの間にか着替え終わつてる夕映
いつ現れた？

夕映「お待たせしたです」

悠翔「あ、ああ」

ところで夕映さん。貴女何処の幻想郷からいらつしやいましたか？

悠翔「じゃあ、行くか？」

夕映「ハイです」

その後は夕映と楽しく学祭をまわりました

その夜、龍宮神社にて皆と合流し、まほら武道会にエントリーした
賞金一千万は欲しい

で、俺は今まほら武道会の予選会に参加中なんだが………

悠翔「なあチャチャゼロ、なんでお前は俺の頭の上にいるんだ？」

チャチャゼロ「ケケケ、イイジャーネーカ。悠翔ノ頭ノ方が乗リヤス
インダヨ」

悠翔「別にいいけどさ」

そんな風にチャチャゼロと駄弁っていると、まほら武道会の予選会
が始まる

まあ、速攻で終わったけど。見かけ倒しが多すぎる

そう言えば脱げ女が見当たらないな

俺も二回目いきますか！

予選会を通過し一日目の打ち上げの最中、ネギ、小太郎と共に時間跳躍し、一日目の昼頃に戻ってきた

で、しばらくネギ達と一緒にホラーハウスの呼び込みをしている

にしてもネギ、ミニスカ風狐娘似合いすぎだろ（笑）

その後、あやかと共に学園祭を回り、今はコスプレコンテストの会場にいる

確か千雨がいたはず……………いた

悠翔「おーい、ちうたーん！！」

千雨「げっ！？てめーら……………!?!？」

悠翔「よっ！見に来たぜ」

千雨「な…：なな…：…とにかく！ちょっとこっちこい！！」

そう叫ぶやいなや俺の手をとり引きずっていく。そして人気のない

部屋に連れ込まれた

ココだけ読むと卑猥だよな。実際はちうたんに拉致られたんだけどさ

千雨「何で悠翔さんがこの場所を知ってるんですか!？」

悠翔「忘れたか?俺がちうのホームページ毎日見てるの」

千雨「あゝっ……そう言えば前にそんなこと……」

悠翔「まあ、そんなことはどうでもいいんだよ。問題はちうがコンテストに出るかどうかなんだ」

千雨「いや……別に私は……」

悠翔「え?出る?出るのね?出るんだよな?出るんだ」

千雨「イヤイヤ!何勝手に決めてんだよ!？」

悠翔「そうと決まれば早速登録DA!」

千雨「ちよっ……引きずるなー!!」

俺が千雨を引きずって行くと、ちよっどネギ達がまき絵と合流していた

で、千雨の登録を済ませたまき絵とあやかが戻ってきたんだが

なつとらん!全……然なつとらん!!

なんだよナースのコスプレって!?あざとすぎるだろ!?!って千雨
がキレてた

俺?エヴァたんか刹那辺りなら有りかな……このかはミニスカ狐
巫女かな?

悠翔「で?もう登録しちゃったから出るしかない訳だけど……ど
うすんの?」

千雨「てめーのせいだろ!?大体私はいいんちよやまき絵みたいに
ナチュラルボーンキレイカワイイじゃないんだよ!私が出たって結
果は知れてんだ。っー訳で私は出ない」

悠翔「ふむ……了解した。さ、着替えようか」

千雨「は？人の話聞いてたか！？っーか引きずるなっの！！」

悠翔「さーて何着る？やっぱルーランルージュかな？」

千雨「ええい！H A N A S E E！！」

悠翔「うん、それ無理」

千雨と話していると飽きないなあ

で、その後千雨を着替えさせて、ステージに放り出す

やー、可愛いな、ちうたん

おお……優勝したみたいだな

ん？ネギと小太郎が糸を引っ張ってるな……あ

確かアレで千雨の服が脱げちゃうんだっけ？

しょうがない、見たいけど好感度を上げておくのも重要だしな

千雨「バカやめろお前ら、その糸はコスチュームの……あ、っ……」

うははははwww千雨をからかうのはホントに楽しいな

こうして一日目が終了した

さて、明日は武道会本選だな

まほら武道会開始！っていきなり失格かよ！？（前書き）

今回ちょっと悪乗りしちゃいました

いや、風邪引いてるなか書くもんじゃないですね。途中から何がしたいのかわからなくなってきました

まほら武道会開始！っていきなり失格かよ！？

ということだ麻帆良祭二日目

昨日は中夜祭に巻き込まれ、朝の4時まで騒いでたからな

で、只今別荘にて準備中なんだか………ウン、一言言わせて貰おう

スク水サイコオオオ！！！！

つとまあ、それは置いといて

ネギと小太郎が練習してるから、そっちに行こう

小太郎「おー兄ちゃん、起きたんか」

ネギ「あ、悠翔さんおはようございます」

悠翔「おはよう、二人とも。ん？ネギ、それって『戦いの歌』か？」

ネギ「はい、無詠唱で出来るようになったのはつい最近ですけど」

小太郎「呪文なしだとほとんど気を集中させるのを見た目変わらん」

悠翔「それでもないぞ、見てみるか？俺の強化術。小太郎なら練習すれば出来ると思うぞ」

小太郎「マジか、兄ちゃん！？頼むわ」

悠翔「おう」

しゃっ、久しぶりにやりますか

悠翔「界王拳！！」

界王拳を使い、俺の体が赤い気に包まれる

小太郎「おおお！なんやソレ？なんやソレエエエ！？俺もソレ使えるんか！？」

悠翔「ああ、出来ると思うぞ？なんなら教えてやるよ」

小太郎「マジか！？なら、頼むわ！！」

って訳で小太郎に界王拳のレクチャーを始めた

その後しばらく小太郎の指導をしていたけど、ネギに瞬動を教えるため中断した

おーおー、元気にコケまくってらwww

んー…そう言えば、闇の魔法で界王拳を術式兵装したらどうなるのかな？

まさか、スーパーサイヤ人か！？ネギにならって漢字四文字で表すなら『超菜野人』かな？

カッコわる！！

つと、ゴチャゴチャ考えてる間にエヴァたんが来ていたみたいだ

小太郎が何故ネギに戦い方を教えてないか、聞いている

うーん、戦い方なら俺が教えてる筈なんだけどな………主に殺られる前に殺れとか、相手が自分より格上の場合は自分の長所で攻めろ、急所を狙えとか、ポーカーフェイスとか………あれ？大して戦い方教えてなくね？ほとんど心構えみたいなものだし

エヴァ「おい、悠翔。お前にはコレをやるつ」

悠翔「ん？ああ、ありがとう」

どうやら考えてる間にネギに指輪を渡していたみたいだな

で、今俺がエヴァたんから受け取ったのも指輪

……………まさか!?

悠翔「婚約指輪ですか!?!エヴァさん!?!」

エヴァ「なっ……………ノノノバカを言うな!!大体不老不死である私が婚約など……………あ、イヤ……………べ、別に嫌とかそう言う訳ではないんだかノノノ……………やっぱりそういうのは男から欲しいというか……………ええい!!とにかく!それは婚約指輪などでは断じてない!!もし、本気で私と婚約したいなら私が満足できる指輪をお前が用意しろ悠翔」

悠翔「安心しろ、冗談だ」

エヴァ「キイイイイサアアアマアアア!!一億回こら悠翔」半分本気だけだな……………む、むう……………そうかノノノならいい」

いいんかい!?

で、結局その指輪は杖の代わりになる指輪だった

ゼロに貰ったのを真似して作ったとか。まあその指輪は俺を召喚した時の媒体にして、壊れたらしいけど

まあ、その後ゴチャゴチャあって武道会本選の会場に到着した

にしても怪しい連中がいっぱいだな

あ、因みに俺の相手は何故か予選にいなかった脱げ女の穴埋めで田中さんだ

でまあ、試合が始まった訳だが、内容は特に原作との違いもなかったので、割愛させて頂く

そして俺の試合だ

つーかネギ達がいなくなったんだが………なんか俺だけハブられる気がする

朝倉「さあ、第五試合に出場する選手は、麻帆良大学工学部所属、田中選手！片や我等が3 A 副担任にして、麻帆良女子中等部アンケート、彼氏にしたい先生、お兄ちゃんにしたい先生NO.1！神代悠翔選手だああー！！」

おーい！色々とツッコミ所満載だぞ！？

アレ？ファイズか！？

ハカセ「さあ、見せてあげましょう。科学の力を！田中さん！！」

田中さん「ja!！」

あれ？返事がデバイスっぽいんですけど！？具体的には古代ベルカ的な感じで！！

って、ふざけてる場合じゃ無さそうだ

田中さん「スタンバイレディ、ソニックフォームセットアップ」

オイオイオイ！！マズイだろイロイロと！？てゆるか混ざってんだよ！！てかこの世界にジヨジヨもリリカルなのは無い筈なんだけど………なんで知ってんの？

って知らない内に田中さん消えてるし！！

悠翔「ヤベッ……ガッ!？」

急いで構えたが間に合わず、田中さんに後ろから殴られる

その後も右から左から拳やレーザーが飛んでくるのを、なんとか捌いていく

てゆるーかレーザーは洒落にならんってマジで！いや結構切実に！！

ハカセ「ふむ……システムは良好な様ですね。ではこの戦闘データを他の田中さん（量産型）に組み込んで……ブツブツ」

ん？今聞いた感じだと、まだコイツは試作品なのか？……って！ヤバーじゃん田中さん（量産型）がみんなコイツみたいになっちゃったら、ネギ達に勝ち目ねーじゃん

しゃあねえ

悠翔「テメーはここでブツ壊す」

高速移動を止めた田中さんを指差しながらそう宣言する

田中さん「ヤレルモノナラドウゾ」

悠翔「言うね〜。じゃ、遠慮なく……来いザビーゼクターー！！」

そう叫ぶと予めアデアットしておいたザビーゼクターが飛んでくる。

周りでは「蜂!?」「デカツ!?」などの声があがっている

裏の関係者はそれほど驚いてな

朝倉「はっ蜂です！なんかミョーにデカイ蜂が飛んできました！！
てか大丈夫なのー!?」

ネギ「あわわわわわ、みみ皆さんおお落ち着いて下さ〜い」

明日菜「は、蜂！蜂〜!?」

くもないな〜……………まいいや

ザビーゼクターは田中さんに攻撃を仕掛け、俺の元へ飛んでくる。
俺はザビーゼクターを掴み、左手首に嵌めてあるライダーブレスに
装着する

悠翔「変身!」

『ヘンシン』

朝倉「おーっと！悠翔選手、突然鎧の様なものを身に纏った〜!!
てゆーか反則じゃないのアレ!?!」

超「武器じゃないから大丈夫ネ」

朝倉「主催者から許可が下りたので試合続行です!!」

ステージ脇で言い合う超と朝倉。わざとらしいな、まったく

田中さん「ヨロイヲキタトコロデ、ワタシニハカテマセンヨ」

悠翔「フツ、コイツをただの鎧だと思っアーマーなよ？朝倉、超。怪我したくなかつたらしゃがめ……キャストオフ！」

『キャストオフ チェンジ・ワスプ』

二人がしゃがんだのを確認し、キャストオフする

弾けたアーマーが四方八方に飛び散る。幸い客席までは届かなかつたようだ。朝倉と超は若干涙目だが

ハカセ「な、なんだかよく分かりませんが、田中さん！殺っちゃって下さい!!」

田中さん「ja!」

ちよっ！殺るの字違う！このポケいったい何回すれば気が済むんだよ！？それからベル力的な返事についてはもうツッコまないからな！！

とかゴチャゴチャ考えてる間に田中さんが高速移動を開始する

よっしゃ、俺も行きますか

悠翔「クロックアップ！」

『クロックアップ』

ベルトのバックル部分を擦り、クロックアップする

そして常人の目で見れば消えている、ある程度実力の有るものでも何かが動いている程度しか分からない、高速の戦いが始まった

まともに視認出来るのは、おそらく学園ちよっ…失礼、ハザード（妖怪）クラスの実力者だろう。まあ、それはあくまで、高速度移動している田中さんだけで、光速度移動している俺は見えないだろうけど。というか根本的にタキオン粒子の流れてない目にはクロックアップ中のライダーは映らないんだけどね

え？何を言っているか分からない？ググれ！

……あー、すまん。ググれが言いたかっただけだ

まあそんなどうでもいい事は置いて、田中さんだ。高速では光速に追いつけないまでも、なかなか頑張っている

右から来る拳を右手で掴み、背負い投げの要領で投げ飛ばす。受け身をとり、今度はレーザーを撃ってくる。それを避け、接近、頭を掴み地面に叩き付ける。と、ここで互いに高速移動とクロックアツプが解ける

朝倉「は、速い！田中選手も悠翔選手も速すぎる！！もはや何が起こってるの分からない処か、何も見えませんでしたっ！！っつと、これはカウントをとっても良いんでしょうか……？」

あーうん、良いんじゃない？なんか田中さんの頭がバチバチいつてるし

朝倉「そ、そうですか？では、1！2！……9！10！試合終了！！悠翔選手の勝ちです！」

「「「ワアアアアアア！！！！」」」

よし、試合は終わったな………んじゃ

悠翔「ハカセ、悪いがコイツ（田中さん）は破壊させてもらう。ライダーステイング！」

『ライダーステイング』

朝倉「ちよつと悠翔さん！？試合終了後の選手への攻撃は反則ですよ！」

悠翔「知るか！！ハアアアアア！！！」

うん、結果から言うと田中さんは大破、というか跡形もなくバラバラになった。おそらく修復は不可能だろうな。まあネギとかにあそこまでする必要はなかったんじゃないかとか、ハカセに謝れとか言われたので

悠翔「学園祭三日目に同じこと言えたら謝ってやるよ」

って言つといた。言えるわけねえよな？あんなん量産されたら勝ち目ないもんな

まあ、そんな訳で、失格になりました

ゼロの正体！って、え？ちよっ！嘘だろ！？（前書き）

さて、今回でいろいろ秘密が明かされます。ぶっちゃけ秘密ってほど伏線張れてませんが

ゼロの正体！って、え？ちよっ！嘘だろ！？

さてさて、晴れて失格になった訳だが、何しようか？暇なんだよな
まほら武道会に出てないと。……超にちよっかい掛けに行くか、
タカミチと一緒に

あーそうそう、ネギの試合は原作通りネギの勝ちで終わった。若干
の違いはあったけどな。ほら俺ネギにイロイロ教えたじゃん？それ
が混ざってたのと、桜華崩拳さ……桜華無拍子になってたんだよ
ね。いや普通桜華崩拳も使ってたよ？だけど最後の決め技が……ね
まあそんなこんなでいろいろあって、俺はタカミチ、ちびせつなど
一緒に地下下水道に来ている

悠翔「でさあ、チャチャゼロといいお前といいなんで俺の頭の上に
乗るんだ？飛べるんだから飛べよ」

ちびせつな「良いじゃないですか、悠翔さんの頭の上は落ち着くん
です」

ダメだコイツ。しょうがないか、ヴァカだもんなあ……

ちびせつな「む？今何か失礼な事考えませんでしたか？」

悠翔「いや、ただちびせつなはヴァカだなあ、って思ってただけさ」

ちびせつな「じ、十分失礼じゃないですか〜!」

タカミチ「ハハハ、君達は仲が良いね？」

初対面だけどな!

タカミチ「それに、本体と違ってちびせつな君は明るいカンジだね」

ちびせつな「ちょっとバカなので」

悠翔「認めてんじゃん!」

ちびせつな「あゝっ!あゝうっ……そそ、そうですヴァカとバカは
違うんです〜」

タカミチ「いっしょだと思っけど……」

悠翔「だろ?」

ちびせつな「うゝ二人とも酷いです」

そう言つてポカポカと俺の頭を叩く

てゆーか何時まで頭の上に居るんだよ!?

ちびせつな「何時までも、ですかね?」

だから心を読むな!!!

超「やれやれ、こんな所まで来てしまった力」

真名「ネギ先生にもらつたダメージは大丈夫ですか?高畑先生」

陽光「田中さんブーツ壊したのは、流石にやり過ぎじゃね?兄貴」

陽光?しばらく姿見ないと思つたらそつち側に就いてたのね

陽光「兄貴がああ合法ロリババアの吸血鬼にはっか構つてて、全然オレの相手してくれないのが悪いんだ!」

えっ？そうゆう理由！？

タカミチ「どついう事だい？」

真名「仕事です」

陽光「趣味だ」

趣味かよ！？

超「元担任と副担任に対し申し訳ないが、私には時間がないネ。明日、学祭が終わるまでの少しの間、おとなしくしてもらっヨ」

あちゃー、流石にこの状況は厳しいな。真名と超だけなら何とかあったけど、陽光までいるとなると不用意にアーティファクト使う訳にいかないしな

つて！ゴチャゴチャ考えてる間に超が後ろに！？

超「悪いケド、ゆつとサンには生半可な反則技は通じないらしいからネ。取って置きの反則技を使っヨ」

超が、そう言っただ俺の背中に銃弾の様なものを押し付ける

取って置きつてまさか……時間跳躍弾か!?

超「その通りネ」

悠翔「残念だったな?俺はカシオペアが無くても時間跳躍出来るんだよ!」

超「フフフツ、それについても事前に陽光さんから情報は取得済みネ。だから造ったヨ。跳躍した先から戻って来れなくなる時間跳躍弾をネ!もちろんしばらくすれば自動的にコツチの時間に戻って来るヨ」

は?ちよつ!ふざけんな!!

超「ただ、急遽造ったよせいでイロイロと未完成ヨ。例えば跳ばす先の時間を選べないとか、跳んだ先でどれくらい過ごせばコツチの時間に戻って来れるか分からないとか、正直何が起こるか分からないとか、問題が山積みネ」

悠翔「なるほど……ってオイ!問題だらけじゃねーか!寧ろ問題しかないよな!?!てゆーか最後ぶっちゃけたな!!結局何も分から

ないんじゃないか!!」

超「そうとも言うつネ」

そうとしか言わねええええ!!!!何コレ?ねえ何コレ!?泣いてイイ?

陽光「まあ、そんな訳だから、時間旅行を楽しんで来てくれよ兄貴。これ饑別な?」

ん?おお、ゼロのコスプレ衣装か。コレで跳んだ先で正体隠すのに困らないな。ありがとう……って!助けるよ!!妹だろ!?

陽光「やつ、今は他人だから」

うわっ、酷っ!俺はお前をそんな風に育てた覚えはないぞ?お兄ちゃん悲しい!

陽光「キモッ!」

悠翔「うん、正直俺も痛いなって思った」

ああ、痛い！何が痛いかって超と真名とタカミチの視線が痛い！そして何より心が痛い！！

おれは めのまえが まっくらに なった

悠翔「知らない天井だ……天井ないけど」

広がってるのは青空です！そして周りには木、樹、鬼、森林浴にはもってこいだね！最後の鬼が無ければだけどね（泣）

さて、そろそろ現実逃避は止めて、現実を見よう

「飯イイイイ！」

悠翔「ギャアアアアア！？」

うん、現在進行形で、オーク鬼？のような奴に追いかけてます。てか、オーク鬼って喋れたんだね

ああ、もう！しつこいな！！

悠翔「消し飛ばせ！ビッグバンアタック！」

ドガアアアアアン！！！！！！

あるえ〜？こんなに威力ない筈なんだけどな〜？オーク鬼処か、辺り一面吹き飛ばしちゃったよ……………時間跳躍の影響か？

これは能力の再確認をした方が良さそうだな

ふう……………さて、能力の確認が終わりました

えーまず、気が有り得ないくらい増えてます。ええ、もうラカンやナギなんか目じゃないくらいに。会ったことねーけど（笑）

それから魔物とか精霊と対話が出来るようになりました。精霊に関しては、普通の人間には対話処が見ることも出来ないらしいけど、今も俺のすぐ横で風の精霊王であるシルフがクウと喧嘩してます。曰く「おにいちゃんはボクの物！」らしいです

ええ、モテるのはいいんですが、正直周りの迷惑も考えて欲しいなあ。お前達が喧嘩すると、それでなくても消し飛ばしちゃった森が、さらにハゲ散らかっちゃうんだけど……………あ、セリアに怒られてるわ

まあ、今のを聞いて分かる通り、アーティファクトにも影響が出る
まずCDの方だが、アデアットさえしておけば、召喚しなくても自
分の意思で出てくれるようになった。まあ、ちゃんと召喚した時に
比べて力は落ちるそうだが。力が落ちてるのに精霊王とガチで殺り
合えるクウにちょっとビビったのは内緒だ

あと王の財宝の方だが、武器以外も出せるようになった、しかも消
耗品もあり！まあ、相変わらず生物関係はダメだけだね

それと、今の俺の格好だけど、ゼロの格好してます

だってさっきオーク鬼吹き飛ばした時に服がボロボロになっちゃっ
たんだもん

悠翔「おーい、セリア、クウ。そろそろ行くから戻れ」

あ、そうそう。シルフ曰く、精霊王と『お友達』になれば魔力を使
わなくても魔法を使えるそうだ。そもそも魔法とは、魔力と詠唱で
無理矢理精霊を従えて起こしているらしい。その点、精霊の頂点に
立つ精霊王と『お友達』、所謂盟約を結べば魔力も詠唱もなしで魔
法を使える様になるらしい

まあ、そんな訳で、いろいろパワーアップしました

さて、町を探しますか。まずは此処が何処でどの時代か調べなくち
やな

そう思い歩き出すと、近くの茂みから人影が飛び出してくる

？「貴様、何者だ？まさかとは思うが私を倒しに来た命知らずか？」

あん？おお！エヴァたん！んー、この様子だと俺は過去に来たみたいだな

つて、ん？あれ？え？ちよつと待てよ

今の俺の格好は？ ゼロ

目の前にいるのは？ おそらく過去のエヴァたん

じゃあ、過去に唯一エヴァたんを受け入れたって言う、ゼロの正体は？

.....

.....

.....

.....

俺かああああ！orz

ゼロの正体！って、え？ちよっ！嘘だろ！？（後書き）

ええ、大体気付いてた方が大多数だったと思います

ちよっは無理矢理かな？とも思いましたけど、そこは文才がないので許してやってくださいや………失礼、かみみた

近況報告（前書き）

さて、今回も作者は暴走気味です

近況報告

エヴァ「なあ、ゼロ。いい加減仮面を取れ」

ゼロ「フツ、それは無理な相談だな」

エヴァ「何だと！私が取れと言ったんだ。さつさと取れ！」

ゼロ「はあ……お前はアレか？何処かのお姫様か？」

エヴァ「やはり貴様は殺す！」

ゼロ「止めとけ、また氷漬けになるぞ？」

エヴァ「ぐ、ぐづうううう……」

はい、あの森でエヴァさんと出会ってから、二年が経ちました

いきなり時間が飛んでる事に関してのツッコミはなしの方向で……

……いやまあ、無理ですよ

まあ実際大したこと無いんですけどね

あの後エヴァさんに敵ではない事を長々と説明して、エヴァさんを狩りに来たハンター達を撃退して、なんとか信用を勝ち取り、エヴァさんと旅を共にし始めた訳だ。で、特に行く宛もないそうなので、とりあえず他の精霊王と盟約を結ぶ為に、世界各地を回ろって話になったんだ。んで現在、風の精霊王・シルフ、闇の精霊王・シャドウ、氷の精霊王・セルシウス、雷の精霊王・ヴォルト、水の精霊王・ウンディーネ、火の精霊王・イフリートと盟約を結んでいます

因みに今居るのは魔法世界ね？なんか時間跳躍だけじゃなく、次元跳躍もしてみたみたい

あ、後エヴァさんに闇の魔法を教わってます。俺の魔力自体はそんなにないけど、シャドウと盟約を結んだ事によって使用可能になった

エヴァ「……い！おい！聞いているのか！！」

ゼロ「ん？ああ、悪い。で、何だ？」

エヴァ「だから仮面を取れと……！！」

ゼロ「無・理」

エヴァ「グググ………ならばその仮面、無理矢理剥いてくれるわ！
行けチャチャゼロ！！」

チャチャゼロ「アイサー、ゴ主人」

こうして時々仮面を剥こうと襲いかかってくる以外はいたって平和です

ゼロ「しょうがないな」

仮面を取られるわけにはいかないしね

ゼロが決して仮面を取らなかつた理由がやっとわかったよ。取れるわけねーよ、未来人だもんなあ

まあいいや、とりあえず襲い掛かってくる二人を何とかしよう

俺達の戦いはまだ終わらない！！

とまあ、打ち切り漫画の最終回的な締め方をしてみたけど、まだ終わらないぞ？

五時間後

いや、流石に疲れたわ。まさか五時間もぶっ続けて殺り合う事になるとは思わなかったぜ

勝敗？俺の勝ちに決まってるじゃん

エヴァたんなら今水浴びに行ってるよ。汚れたから気持ち悪いんだってさ

え？俺は水浴びしないのかって？いやーそれがさ、時間跳躍の影響なのか歳とらなくなっちゃってさ、傷とかも受けてもすぐに治っちゃうんだよね。で、色々と考えた結果、俺もとい未来から（持って）来た物は時間が固定されてるみたいだ

まあ、そんな訳で水浴びしなくても服とか体が汚れる事はない

ただなんと言うか……記憶は残るんだよね。汚れた記憶とか感覚とか。そう考えるとやっぱり気持ち悪いじゃん？いくら綺麗でもさ

特にヤバいのは致命傷を負ったとき、死んだとき。死のうが何しようが瞬時にこの時間に体が戻るんだよ。だけど痛みとか記憶は残るから、初めて死んだときはマジで精神がイカれそうになった

ん？魔力？近づいて来てるな、狙いは……エヴァたんか

はあ……助けに行ったら、また怒られるんだろうなあ、曰く覗いたから殺す。助けに行かなくても怒られる、曰く私のピンチに助けに来なかったから殺す

うん、色々とツッコミ所満載だよな

もう疲れたからツッコミは読者の皆さんに任せます好きにツッコミを入れて、感想にでも書いといてください

まっ丸投げなんかじゃないからね!!

うえっ、キモッ!ダメだ、あまりにも疲れ過ぎて頭が上手く回らない

たださ、コレだけは言わせてくれよ

ゼロ「不幸だあああああ!!!」

近況報告（後書き）

悠翔「さて、逝こうか？」

作者「どうした、藪からスティックに」

悠翔「いちいちネタが古いんだよ!!」

作者「で、本題は？」

悠翔「スルーかよ……まあ、いや。まず一つ目、設定を捏造し過ぎだ！それからツツコミを読者様任せにするな！最後に精霊の名前！なんでTOP!？」

作者「まあ、それは置いといて。感謝コーナー、高天原 A様、刀様、ご指摘有難うございました。修正させて頂きましたので、今後ともよろしくお願いします。それではまた次回」

悠翔「俺を無視するんじゃないやねええええええ!!!!」

因みにTOPはテイルズオブファンタジアの略です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4972n/>

魔法先生の世界

2010年12月18日11時32分発行